

---

# 舞う玄鳥は天高く

モト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

舞う玄鳥は天高く

### 【Nコード】

N5536L

### 【作者名】

モト

### 【あらすじ】

魔法や工学が煩雑に溢れている、そして戦乱の耐えない、そんな時代……。巨大な塔がその領土の大部分であるヴァローナ皇国は空中空母ヴァストークと専用戦闘機ラストーチカを主力とし帝国アルディアナと開戦。この物語はラストーチカの操縦士であるロウ少尉とその周辺の物語。

「（イステイナ）」番外編です。

本編 <http://ncode.syosetu.com/n2866g/>

## プロローグ

空間に漆黒のインキをたっぷりと垂らし、溶かした様な闇の中で、ただ彼の持つてきていたマグライトの明かりだけが青白く手元を照らしていた。彼は繰り返し繰り返しウエスで丹念に自身の頭上にあるキャノピを拭いた。何度も明かりに当てて傷や油の汚れが無いかを確認してはまた拭く、そのルーチンワークを飽きずに繰り返していた。

こんな夜更けに空中空母の、それも収容庫になんてより付く人間がいる訳もない。彼には帰る場所など無きに等しかったし（寮があるが、一人者同士の相部屋だ。）、特に娯楽に興ずる性質でも無かった。その為、暇があれば自機の手入れに没頭するのだった、それがたまたま今日はこんな更けた時間まで掛かっているというだけであって、この空間にいる間は彼にとっては時間という概念など無きに等しいのだ。彼はそれほどまでに彼は自機を愛していたし、またそれを任された事が誇りだった。

薄青く輝く流線形の美しい、戦闘機、「ラストーチカ」

彼は祖国という物を知らなかった。彼の両親は帝国アルディアナに滅ぼされたどこかの国から、この国が……ヴァローナが独立を果たす以前、完全に帝国の支配下にある頃に、集団農場に働き手として強制的に連れて来られた云わば奴隷のような存在だったし、そうして農場で強制労働をさせられている頃に彼を産んだのだった。父親は戦争で追った傷（彼の国と帝国との戦争で）が元で早くに亡くなっていったし、母親が女手一つで彼を育て上げた。そんな気丈な彼女がたまにアルコールが入った際に寂しげに「この国には空が無い……。」と呟いていた。

塔で生まれ塔の中の景色しか知らない彼にとっては塔によって制御され投影されているディスプレイパネルの空が空だったし、だからその頃は彼女の言っている意味が解らなかった。後に、この塔を任されていたアダム元帥がこの国を帝国から半ば独立させた時、その頃に彼の母親は過労とアルコールが原因で亡くなったのだが、彼は彼女の言葉の意味を知りたくて、空軍に志願した。そうして初めて、空の意味を知った。突き抜ける濃紺が、終わりなく続く光景に彼は初めて母の心を想い涙した。そうして自由に無限に飛ぶことのできる翼をどうしても手に入れたくなった、だからそこから苦学して戦闘機乗りになったのだった。

そうしてつい先日、そういった勤勉な態度が認められたのかこの最新鋭機のパイロットとしての辞令が正式に彼の元に下されたのだった。貧困に喘いでいたあの頃の自分とはもう違う、俺は本当に翼を手に入れたのだ……。そう思うと嬉しくてついつい時間も忘れるほど、愛機のメンテナンスに余念がない。

「おやおや、こんな時間まで。随分と真面目な奴が居たものだ。」

暗闇の中から不意に声がした。それは収容庫の分厚い壁に反響して酷く湿り気を帯びて木霊する、男の声だ。

「俺の勝手だろ、冷やかしならお断りだ。」

「おや、それは失敬したな。しかしこんな時間に手明かりだけで、それほどまでにその機体が好きなのかい？」

「……。」

彼は声の主の少し呆れたような口調に苛立ちを覚えた。放っておいてくれないか、知らない男と長話する趣味はない。

「そうカリカリしないでくれるかい？ 最近の若者はコミュニケーション力が無さ過ぎるね。」

彼はこちら側からでも聞きとれるような大袈裟な溜息をつきながらそう言った。恐らくは両手を少し上げて肩を竦めているのだろうなあ、と彼はその見えない人物の仕草を想像した。途端に酷く面倒だという思いが込み上げる。こんな時間帯だ。恐らくは空母の整備員が忘れ物でも取りに来たついでか、あるいはもつとチンケな所と言えば清掃員かそんな所だろう、と彼は想像した。

「お前、名は何と言う？」

その人物からの不躰な質問に内心は煩悶としたが、はやくこの人物の興味を自分から取り去って愛機の整備に取り掛かりたいという思いから会話に一通り乗ってやる事に彼はした。

「イエーン・ルウオ少尉、皆、発音し辛いのかロウと呼ぶよ。」

「イエーン・ルウオ……ほう。お前自分の名前の意味を知っているか？」

「さあな。興味も無い。昔に滅んだ国の言葉だそうだ、ご先祖様の持ち物で俺たちの物じゃあない。やっかいな話だろ？ 覚え辛いと評判だね。お陰で未だに一人者さ、妹に先を越されてしまったよ。」

「そいつは気の毒様。……だが喜べよ、お前の大好きなソイツとお前は奇しくも同じ意味を持っているようだ。」

「へえ、そうなのか。それは初耳だ。」

彼……ロウは男の言葉を殆ど流して聞いていた。だがふと思う事がある、彼は彼の父母でさえ伝承と人名でしか聞いた事が無いという、遙か昔の民族の言語を解する事が出来たのだろうか……？

「なあ、あんた……一体……。」

ロウはキャノピを全開に開き、マグライトを暗闇に翳した。音源の方向を探る。光に切り取られて男の姿が浮かび上がった。白髪混じりの髪を長く垂らし、奇妙な民族衣装を身に纏っている、どう鼻屑目に見たって、空軍に所縁のある人物では無さそうだ。光に照らされて彼はその特徴的な紫の瞳を眩しそうに細めた。

不審だ… 敵か？ ロウはコクピットの座席の脇に置いていた護身用の拳銃を取り再び身を乗り出して構えた……が、その時にはもうそいつの姿はそこには無かった。

夢でも見たのか、俺は……。ロウは俄かに今し方の出来事が信じられずにシートに身を凭れた。キャノピを占めて外界との接点を極力遮断してみる。メインコンピュータに付随する小型のディスプレイが低照度で光っている、冷却ファンの回るノイズに似た音だけが狭い空間の大気を震わせた。

「同じ意味だ……。」「そう、彼は言っていた。だがロウにはそれが、どの発音が同じ意味なのか解らなかった。だがだとすると、俺の名は燕に由来しているのだろうか、それは男としては余り誇れる事ではないかもしれない。彼は思いそして一人声を忍ばせて笑った。夢の中で勝手に自分が作り上げた話なのかもしれないが、同じ名と言うのは尚更、気分は悪くない……。そういう考えに無意識化でも至っているのだとしたら、自分のこの気持ちは本物なのだろう、それでこそ戦闘機乗りになれた、という気がしなくもない。

ヘッドアップディスプレイには薄緑色の文字が浮かぶ。

(ヴァローナ皇国空軍)

6 -

(戦略航空隊 第6戦闘航空部隊)

「

「第八番機 ラストーチカ 「個体識別称：アリサ」

「 「

(搭乗者名：「ロウ」)

7

イエーン・ルウォオ……燕羅、彼の名はラストーチカ、空を、翔る。

「あつ……なんだよロウ、またヘッドアップディスプレイの対応表示言語プログラム変えたな？ 畜生、キリルは見辛いから駄目だつて言ってるだろ、WW（標準言語）表示に変えるぞ……」

翌日、機体チェックの為にロウの後ろ、後部のオペレーター席に乗り込んだ彼の同省であり相棒のヴィンセント・アルベルティ少尉が挨拶もそこそこに開口一番で舌打ちを打つ。

「俺にはそつちのほう馴染み深いんだ、ヴィンストと違ってね。」  
「出自は関係ないな、お前だって操縦士なら普通に読めるだろう？ キリルと専門用語のWWが混じって読み難いからって、何回同じ事を言わせるんだよ……表示言語はオペレーター優先、はいはい、では切り替えますよ。」

ヴィンストは彼独特の軽口を叩くと彼の所有する端末を接続し、プログラム部分を操作、表示言語の設定を変えた。瞬時に表示されていた文字が、ロウにとっては味気の無いように見える、整然と並んだ記号に置き換えられる。彼にとって感覚的にそれは文章ではなくただの記号の羅列でしかない。意味を瞬時に理解できても、頭の中で音声として置き換える事が難しいのだ。

ヴィンストの言う事は一理ある。科学、工学の分野における言葉はその専門分野において未だ他の国の追随を許さないアルディアナの持つ言語によって名付けられている物が多く、事実、ヴァローナの言語であるキリルでは未対応の物が多い、その為にどうしたってWWで表記するか、あるいは無理矢理に表音文字を宛がうかしか表記のしようが無く、その為ディスプレイ上には二カ国の言語が同居し

非常に見辛くなるのだった。その為、パイロット育成機関に入つてまず一番最初に習わされる事と言つたらWWなのだが、WWはその名が示す通り標準言語……つまり世界共通言語と言つても良い、一番使用する人間が多いこの言葉をたいていの人間ならば個人差はあれどある程度は修得している為、講義にはさほど時間は割かれない。

ロウも一通りの読み書き、ヒアリングに関しては他の隊員と同じくらい理解しているつもりだったが、決定的に喋るといふ事が苦手だった、操縦に関する所以外は、ではあるが。ヴィンスはそもそも南から来た難民だから、彼にとってはWWの方が解り易いのだろう……とロウは思っていた。だが実際ディスプレイに表示される情報をより多く捌かなくてはならないのはオペレーターだ。だから彼の望み通りに表示方式を変えられてもロウは何も文句は言わなかった。

ヴィンスもロウも訓練生時代からの付き合いで、ラストーチカ以前の機体に搭乗していた頃からのパートナー同士だ、気心も知れているし大概互いの癖も解りきっている。こんなやり取りは、ロウが収容庫に残った日の次の日には必ずと言つていいほど繰り返しされていて、ヴィンスにとってでも殆ど習慣の様になつてしまった所謂儀式の様な物だった。

「相変わらずお前は「アリサ」にベタ惚れか。その前までは「ミランダ」だったのに。」

「煩い、悪いか。「アリサ」の中でガムでも噛んでみるよ、俺が許さない。」

「はいはい、はいはい。重々承知でございます旦那様。」

言つてヴィンスは機体から殆ど飛び降りるように外へ出た。ロウも彼の後を追う、と同時に収容庫内でブザー音が鳴り響いた。機体の外部メンテナンスが始まるのだった。

「あんだ達も飽きないわねえ。」

収容庫から出ようとすると彼らの背に声を掛けた整備員が居た。彼女は腰に下げた道具袋の重みで下がったベルトを手で持ち上げながら歩みよる。

「やあダリス、おはよう。良い天気だね。」

「本当ね。生憎、下界は吹雪よ。」

ヴィンスとダリスの定型のやり取りだ。ダリスはロウよりも大柄だった、殆どヴィンスと同じくらいの背丈がある。大柄でいかにもパワーがありそうな彼女は、スパナを片手に持ち、それでしきりに肩を叩いていた。首からは真っ白なタオルを掛けていたが、整備の時間が終わる頃にはそのタオルと彼女の褐色の手や顔がオイルで真黒に汚れる事を彼らは知っていた。女性だからと言って甘えた所が無い彼女にはパイロット達もフランクに話しかけたり要望を言ったりする、そうして時たま呑みに出かける。

アルコールの入った彼女は、やれ誰そのの操縦は粗くて機体が可哀想だとか、誰それは操縦が下手糞でランディングがなって無いだとかを溢すのだったが、それすらもひっくるめて信頼を得ている人なのだ、とロウは思っていた。それだけ各機を良く見ていてくれるという事だろう。機体を大事にしているロウは彼女に特に気に入られているらしく、優先的に機体のメンテナンスを請け負って来ていた。ただ、飛行して帰ってくるといつも「機体はともかく自分の身体に無理をさせるな。」とお叱りを受けるのだった。

彼女にチェックリストを手渡し収納庫を後にしたロウとヴィンスは空母の外に出た。既に昼頃の位置に太陽が薄らと見え、濃紺の空

が天高く広がっていた。もうじきその太陽すらも昇らない極夜の季節が訪れる。「魔素」のシールドで守られているココはこんなにも標高の高い場所にあつて、普通に呼吸もできるしある程度風も防がれている、とはいってもやはり吹きすさぶ風は冷たくて、彼らは自分自身の身体を抱くようにしてゲートから塔内に入った。彼らのゲートの丁度逆側、対角線上には強化ガラス貼りの入り口がもう一つあるのだが、そちらはVIP専用通路となっていて、その先がどうなっているのかを彼らは知らなかった。彼らが入れる場所と云えば、塔から突き出すようにして増設された空軍施設の区画だけであつて、非番の日に街へ繰り出そうとすれば、一度空軍施設の最下層部まで赴き、そこから塔の本体まで通うゴンドラ（といつても室内をただ斜めに横断する為の物だが）に乗って行かなければならなかった。

ヴィンスが彼の髪と同じ鳶色の無精髭を撫でながら「そろそろ剃らないと怒られる？」とロウに聞いた。彼は「今でも十分むさ苦しい。」と言つて淡いグレーに少しブルーを加えたような色の、内側にファアの付いた空軍指定のジャケットを脱いで抱えた。

それから二人はエレベーターで三階層ほど下つた。レポートや提出書類などの事務作業が溜まっていたが時間も時間も、二人は食堂に入る。白く塗られたコンクリートの壁で囲まれた広い部屋に簡素なテーブルがひたすら並ぶだけのそこには人がごつた返し、壁に埋め込まれた様に存在するそれぞれの店にはカウンターの前に長い列が出来ていた。

ロウとヴィンスは人混みをかき分け、辛うじて空いていた席にジャケットを置くと、トレイを取り列に並んだ。ロウはパンと、中に入った具が煮込み過ぎてぐずぐずに崩れているコンソメ味のポトフ

を、ヴィンスは申し訳程度にサーモンが入ったクリームソースの麵を運んできて、殆ど無言でかきこんだ。ここの食堂はメニューは豊富だがどれを選んでも味が薄い。

空腹感を満たす為だけに取り敢えず全て食べ終えて、ロウが一息吐きコーヒを啜っていると、ヴィンスが彼の横腹を突き言った。

「あれ……。」

「何？」

「あれあれ、見るよ。この島の一個向こうの列、あのチャコールグレーの二人、あれガラスの向こうの住人だよ。」

ロウはヴィンスの顎で指す方向を視線で追った。確かにそこには頭らかに空軍の物ではない制服を身に纏った若い男女が食事をとっていた。男の方は冴えない印象で女は眼鏡をかけていた。ガラスの向こうの住人……彼等がこう呼ぶのは空母の着艦している塔の最上部の、彼等がどうやったって立ち入る事の許されないあのガラスの扉の向こう側に立ち入りを許されている一部の人間達の事だ。

「何の用？」

「さあな、俺に聞かれてもねえ、超エリートさん達の考える事なんかわからねえが……人目を“忍”んで“憚ぶ”愛って奴じゃねえの？」

そう言っつてヴィンスはニヤニヤと顎を擦りながら笑った。「またそうやって意味の解らない事を。」ロウは眼の端で彼等を一瞥する、ヴィンスの言う通り男と女は仲睦まじく談笑しているように見えた。確かに“向こう側”では知人の目もあるだろう、気にしての事なのかもしれないが、かと言って“こちら側”でそれをやられても……犬も喰わねえ……彼はそう思い、半ば呆れて席を立った。コーヒ

も飲み終えたし、あまり関わり合いになりたくはない。ヴィンスも同じように考えていたのかカップの中身を一気に飲み干すと彼の後に続いた。

鉄製の味気ない扉が続く廊下は度重なる増設の所為で天井の高さや床の材質はまちまちだ。ルーバー越しの蛍光灯は所々切れかかっていてその端が黒ずみ光がチラチラと瞬いている。その度にコンクリートの床には格子状の影が浮いたり沈んだりしていた。

「午後はブリーフィングルームだっけ？」

「えーと、三号室だっけ？」

「確かね。」

「めんどくさいなあ、何だと思うよ？」

「さあ？ ヴィンスまた何かしでかした？」

「冗談、前回の一件以来女には懲りた。まだ手は出してねえって。」

「そうだなあ、それだったらヴィンスだけだろう。俺は関係ない。」

「はいはい。そうですね……お前って冷てえの。」

「どつちが。一緒に謹慎喰らうこつちの身にもなってくれ。」

一昨日、何の前触れもなく彼らの指揮官であるセオドア中佐からお達しがあっただけで、何か作戦があるのかと聞いても中佐は黙って首を振るばかりで何も教えてはくれなかったのだ。その為、彼らは屋外作業用のジャケットを抱えたままで、手帳代わりのミニノートだけを携えて直接ブリーフィングルームに赴いた。

二人は取り留めの無い会話を交わしながら非常用階段を一階分だけ昇り、防火用の鉄扉を出て直のガラス貼りの扉の前まで来た。ヴィンスが胸元にぶら下げたIDを切り、パスを入力する。ガチリとロックの解除される音がして、扉の丁度真上に取り付けられた部屋

の使用状況を表示するパネルが「空室」から「使用中」へと変わった。

ヴィンスは扉のロックを解除したが中には入らずに、少し離れた場所にある給湯室に歩いて行った。ロウは一人で部屋に入りまず換気扇を回した。外壁側に面していないこの場所では換気をするのにこの方法しかない。……外壁に面していたとしても窓は嵌め殺しで開かないのだが。もっと中央部の緑化地帯の方に面していれば開く事の出来る窓もあるが、結局は施設内だ。フィルターで濾過され循環しているに過ぎない。

脂で黄ばんだ壁に囲まれた小さな部屋には、白い樹脂天板のテーブルが二つ向かい合わせで置かれており、キャスターの付いた事務用の椅子が味気無くその周りを取り囲むようにして置かれ、壁際には汚れたホワイトボードがあった。彼は何気なくマーカーの一本を取り上げてボードに文字を書いてみたが、インクが切れているのか彼の書いた跡は寧ろ汚れが取り除かれ、綺麗になっている位だった。何本か試した後、青いインキのマーカーだけが使えるという事が判った彼は、ほかのマーカーを元あった場所に戻し、青のマーカーをテーブルに置く。そうしてイレイザーで丁寧にボードを磨いた。

「潔癖。」

ユニマットから汲んで来た水の入った紙のコップを両手に持ったヴィンスが、そんなロウを見るなり呆れたように呟く。ロウは彼を無視して手を二三度払い汚れを取り払うと、ヴィンスからカップを受け取り椅子に腰かけた。その隣の椅子をヴィンスが引く。

「誰も来ないな。」

「部屋、合ってる？」

「多分ね。」

時を刻む秒針の音が何周か過ぎた頃、ガツガツと爪先に体重を思い切りかけつんのめりそうな、特徴的な足音が近づいて来た。その音を聞いてだらりと机に伏せていたヴィンスは慌てて居住まいを整える、と同時に大袈裟な音を立てて扉が開く。

「や、遅くなった。」

二人はファイルを抱えて入って来たセオドア中佐に対し、立ち上がって敬礼をした。中佐は抱えたファイルを一気に机の上に放り出すと、ふうつと息を吐いて頂垂れた。年齢を刻んだ額の皺がより一層深くなる。

「私は調整事は苦手だよ。」

「何言っちゃってんですかあ、それがお仕事でしょう？」 中佐。

ヴィンスが顎を擦りながら言った。

「で、何の話なんですか？」

ロウは少し苛立ちを含んだ声で言った。書類も溜まっているし無駄に時間を取られたくない、彼はさっさと諸事を終わらせて整備の終わった収容庫に行きたかったのだ。与太話などしている時間が惜しい、それでなくてもセオドア中佐は話が長いのだ。

「実は……。」

中佐が語った内容は要約すると以下の通りだ。ラストーチ力にはこれまでの戦闘機とは違い、「魔素」を利用した様々な機能が搭載

されている。光学迷彩もその一つだが、それ以外として「魔素」の記憶伝達機能を利用した情報転送機能を搭載しており、いざという時には大気中の「魔素」を媒介として空母ヴァストークからの遠隔操作が可能である。この度、ヴァストークとラストーチカの接続実験を取り行うので、その為のテスト飛行を担って欲しい、との事だった。

「ヴァストークも飛ばすのですか？」

「いや、ヴァストークのメイン動力はまだ起動する事が出来ないそう。私は、「魔素」だの何だのってのは良く分からないのだがね。」

ロウの質問に対して、中佐は机の上に散らばっているファイルを捲りながら言った。その様子が滑稽だったのかヴィンスがニヤリと笑った。

「では、「魔素」についての質問には、我々がお答えしましょうか？」

急に声がして三人は一同にブリーフィングルームの入り口に視線を注いだ、声の主を見てロウとヴィンスは殆ど同じような、怪訝な表情を浮かべた。中佐に関して言えば、彼は慌てたように立ち上がりその人物に対して敬礼をし、「お前等も居住まいを正さんか。」と小声で言った。

チャコールグレーの、空軍の物とは一見して比較対象にならないだろうと判る質の良い布地で出来た装飾の凝られた制服、肩章のラインの種類から鑑みてその人物が権威を持っているであろう事が二人にも判った。少し癖のある黒髪、顔の印象は薄く冴え無いが、食堂で見かけた時とは違いその背に4本の刀を背負っている、それが

異様に見えた。そうして彼の背後には、やはり食堂で彼らの見かけた眼鏡の女性隊員がファイルを抱えて立っていた。

「いえ、お構いなく中佐殿。はじめまして、私の名前はファン・ヴァン・ミン……覚え辛ければアスラとでも呼んでください。皆そう私の事を呼びますよ。」

彼はそう言いにくりと笑うとロウとヴァンスに対して手を差し出した。

ロウは彼の手を握り返しながら、彼は自分と同じような民族かもしれないと思つた。黒髪にイエローフェイス、吊り眼気味の漆黒の瞳、自分の特徴と良く似ている、だからと言つて彼に親近感が湧いた訳ではない。ロウやヴァンスからすれば、アスラと呼ばれている彼は所詮一括して“ガラスの向こうの住人”……自分たちとは違う世界の存在でしかないのだ。

「彼女はサラ・タケウチ。私の部下です。」

「よろしくお願いいたします。」

サラと呼ばれた女は、無表情でそう言うとき軽く敬礼をした。それから彼らは中佐の勧めに従い、空いている椅子に腰を掛けた。

「ええと、まず何かからお話したら宜しいでしょうか？」

「すみませんが、ちょっとした初歩的質問をしても宜しいですか？」

中佐殿。」

「何でしょうか？」

ヴァンスの言葉に対してアスラが答えたが、彼は自分の問いに対して中佐が促すまで待ち続けた。中佐がそれに気付き、許可すると

言った。

「彼等は……親衛隊の方々が如何用でこちらにいらっしやるのでしようか？」

「ああ、それは……。」

「その質問ですが、私がお答えした方が宜しいのでは？」

再びアスラが割って入り、それに対してヴィンスが面白くなさそうな表情を浮かべた。だが、アスラはその表情に気付きながらも変わらない様子で続ける。

「確かに、貴方の仰る通り平時は我々親衛隊と軍部は交わりを持つ事はありません。それは貴方がたがセラ……皇王様配下十二支塔組織の陸・空軍部から分岐する組織であり、我々親衛隊は武装しているものの十二支塔組織には属さない皇王様直下の警邏隊という扱いですから、我々がその作戦に関し貴方がたの影響を受けない代わりに、貴方がたに対して権力を行使する事は出来ない、といった具合……。」

「はいはい、そんな事判ってるよ、若いの。俺が聞きたいのは……。」

「失礼な方ですね。ああ、確かに私たちは貴方がたの様な階級称を持たない、つまり一般人・部外者と変わらないから、礼儀なんて必要ないという事ですか……まあ、私これでも一応親衛隊では副隊長を務めさせていただいておりますし、爵位も一応ある身なのですが。」

「失礼致しました侯爵殿。教育がなっておりますんで……。」

彼らの眼の前でにこやかに語る二十歳そこその青年がどれほどこの国の中核に近い存在なのかという事を知っていた気が気ではない。中佐は胸元からハンカチを取り出し額の脂汗を拭う。中佐は

“侯爵殿”と敢えて彼の地位を言葉に付け加える事によって部下達にそれとなく知らせたつもりだったが、軍部という階層の中だけで完結している彼等にはまったくといって良いほどその意図は伝わらなかった。

「与太話はいい。貴方の個人情報には興味はない。貴方達が今回のテストに関係している、という想像はできるのだが、俺とヴィンスはその詳細を知りたいだけだ。」

ロウが確かな迄に苛立ちを丁寧な言葉遣いに乗せて言った。横でヴィンスが「そうそう。」と頷きにやけ顔で腕を組んだ。

「空中空母ヴァストークは……。」

アスラはテーブルの上で指を組みその上に顎を置いて少し首を傾げ、そうして眼を細めた。

「あれの開発は実に多くの人間の利権が絡んでいるのです。軍部を筆頭に技術開発提供をした技術省、システム管理とプログラム提供をしている情報省、「魔素」の独自接続システムの提供をした塔管理理部、生産ラインの確保一連で産業省、財源確保の為に奔走した財務管理省、そして私達親衛隊、それ以外にも公私様々大小あれど。まあ何故こんな事になっているのかと言えば、ヴァストークの開発筆頭がアダム元帥だったって事が要因で。彼が設計に携わり、いや設計をしたと言っても良いのかな……の所為で。」

「ご丁寧な解説どうも。で、だから運航には承認を取れと？ それだけの事を伝えに侯爵殿がわざわざ？」

ヴィンスがヘラリと軽口を叩く。

「ヴァストークの飛行にはこれら全ての承認を得ねばならない。とはいってもその所属は軍部空軍になる訳だし、元帥の承認さえあれば飛ばせますが。単体で考えれば、それほど難しい話ではないです。ただ問題なのはそのシステムですね。同時に開発された戦闘機ラストーチカとの「魔素」による接続に関して軍部では手が回っていないというのが現状です……よね？」

アスラはそう言って横目でちらりと中佐を見た。中佐は溜息交じりに頷くと彼の言葉に続いた。

「仰る通り、軍部は「魔素」とのコネクトに関する技術においてまだまだ弱い所があります。それは「魔素」を扱える隊員が少ない為ではあります……とは言っても陸軍には「魔術師」による特殊部隊も存在しますが、空軍には……。」

「志願兵が圧倒数を占める空軍には「魔素体質」の人間が稀少なんでしょう。」

「はあ……。現在空母ヴァストークの専属隊員として一部の見込みのある人員を訓練中ではありますが、まだまだ……。」

「実戦運用はまだ無理だという訳ですね。」

アスラは一度聞いているであろう中佐の話に大袈裟に相槌を打つ。その様子が芝居じみていて口ウは少し煙たく思った。

「かといって、陸軍に手を借りるのは……。」

「それじゃあ我が空軍の面目が丸潰れだ！」

中佐はアスラの言葉に突如言葉を荒げて机を拳で叩いた、が直に冷静さを取り戻したのか、ハンカチで額を拭き、詰襟のボタンを外し頂垂れた。

「それで、同じくヴァストーク建設に関わっていた私達に声を掛けたと。私達は軍部ではありませんし互いに影響力を行使し得ない、そうして国家防衛の為の援助という名目の今回の要請を、私達武装親衛隊は皇王様の御身と国家の平静の為に断る事が出来ない。」

「ヴァローナ皇国は空の民であり、空の民である我々はその名譽にかけて空を制さなければならぬ。空を制する存在としての空軍は地を這う陸軍とは違う。我々の存在はこの国の英雄であらねばならない、いつ何時でも、だ。それを……。」

中佐がぼそぼそとそんな事を言った。言って彼はもう一度深い溜息を吐き殆ど突っ伏してしまうのではないかと言うほどに頂垂れた。アスラはそれを微動だにせず見ている。ロウには中佐が最期呑み込んだ言葉が解った気がした。

あの時… 塔に国連軍という冠を被った侵略兵たちが傾れ込んできた時に、俺たちは何もできなかった、何も。塔はそれ自体が強固な防壁だ、それをより強固にするために空を翔る翼がある。けれどその内部にもぐりこまれてしまったら、結局何も、何もすることが出来ないただ、見ている事しか……。最強と誉れ高く、そうしてそれを誇りにしていた俺たちにとってそれは酷く歯痒くて、変わって劣等だと決めつけていた陸軍が国を守っている姿を見せつけられて、悔し涙を流していた者もいたっけ……。ロウは思いだし憂鬱な気分になった。こういう時は空を、空を我武者羅に駆け回りたくなる。

「中佐、後の事は私たちと、そうして彼らが引き受けましょう。まずはヴァストークとラストーチ力を見せていただきたい。その時にこちらから詳しい話は彼等にお話ししますので。」

「いえ、しかし侯爵殿……。」

「それは唯の名誉称です。空軍に來ている以上私たちは貴方がたの組織の掟に従わなければなりませんでしょう。それに、貴方は医務室に言つた方が良い。手遅れになると胃に穴が開きますよ?」

アスラはあくまで涼やかな表情を崩さずに言つた。傍らの女……サラが無言でゆっくりと椅子を引き、ファイルを抱えて立ち上がる。中尉は唇まで真っ青になった顔に脂汗を浮かべていた。その手が腹部のボタンを握り締めている事に、ロウとヴィンスはその時初めて気が付いた。彼等は自分たちの直屬の上司の異変に今まで気付いていなかったのだ。

「貴方達の上層部も酷ですね。もっと位の高い方が同席されるかと思つていたのですが、我々も嫌われた物ですね。」

階段を昇り切り、戦闘を歩いていたアスラが観音開きの鉄扉を開けた。びょうびょうと風が隙間を潜つて吹き抜ける。サラが後頭部で縛つた濃いブラウンの髪を靡かせ、赤い縁の眼鏡を押えていた。チャコールグレーのボックススカートが風に煽られて内側のベージュのチェック柄の生地がちらちらと覗いた。それを見て鼻の下を伸ばすヴィンスに気付いてロウが彼の脇腹を肘で小突いた。

午後二時だというのに日は既に隠れようとしていた。濃紺にオレンジの溶け込んだ雲の無い天は手を伸ばせば届きそうなほど、そのままカラフルな鉄壁が頭上に落ちてくるのではないかと彼等に錯覚させる。

眼前には果てしない鉄壁、否、鉄壁に見えるそれは差し詰め巨大な戦艦だ。その背には薄緑に光る誘導灯、沿うようにある滑走路、

空中空母ヴァストーク、願いと皮肉を綯交ぜにしたその名前。

感覚的には近く思えても、巨大過ぎるそれに辿り着くには些か距離がある。救いようが無い事に、寒々しい投光機の白い灯りが煌々と全てを照らしていた。

「なあ。」

ヴィンスがジャケットのファアの中に顎を埋めながらロウに対して小声で言った。

「何だよ。」

「今って、俺たちだけじゃん？」

「そうだな。」

「さつき、あの小さい黒いの、空軍内に於いてはそのしきたりに従うって言ったよな？」

「……よしておけよ。」

ニヤリと笑うヴィンスの表情にロウは彼の言わんとしている事を察して苦言を呈する。

「気にいらねえ、じゃ駄目か？」

「じゃあ好きにすればいい。ただし俺は関係ない。」

ロウは言って腕を組んだ。吹き荒ぶ風から体温を奪われる事を防ぐ為だ。

「ヘイ、侯爵殿！」

ヴィンスが片手を挙げながら彼の約3メートル程前を歩くアスラ

に声をかけた。黒髪を靡かせながら振り向く彼、とたんにその一重の眼が大きく見開かれた。それもその筈で、振り向いた時には既に大きく振り被ったヴィンスが彼の眼前に迫っていたのだ。アスラは間一髪腕で彼の拳をいなして避ける。ヴィンスは勢いを殺しきれず前のめりに数歩つんのめった。

「いきなり何ですか？」

制服の襟を正しながらアスラが言った。この状況下で以外に冷静だな……ロウは思った。サラにしても悲鳴一つ上げずにただ目を大きく開いて見ていただけだった。

「いえね、しきたりってやつで。」

ヴィンスはくるりと振り向くとアスラに対して肩を竦めて見せる。

「誰でも配属その日には、乗り越えてくるもんなんですわ。しきたり、慣例、ドツグ・ファイト。」

そう言っただけはステップを踏みながらファイティングポーズを取り、左右に揺れる。アスラは面倒だと言わんばかりに溜息を吐き、「バンブー、持っていてください。」と、隣のサラに背中と腰に差した刀を預けた。

「良いですよ。私は「魔術」を使用しなければよいのでしょうか？」

アスラは右手で外套のボタンを外し脱ぎ捨て、ついでに詰襟のホックを外す。軽くステップを踏みながら掌を翻しヴィンスを挑発した。ヴィンスはニヤリと笑うと一歩で間合いを詰め胸の前から素早

く拳を突き出した。空気を裂くような音、だがそれはアスラの癖のある黒髪に掠っただけ、彼は少し首を傾けて一歩下がっただけだ。更に次の拳が唸る、それもいなくとアスラは体格の違いを利用してヴィンスの懐に潜り込む、瞬間ヴィンスは自分の拳の勢いを利用して身体を捻ってアスラの下からの攻撃をかわした。

ロウとサラは少し離れた点から彼等の動きを眺めていた。大柄なヴィンスと小柄なアスラでは身長差が20センチ程はあるだろう。傍から見ればリーチャやパワーの差から言ってもヴィンスの方が有利に見える。だがアスラの動きは素早く、ヴィンスの攻撃は一度も当たっていない。ロウは傍らに佇むサラを見た。赤い縁の眼鏡の下の濃いグレーの瞳が真っ直ぐに彼等を見つめていた。外見的にはこの辺りの、大陸北部にルーツを持つ系統の民族だろう。その外見から鑑みても彼女が上層階級の出身であろう事が判る。

「なあ、君。」

「……。」

「サラ？」

「ああ、私の事ですか。何でしょう。」

サラが眼鏡を直しながら振り向く。

「君はどつちに賭ける？」

「賭ける……とは？」

「ここの慣わし、かな。勝つと思う方に賭ける。賭ける物は何でも良い。勝つにはギブさせるか再起不能にするか……余興だよ。俺はヴィンスに賭けるよ。ヴィンスは今まで負け無しだしね。あの体格で意外と素早いんだ。」

「そうですか。」

サラはさも興味が無い、とでも言うように抑揚の無い声でロウと掛け合いをし、その視線をアスラとヴィンスに戻した。ロウも彼女に習って再び彼等を見つめた。投光機の光が彼等を照らす。彼等の影は斜めにクロスして交錯する。

「流石は、親衛隊、って所か、なかなかやるじゃん。」

「ええ、こんな物で認めて貰えてしまうならばこの世の中はもっと生きやすい場所になっていると思います。」

アスラは左腕でヴィンスの拳を受け止める。拳の重さで後ろに吹き飛ばされそうになるのを踵で堪え、彼はニヤリと笑った。その漆黒の瞳が怪しく光る。受け止めた拳を右手で掴むと身体を反転させる、その直後だ、ふわりとまるで風に煽られる様にヴィンスの巨体が宙を舞った。ロウにはそれがスローモーションのように感じた。

「私は、アスラ様に賭けます。」

サラが言った。その時、ズダンっと大袈裟な音とヴィンスの呻き声が木魂する。アスラは倒れ込んだヴィンスの腕を取りそのまま彼の背に足を乗せ捻り上げる。

「ギブ、ギブギブ、ギブします！」

ヴィンスが空いた左手でしきりにコンクリートの地面を叩く。アスラが彼の腕を解くと、ヴィンスはぐったりと地面に突っ伏した。アスラはその様子を見てにこりと笑って踵を返す、サラに向かって歩きながら軽く手を挙げ詰襟のホックを留めていた、その時、彼の背後でヴィンスがむくりと起き上がる。

「隙有り！」

大きく跳躍し彼はアスラに飛びかかった。これは流石に避けられないだろう、彼の体格ならば1メートル以上は吹っ飛ぶだろう、良い気味だ、とロウは内心ニヤケたその時だった。

「隙なんて無いですよ。」

アスラがそれまでの動きよりも更に早い、目で追えないほどの動きで飛びかかるヴェインスを蹴り飛ばした。ロウの予想とは逆にヴェインスが1メートル程吹っ飛ばされ、今度はしこたま背中を打ちつけた。

「ほらね。アスラ様が勝つたでしょう。」

啞然とするロウに傍らでサラが呟いた。

「全長720m全幅1220m自重6428t動力は超高压（圧縮魔素）、18機のターボファンエンジンを推力とする、ティルトローター機。搭載機は自機専用搭載機ラストーチ力を含めて52機、腹面には前面に光学迷彩・ミラー光彩投影パネルが施されており、地上から目視での発見は困難、ただし巨体の為機動には制限がかかるし、方向調整にはティルトローターとターボファンを連動させている、まあそういう点でも言っちゃ悪いが弱点だらけだな。その為にラストーチ力があると言っても良いか。内部は3層、一層目には動力炉区画・離発着区画・防御区画、二層目には離発着区画・収納庫・ラストーチ力専用離陸レーン、三層目には管制区画・居住区画・制御区画があり、背面に1層地上における際の発着用並びに、緊急空中着艦用レーンがある……と、これで満足ですかね？ 侯爵殿。」

「ふむ、噂通りの凄まじさですね、実際。」

カツカツと言う軍靴の音が木霊する。四人は収容庫の上部の、鉄板で出来たキャットウォークを歩いていった。下を覗けば、翼を垂直に折りたたんだ青みを帯びた黒色のラストーチ力がずらりと並んでいるのが判る。それぞれの機体は専用のアームのよって固定されており、床面にはアームと機体に沿ってレーンが鉄製の扉まで這っている。

グインスが先頭を不機嫌そうに、アスラとサラに対して艦内を案内しながら歩いた。ロウはその後から続く。先程自ら持ちかけた勝負に負けたグインスは、それからムツツリと黙り込んで、それ以降はアスラの言う事に一々噛み付く事はなかった。

キャットウォークの繋がる先は艦内通路になっており、三層目の

管制区画に繋がっている。真っ白い壁に囲まれた四角い通路を抜けた突き当りの扉、ヴィンスがIDを切りPASSを入力した。上下にスライドする扉が開き、ブリッジに着いた。数名が何やら作業をしており、ヴィンスを見て笑いかけるもその背後に続く二人を見て怪訝な表情を浮かべた。それもそうだろう、彼等にとって空軍に属さない彼等は招かれざる客なのだから。

「失礼、Dr. パーシヴァルを呼んでいただけますか？」

アスラが言うと、オペレーターと見られる女性が無言でボタンを押す。暫く待っていると、ブリッジの奥にある小さな扉のから白衣を腕を通さずに肩に引っかけた中年の男が慌てて駆け出て来た。

「いやあ、失礼失礼、もう少し遅い時間になると思っていましたからねえ、気付きませんでしたよ。」

「どうも、お久しぶりです博士。」

博士と呼ばれた男は丸いフレームの、塗装が所々禿げた眼鏡を直しながらアスラに手を差し出す。彼はその手をほんの数秒だけ握って引っ込めた。

「そちらの二人は明日の実験に協力してくれるラストーチカの操縦士とオペレータかな？ はじめまして。私はDr. パーシヴァル、ヴァストークとラストーチカの「魔素」理論の設計開発に携わった者です。」

「……。」

「どうも、お世話になってます。」

ロウは無言で、ヴィンスは一言添えて彼の差し出す手を握った。ぼうぼうと生やした白髪交じりの無精ひげに油で曇った眼鏡のレン

ズ、整えられていない頭髪が潔癖のある口ウには生理的に受け入れられなかった。すぐにポケットからハンカチを取り出して手を拭いた。こんな男がああ美しい機体を造ったという事実がどこか一致せず口ウは少し困惑した。

「ラストーチカとヴァストークのトランスレーターがそちらのお嬢さん、と言うのは前もって聞いていますよ。まあ、私からしたら不慣れな空軍連中に使わせて文句を言われるよりは、トランスレーターのお嬢さんに扱ってもらえてかえってありがたいのだがね。」

博士はフレームが歪んでいる為にすぐにずり落ちてしまう眼鏡を再び掛け直し数度神経質そうに瞬きをした。「では、行きましようか。」彼が言い、四人は先程彼が出て来た奥の扉の中に入った。

「まあ、しかし偉くなったものですな、十数年前にはこんなに小さかったのにねえ。」

歩きながら掌を自分の胸元辺りで水平にして博士はアスラを振り返り言った。

「ヴァストークから遠隔操作技術に関しては昔の貴方の研究結果を大分、参考にさせていただきましたよ、その点厚く礼をせんといたしませんあ？ 検体067号……。」

「くだらない話はいいですよ、博士。それよりも彼等に仕様を説明して差し上げては如何でしょうか？ 私がするよりも良いと思われ  
ますよ。」

穏やかな中に多分に殺気を含んだアスラの言葉に博士は身震いをして前を向いた。何枚か鉄扉を抜けると管制ブリッジを小さくしたような部屋に辿り着く。フロントは一面ガラス貼りでそこには様々

なデータが投影されている。言ってしまうえばラストーチカのコックピットに搭載されているHUDを巨大にしたような物だ。

博士は放り投げてあったグローブを嵌めて画面に向かって手を動かすと、画面上のデータがいくつかピックアップされた。

「君たちの駆るラストーチカには二つの動力がある。一つは「魔素」によってコントロールされた、原子の核を分裂させることによって生み出されるエネルギーを利用した動力、もう一つが母機であるヴァストークからの指示によって動かす遠隔動力、これには距離に制限があるが、人員の搭乗を必要としない為まあ、多少無茶な動きも出来る。アスラの能力を知っているお嬢さんには判りやすいだろうけどねえ、後ろのお二人はどうだか知らないけれど。」

「待ってくれ。」

ヴィンスが声を上げた。博士が振り向く。

「ヴァストークからの遠隔操作が可能なら、俺たちパイロットは必要無いんじゃないのか？」

「そんな事は無いよ。さっきも言ったけど遠隔操作には距離に制限があるし、第一このシステムは君たちパイロットの負担を軽減する為の物なんだよ。操縦士は操縦している間その思考能力は通常の5割程度まで落ち込むし、その為にオペレーターが居るとは言っただけで、Gの負荷が掛かった状態で情報を捌くのは激務だ。ミスが起これないとも言えないだろう。それから万が一機体に損傷を受け舵が効かなくなったりしても、遠隔操作によっての回収が可能なんだ。魅力的じゃないか。資源が少ないヴァローナでは資源と技術をふんだんに盛り込んだ戦闘機一機の価格はとてつもない額なんだからね。まあ、私は距離に制限を持たせないで遠隔操作のみの開発を提言していたのだけれどそれでは暗号通信を傍受・解読された時のリ

スクが大きいってな理由で却下されたんだけどね。っていつてもI  
FFは「魔素」の個性を利用した情報識別を利用しているんだしさ、  
あんまり変わらないと思うんだけどなあ。」

博士はぶつぶつと、後半は殆ど一人言の様に呟いていた。彼には  
俺たちパイロットの事などどうでもいいのだろうな、とロウは思う。  
ヴィンスが反抗したくなる気持ちが同じく戦闘機に乗る身として彼  
には良く判った。

サラはいくつか並んだオペレーター席の内の一席に腰をかけると、  
席の前に置かれていたグローブとヘッドギアを付ける。ロウやヴィ  
ンスから見ると何もない席の前で彼女の指がキーボードを叩くよう  
な操作を始める。

「何それ？」

「貴方達の装着するHMDヘッドマウントディスプレイの様な物。グローブは仮想ディスプレイ  
上に投影されている物に対して信号を送る物。」

ヴィンスの好奇心を含んだ質問に対してサラは言葉短く答える。

「どうか、扱えそう？」

「コネク接続」、問題は無さそうです。」

彼女の傍らで心配そうに問うアスラに対して彼女が答え、ヘッド  
ギアを外した。

それから、彼等はヴァストークを降りて再び空軍施設に戻ってき  
ていた。ロウとヴィンスが一番初めに親衛隊の彼等を見かけた食堂  
で、一息吐いていた。ロウとヴィンスはコーヒーを、サラはケーキ

セツト、アスラはごてごてとアイスクリームの盛られたパフェを食べていた。

サラは女性なのでそれほど違和感はないが、アスラに関しては前に置かれているパフェの大きさも手伝って異様な光景に見えた。ヴィンスが先程からしきりに「信じられねえ、男の癖にありえねえ、寒い中良くそんな物が食えるな。」と溢し、それに対してアスラが「好みは自由でしょう、「魔素」使いはカロリー消費が激しいんですよ、多分。暖かい部屋の中で冷たい物を食べる、これは至福です！」などと言っている。ああ、この二人はどうしてなかなか、さっきのアレで仲良くなってしまうたのだろう、とロウは思った。サラはその光景を面白くなさそうに見ている。

「でも、正直羨ましいですよ。貴方がたはこの空を自由に飛びまわることだ出来るんですからね。」

「自由……制限付きでおまけに重力に逆らえない。」

アスラの言葉にロウは不貞腐れて答えた。彼にとっては自分たちがそう思う事には問題がないのだが、その苦勞を知らない人間に羨望の眼で見られる事を良く思っていないのだった。「飛ぶと言えば……。」ヴィンスがその言葉を継いで言う。

「この国の皇王様は翼があるっていうじゃねえか、あれって本当に本物の翼があるって意味……。」

「あ、それ……。」

「良い質問です。」

サラがヴィンスを制止するのとはほぼ同時にアスラがビシリツと彼に対して左手の人差し指を突き付けた。面食らうヴィンスを余所に、右手で握ったスプーンは巨大なパフェにグサリと突き立てている。

隣でサラが額に手を当てて溜息を吐くのをロウは見逃さなかった。

「翼、ええ、ただし多分貴方がたが思い浮かべるような鳥のそれとは異なり、透明で……プリズムの輝きを放つ放射状の光、のような物でしょうか。周囲の「魔素」とより多くの接続を可能にする為のアンテナの様な物で、そのお姿は神々しく、まさに神や天使といった様子で……セラナ様は、一般に広く思われているような方ではありません！ 出自がアルディアナ帝国の貴族の血を引くから帝国に鼻息しているとか、国家に対して不利に働かれるとか、そういった噂も耳にしますが、そんな物、ま逆ですよ。あのお方は御自身の事よりも常に民の事を考えていらつしやる優しく美しいお方なのです！ それから……。」

……。

「……そう、思いませんか！」

アスラは語り終え、テーブルを拳で叩いた。彼の前でアイスクリームを溶けてしまったパフェのグラスが振動で跳ね上がる。ヴィンストとロウは3杯目の水を啜っていた。ナオは空になったティーカップを両手で持ち、その底を見つめ続けている。

「ロウ……。」

「28分飛んで4秒だ。素晴らしいが35回、お優しいとお美しいが8回で次点だな。」

「だから私は止めようとしたんですけどね。」

三人はそれぞれ言い深い溜息を吐いた。

「おや、そんなに長らく語っていましたか。私は精々十分位だと思っ  
ていましたが……。」

アスラは言っつて解けきつて液体状になっているパフェをズズと  
音を立てて啜った。それを見てヴィンスが「うげえ……。本格的に  
気持ち悪い。」と漏らす。

「それでは結構な時間も過ぎてしまった事ですし、私はいい加減戻  
らなくてはなりません。」

「はい。アスラ様。」

アスラが口を拭いながら立ち上がると、サラも立ち上がり彼に敬  
礼をした。

「今日から暫くは空軍施設内の宿舎での生活になるけれど……。まあ、  
何か困った事があったなら私に言いなさい。」

「お気遣い、感謝いたします。」

「お二人も、この子をよろしくお願いいたします。」

そう言っつてアスラは二人に対し頭を下げた。彼の初めて見せる上  
官らしい振る舞いに面食らう。彼は「では……。」「と言いつて残し、椅  
子に掛けてあつた外套と刀を掴むとやや小走りで行った。

「ああ、疲れた。」

視線で彼を見送る二人の背後でどつかりと椅子に掛け、サラが咳  
いた。その声に今度、二人はサラの方に向き直る。彼女の声が明らか  
に先程までの物とは違っていたからだ。サラは背凭れに肘をかけ

仰け反ると足を組んでテーブルに乗せた。

「なんて事してくれた？ 彼に皇王様質問は自爆するような物だぞ、それを不用意に……。」

サラは不機嫌そうに言った。「さっきまでのおしとやかは何処に行ったんだ？」ヴィンスが呟くと、「余計なお世話だ。」サラは言っつて頬を膨らませる。

「何でも良いが、もう俺たちは行っていいのかな、バンブー？」  
「バンブーっと呼ぶな！」

ロウが言つとサラは途端に顔を真っ赤にして反論した。

「だって、さっきのチビがサラの事をそうやって。」  
「チビって言うな！ アスラ様は優秀な「魔素使い」なんだ、そうでなければあの若さであの地位に就ける訳がないだろう！ お前たちとは違うんだ。」

「ほお、ひよつとするとひよつとして、ロウ君、彼女……。」

「ああ。どうやらヴィンスの読みは外れてない様だ。」

「何？ 何だ貴様等気色悪い。」

サラの発言に男二人はニヤニヤと笑う。ヴィンスはしきりに顎を撫でながらサラに詰め寄る。

「乙女だねえ。」

「……ふ・ざ・け・る・な！」

頬を真っ赤に染めたサラの拳がヴィンスの顔面にクリティカルヒットするのはそう難しい事では無かった。



翌日、改めてサラを交えたブリーフィングを終え、彼等は自らの搭乗機の最終点検を行っていた。ラストーチカ・第八番機「Alisa」、昨晚もロウは隊の事務作業が終了した後、呑みに誘うヴィンスを振り切って彼女の点検兼メンテナンスを行っていたのだ。今更するまでも無いと言っても過言では無かったが、これから自分たちの命を預けると思えばこそ、点検にもいつも以上に力が入る。テストとはいえ訓練飛行では無い状態で、この機での飛行は彼等にとって初めてだった。

任務は至極簡単な物で、偵察機の護衛をしつつ、あらかじめ定められた偵察コースを飛行し戻ってくる事、その際に数度、ヴァストークからの通信を受け取り、それを返す。領空域ギリギリの折り返し地点で一度操縦をフルオートにしてヴァストークからの遠距離操縦に任せる。良好な様であれば帰りは寝ていても大丈夫と言う訳だ。

偵察機はジャーヴァラナク第4番機、パイロットのエレーナ・ベリコワは二人も良く知っている人物で、女性ながらにして英断の出来る優秀なパイロットだった。彼女は、「何時もの偵察任務に最新鋭機が護衛に付いてくれるなんて、心強いわね。まあ、何も起こらないと思うけどね。」と、ブロンドの長い髪をかき上げながら言っていた。オペレーターの方はヴィンスは知っているようだったが、ロウは特に興味も無かったので儀礼的な挨拶を交わす程度しかしなかった。

サラはヴァストークの方に乗り込み、今はまだ飛ぶことのできないその船内から、ラストーチカに向けて信号を送る役をする。「魔素」について殆ど知識を持たないロウやヴィンスにはブリーフィン

グでの彼女の発言はよく判らなかつたが、概ね以下の通りである。

ヴィンスの送る信号はラストーチカによって「魔素変換」されてヴァストークに送られてくるが、ヴァストークの思考コンピュータがそれを再度展開し、提示する。その内容の精度をサラ自身が「魔素」から直接情報を引き出して確かめる事、それから自動操縦の際に行われる通信の観察と操作、そんな所だ。「魔素」には記憶媒体となるような情報蓄積領域があるのだが、それに対して情報を書き加える能力者を「ライター」、逆に書き込まれた情報を引き出す能力者を「トランスレーター」と言う。サラは親衛隊の中でも珍しく戦闘警備要員ではなく「トランスレーター」だった。

ラストーチカはVTOL機だが、ヴァストークからの発進にはプラズマによる加速を利用する為、各機専用のレーンを使用し、母機から空中に投げだされる様にして発射される。ただし、今回は地上からの発進と言う事もあり、大事を取って空母の背面に建設された滑走路から離陸した。追って、エレーナ機も離陸する。

「フラップ、アフターバーナー、異常無し。エンジン正常に作動。尚後発エレーナ機との距離およそ30メートル。レーダー、周囲にBOGY無し。……快晴で視界は良好、気流に大きな乱れ無し。」  
「了解、高度を保ちつつ旋回、減速。エレーナ機との距離を詰め、ポイント1に向かう。」  
「了解。」

第八番機「Alisa」、白い雲の尾を引きながら大きく旋回する、エレーナ機はその内側を旋回、互いの距離を5メートルほどに縮める。

「こちら、ジャーヴァラナク第4番機」Natasha「より、

これより偵察コース、ポイント1へ向かう。」

「Alisa」了解。」

「ポイント1までは、暫く暇かなあ。オートに切り替える。」

後部席でHMDを外しヴィンスが言った。ロウは操縦桿を握ったまま隣を飛ぶ「Natasha」を伺っていた。気付いたエレナがサムズアップを一度し、挑発するように数回ロールした後、半ロール、そのまま背面飛行を続ける。

「挑発された。ヴィンス、あまり気を抜き過ぎるなよ。」

「はいはい、判っていますよ。」

「Alisa」、三回転ほどロールし、エレナ機と更に距離を詰めてから半ロール、「Natasha」が再び半ロールし機体を水平に保つ、そのタイミングに合わせてループ、「Natasha」の背面にピタリとつける。

「ロウ流石だな。あっさり後ろを取られたわ。」

「取らせた、だろう？ エレナ。」

「ああ、バレていたか？ もうすぐポイント1に付くからね。」

「判ってる。ヴィンス。」

「はいはい、大丈夫。でもあまり長時間やるな。レッドアウトする……。」

ポイント1到着、上空にてヴィンスは指示された暗号文を転送  
明星は暁に隠される。ポイント1上空で二機はループ、高度  
をやや上げ、距離を保ちつつ通常飛行、ポイント2に向かう。

## 宵闇に光を投げ掛ける者

ポイント2にて通信を受け、サラは一息吐く。ここまでは順調だ、否これからが本題だ。約10分後、領空ラインで旋回後に「Alisa」の制御はヴァストークに委ねられる、そうなれば彼女が監視すべき情報の量も跳ね上がる。その前に、情報を整理しておくか……彼女は、自身の眼の前に広がる「魔素」の海から情報を精査する。

トランスレーターと呼ばれる特異能力者のサラから見ると、世界は「魔素」に満ち溢れている。とは言っても通常時に意識をしなければ何も見えはしないのだが、深く意識を集中させると「魔素」の固有に情報を視覚化する事ができる。

一般的に「能力者」と呼ばれている「魔術師」というのは全て「リーダー」だ、つまり「魔素」に命令する・情報を書き加える事によって事象を引き起こしているのだ。サラは彼等「魔術師」とは基本的にま逆の能力者を持つている。「トランスレーター」と呼ばれる彼女はごく稀少ながら存在する「魔素」が元来持つている情報を認知する事の出来る能力を持つ。能力を駆使して同じ個性を持つ「魔素」を蒐集する陣を見つければ「召喚師」になる事も出来るかもしれない。

彼女から見ると「魔素」の情報は遺伝子の様に見えた。二重螺旋の九十九折りの中から彼女の知識の幅に該当する情報のみが、淡く光って見えるのだ。それを手に取ると頭の中に映像・イメージが広がる。それは無音であり、そのイメージから全てを理解しなければ

ならない所が彼女の能力的限界だが。サラはヴァストークとラスト  
ーチカの間流れている「魔素」の情報のやりとりを観察する為、  
ここに来る前一週間ほど戦闘機やそれに付随する知識をありったけ  
叩きこんできた。その甲斐もあって、彼女の現在見ている世界は非  
常に色彩豊かな世界となっていた。真つ白な上下も左右も無い空間  
に漂う自分（主観）と、周囲に散らばった二重螺旋の交錯、その中  
に光る情報、それに手を触れるとあふれ出るイメージ……。

「もうそろそろ、時間になります。」

オペレーターの女性がサラに告げる。「そんな事、感じているわ。  
」彼女は心の中で呟いて自分の作業に没頭した。観測しながら指の  
感覚だけで情報をWWにタイプする事は傍目に見る以上にハードな  
のだ。サラは短く息を吐き、更に集中力を高めた。

「折り返し地点だ。」

ヴィンスが告げる。ほぼ同時に、「Natasha」が機首  
を少し擡げ合図を送ってきた。ロウは「了解。」とヴィンスに告げ  
る。「Natasha」に付き従って緩やかに旋回する。二機  
は紺碧に近しく感じる高高度の空に翼の先端に白い雲のラインを引  
いて行く。

「一度、高度を下げ偵察するが、付いてくるか？」

「Natasha」より通信、ヴィンスが「OK」と答え、  
ロウはエレーナ機に続く。分厚い層の雲の上ギリギリまで高度を落  
とし、更に旋回する。リーダー上の領空ギリギリのラインを沿うよ  
うに飛ぶ事数分、この雲の下はブリザードだろう、しかし何と穏や

かな、それ自体が無限に続く雪原の様に広がる真っ白な雲の眺め、遙か背後には先程彼等の飛び立った巨大な塔が壁の様に天空に聳え立っている、その壁面の一面が全て見えるほど遠い距離まで来ていた。

「そろそろ時間だ、帰還する。」

「Natasha」から再度通信、「Natasha」と「Alisa」は揃って進路を反転させる。ヴィンスは帰路のコースに乗った事をヴァストークに言葉短く告げ、あらかじめブリーフィングにて打ち合わせていた通りに、プログラムキーを入力した。

「Automatic mode I have control」

「Alisa」からの言葉短いメッセージがHMDに表示され、操縦桿に軽い振動が走り、ロウは手を離した。前方を飛ぶエレナ機を追うように安定した操縦、シートに深く背を凭れ彼等はただ黙って計器類を見つめていた。

「ここまで機械化が進むともはや人の手は要らないと思うよ、実際人間では「魔素」を扱える奴等が重宝されて、出世していく。結果、俺たちは死に行く兵なんだろうな。」

ぼつりと毀れたヴィンスの彼にしては珍しい湿った台詞に、ロウは何も返す事が出来なかった。彼の言う通りかもしれない、彼の言う通り本当は自分たちなど必要では無くて、自分たちの為にラストーチカが在るのではなく、どちらかと言えばラストーチカのサポートの為に自分たちが存在させられているのかもしれない、そう

思うとロウは無性に空虚な気分になった。操縦をしていないという事は、それだけ余分な事を考える余裕ができてしまう。こんな抜けのような蒼天の中空で思考を開放させられては自分の存在の小ささに、どんだん皮肉になって行く……そんな状態から脱出したくて、彼が軽く操縦桿に手を置いたその時だった。ロウの背後でヴィンスが小さく怪訝な声を漏らす。

「どうした？」

「いや、レーダー上に……BOGGY……？」

「識別信号は？」

「UNKNOWN。」

「Natasha」座標E35……。」

「捉えている。こちらの信号には応じない。機体識別現在検索中…

…。」

「UNKNOWN、意外に速いな。」

ヴィンスの問いかけにエレナとオペレーターが口ぐちに言う。

「Natasha」、急速上昇、機体腹部のカメラでBOG Yを捉えようとする。

「ギリギリまで接近してみよう。IFFの故障かもしれない。」

「……ヴァストーク、通信は記録しているか？」

「Natasha」からの提案にヴィンスが母機へ問い合わせる。

『取れているわ。UNKNOWNの映像をデータ解析中、もう暫くかかりそうね。』

サラの声が直接頭に響くように聞こえ、ロウとヴィンスは思わず周囲を見渡した。

『機体を構成している「魔素」に直接干渉しているの……と言っても貴方達には通じないみたいね。』

全てお見通しだと言うようにサラは言った。

「操縦をこちらに返してくれ。 I have control」  
『いいえ、こちらで受け持つわ。 No, I have control』

サラの嫌味を含んだ声が機内に響く、と同時に一瞬内臓が取り残されるような無重力、直後彼等の全身にGが掛かる。「Alisa」、旋回し双翼から二重螺旋の雲の尾を引きながら急上昇、先に上昇した「Natasha」を一気に追い抜く。

アフターバーナー最大出力、恐ろしい程の瞬発力でUNKNOWNに接近、翼と翼が触れるか触れないかというような距離を瞬間的に擦れ違いターン、その背後に張り付く。

『照合結果出たわ。対象機、アルディアナ軍偵察機に該当機有り。』  
「……………無茶苦茶……………だ。」

サラの無邪気な声にヴィンスが呻く。

「READY GUN」

HMDに赤い文字が躍る。瞬間、敵機の背後から20mm機関砲の弾幕を浴びせた。敵機、ダイブしてこれを避ける。機体の腹部が雲に擦れ、一瞬機体のバランスを崩した。「Alisa」空かさず機首を下げて狙い撃つも気流の層に阻まれ決定打にならず、敵機アフターバーナーが煌めき急加速、「Alisa」との距離を稼ぐ。

「Alisa」敵機に喰いつこうと急加速、敵機、前方から迫る「Natasha」に対し発砲後擦れ擦れの位置をかわし

逃げる。スナップ・ロールし、これを避ける「Natasha」  
「減速した」Natasha」が「Alisa」眼前に  
迫る、「Alisa」はこれをストール・ターンし回避。

その間ロウとヴィンスは襲いかかる重力に息を荒げていた。母機  
からの理不尽な操縦に対する苛立ちと怒りが彼等遠のく意識を何と  
か繋ぎ止めていた。

「……ふざけるな!! ヴィンス、無事か?!」

「……死んでる。」

「解除コードを叩き込め!!」

「そんなもん、知っていたらとづくに! 「魔素」通信だから有線  
も無い!」

『そつだ、無駄だ。それにヴァストークの戦術コンピュータが敵機  
の情報をもとに割り出して操縦している。大丈夫、貴方達は死には  
しない。』

「Alisa」!! 糞つ……

「(第八番機 ラストーチ

カ「個体識別称：アリサ」)

「(搭乗者名：「ロウ」)、I have controle

!! 言う事を、聞け、アリサア!!」

サラはああ言っている、しかしこのままでは自分達が殺される…  
…。そう感じていたロウは無我夢中で操縦桿を思い切り握り締め、  
逆らう力に抵抗して無理矢理倒した。舵を失った機体はきりもみし  
雲の層の上を流れる気流にぶつかる。酷い衝撃音、機体がばらばら  
になるかの様に思えた。視界が赤く染まる、レッドアウトか? そ  
う、ロウが思ったその時だった。赤く染まっていたのはHMDの画  
面。



の所為で身体全身彼方此方が痛み、胸に息苦しさを感じた。

「まだいけるか？ ヴィンス。」

「……しんどい。」

「減らず口が叩けるなら大丈夫だろ？」 Natasha 「  
危ない。」

「わ……かってるよ。」

「サラには悪いが俺なりにやらせてもらおう。その方が性に合うよ。」  
「はいはい、ロウ、お前に付き合っただけでやるよ！」

「Natasha」、雲の擦れ擦れを飛び急速上昇、その後から敵機がピタリと離れずに付いてきている。背後からの機関砲、右翼ラダー被弾、機体が大きく揺れる。それでも舵を何とか保っているのはパイロットの腕だ。敵機、「Natasha」に対しミサイルロック・オン、火を噴きながら迫るミサイルがエレナのHMD上に赤い点で示される。

「Natasha」更に加速し距離を稼ぐ、旋回は思い通りにいかない……エレナは急上昇、機体をロールさせ、自身の装備しているミサイルを放ち自身の機体のエンジンを切った。敵機の熱源誘導弾は「Natasha」の囷に吸い寄せられるように追って行った。更に敵機後発のミサイルが一発、エレナは再びアフターバーナーを煌めかせ迫るミサイルに対し機関砲を打つ、爆風に煽られ「Natasha」はきりもみしする。

「ラストーチカはどうした！」

「飛び方が妙だったぞ。もしかしたら遠隔操作が上手くいっていないのかもしれない。」

「糞……使えないわね。」

エレナは柄に似合わない言葉で舌打ちを一つ、だがその端正な尖った顎からは冷や汗が滴り落ちた。敵機、舵の効かない「Natasha」に迫る、容赦の無い機関砲の弾丸が「Natasha」の翼を襲った、もう駄目かもしれない。そうエレナとオペレーターが覚悟したその時だ。敵機が急に砲撃を止め高度を上げた。その腹の下、先程まで敵機のいた所を20mm弾が通り過ぎて行った。

「遅いぞ！　ロウ！！」

「済まない、安全圏まで退避してくれ、ここは俺達を取り持つ。」

「当たり前だ。こちらは戦闘専門外だ。被弾した。一度基地へ戻る。」

エレナとロウの通信。「Natasha」、空域から離脱。

「Alisa」敵機を追い上昇、その背後から更に20mm弾を浴びせる。敵機、それを殆ど直角に横滑りするような動きでかわす。

「ありゃあ、無人機じゃないか？」

それを見てヴィンスが唸る。

「ってことは、母機が近くにいる可能性もあるってことか。」

「可能性としては。ただし地上かもしれないが……な。」

「ふうん、確かに。」

HMDに映される敵機のマークを視線で追う。

「ロック・オン。」

ロウの眩きで敵機がロックされる。ヴィンス、機体を制御、ミサイルのロックを解除「いつでも良いぜ。」とサムアップ。ロウは出来るだけ敵機に迫ろうと加速、背後にピタリと寄せ二発発射、爆風から逃れる為に減速、旋回する。敵機、匣を発射するも、ミサイルは敵機を追い続ける。

「ふふふ、残念レーダーホーミング。」

ヴィンスが愉しそうに言う。母機から発せられる敵機を操作する為の電波を追っているのだ。発射した二発の内一発が敵機の翼を？ぎ取った、それで十分だ。翼を失った機体は朦々と煙を挙げながら落下、雲の海に呑み込まれて消えた。

「やった！」

ロウはその様子を見て小さくガッツポーズをした。「A l i s  
a」悠々と細い翼を大空に広げ舞う。

「帰還する、ヴィンス……。」

「ポイントは入力済みだ……がロウ、悪いが着艦はオートかシング  
ルで操作してくれ。少し疲れた。休む。」

ロウが皆まで言う前にヴィンスが言う、しかし声に張りが無い。

「……大丈夫か？」

「実際、あまり大丈夫じゃないね。」

それ以降、彼は黙った。

ヴァストーク背面が迫る、ランディングアプローチ、誘導等が無機質に弧を描く。通常よりも丁寧かつ慎重に、なるべく機体を揺らさない様に細心の注意を払ってロウは操縦した。着艦後、キャノピを殆ど押し退ける様にして開く。タンカを持った医療スタッフが駆け寄ってきて、後部座席のヴィンスを連れて行った。幸い意識は有ったようでヴィンスは「大袈裟だな、歩けるよ。」と平時の軽口を叩きながらも、促されるままにタンカに横たわり、そのまま運ばれて行った。

直脇の滑走路には「Natasha」が機体を斜めに傾ける様な無残な姿で着艦していた。翼は滑走路に擦り付けたのだろう、その破片が点々と散らばっている。エレナ達の姿は既にそこには無かった、こんな有様だ、ヴィンスと同じように医務室に連れて行かれているかもしれない。

「Alisa」から飛び降りる。足元が覚束なくふら付き膝を折った、瞬間腹の底から込み上げてくる、猛烈な吐き気に襲われ、ロウは滑走路に胃の中身をぶちまけた。と言っても飛行前に殆ど物を食べていなかった為、甘酸っぱくて苦い胃酸だけしか出て来ない。それでも吐き気は治まらず暫くアスファルトの地面に両手を突いていた。奥歯を噛みしめる、情けなさど今更になって襲ってきた恐怖に彼全身を震わせた。口を袖で拭いて何とか立ち上がる。視線を上げると自分に向かつて、つかつかと歩み寄ってくる人の姿が見えた、サラだ。ロウは無意識に震える掌を握り締める。

「冗談じゃない、何故勝手な事を。貴方達は何もしなくたって良かった筈なんだ。それを勝手に接続範囲から力づくで外れて、おまけに戦闘だなんて……。あれは良いサンプルになった筈だったのに。」

サラはロウを見るなり怒気を含んみややヒステリックに彼を罵っ

た。圧倒的なまでの上から目線の物言いにロウは、震えに変えて溜め込んでいた怒りを一気に爆発させる。

「お前からこそどうかしてるんじゃないか！ あんな飛び方、いかれ  
てる。」

ロウの怒鳴り声に、サラは一瞬たじろいだが、すかさず彼に喰って掛かる。

「あれはヴァストークの戦術コンピュータが敵機データから割り出した最善の戦略だ。」

「戦略で俺達を殺す気か！」

「知った事か！ 私にそれを左右する権限なんて無い！ 怨むなら今回のデータ集積プログラムを組んだお偉方を怨むんだな。」

「どういう意味だ？」

「サンプルはサンプルと言う事だ。私にそれ以上回答を求めるな。」

サラはそれだけ言うとは後はもうただ黙るだけだった。ロウは苛立ち乱暴に眼の前に立っている彼女を、邪魔だと言わんばかりに付き飛ばし、その場を離れた。彼の背後では「Alisa」が整備班の手によって、収納庫に収容されて行くところだった。その巨体が誘導灯の光を反射して鈍く青く輝く。その日あった事など些細な事だ、とでも言うように「Alisa」は翼を畳み首を垂れる様にして導かれ、エレベーターのアームに固定された。響き渡る警告音と共に「Alisa」はヴァストークの腹の中、彼女の巣に呑み込まれて行く。冷たく乾いた風が滑走路を駆け抜けた。

「肋2本逝かれてるってさ。内臓は検査次第だと。少しの間は養生だな。」

ロウが医務室に顔を出した時には、ヴィンスは既にパイロットスーツを脱ぎ白っぽい診察用の服を着ていた。待合の固いベッドの上で横になりながら雑誌を捲っていた彼はロウの姿を見ると笑顔で手を挙げ「心配するな。」と言った。彼の口髭に薄らこびり付いた乾いた血を見てロウは、しばらくヴィンスと飛ぶ事は無理だろう……と思った。

「お前も検査を受けた方がいいんじゃないか？」

「いや、問題無いだろう。少し筋肉痛になる程度だと思う。」

「お前の身体は華奢な作りな割にはおかしな構造してると、前々から思ってた、俺は。」

言ってヴィンスは笑いそうして少し眉を顰めた、軽く咳き込む。

「調子に乗るなヴィンス、傷に障る。」

「そうだな、その通りだ。」

そうして雑誌を閉じて彼は小さく「すまん。」と言った。ロウはその言葉を聞かなかった事にした。彼が謝る事など何も無い。確かにオペレーターであるヴィンスが欠ける事はロウにとっては痛手だった。ヴィンス以上に彼の飛び方を理解してくれるオペレーターは存在しないだろうし、暫くの間替わりに自分と組むことになる人間と新たにコミュニケーションをはかる事も煩わしい。

「アルベルティ少尉、先生がお呼びです。」

カルテを手にした看護婦が診察室のカーテンを開けて顔を覗かせ、  
ヴィンスを呼んだ。

「じゃあ、暫く……。」

「早く治せよ。」

そう互いに言いあって、ロウは医務室を後にした。

階段を下った。聞こえてくるのは唯一人の足音のみ、くすんだ天井、埃の積もったルーバーを透かしてロウ頭上から降り注ぐ蛍光灯の光が彼の虚しさを吸い上げて瞬いていた。ロウは、普段ならば寮への戻り道はエレベーターを使用する所のだが、今日はただ黙々と階段を降って行きたい気分だったのだ。やり場の無い憤りに、踊り場の壁を蹴飛ばした。薄い緑色の塗装を施された安っぽい壁はそれでもびくともしそうにない。

上層部は… あんな常に地面に足の裏を付け、背中をクッションの効いたシートに付けている連中に俺達の事なんて、まさに知ったこっちゃないのだろう。奴等にとって大切なのは、まず第一に成果と結果、そうしてそれを残した機体なのだ。そこに乗り手なんていう概念は無い。サラにしてもそうだ。何にも知らない癖に、自分にプログラムに任せるなどと簡単に言い、自分が攻められれば全ての責任を操縦士（現場）に押し付ける……。

ロウは煩悶としていた。扉を凭れかかるようにして開けるとスーツの上着を放り投げ、そうして自室のベッドに伏した。無理をさせた身体に一日の疲れがどっと押し寄せそのまま布団に吸い込まれる

ように動けなくなった。

耳障りな電子音……。ロウは胸ポケットに仕舞ったままだった端末を半分寝ながら取りだした。

「……はい、ロウです……。」

「あの……、サラです。」

端末から聞こえて来た声と名前に気だるい思考は一気に冷める。

「何だ……。」

ロウは上半身を起こしてベッドサイドテーブルに置かれた時計を掴む。そうして髪の毛を掻き毟った、胃が酷く痛む。

「昨日の事、あの……悪かった。」

「……。」

「私、その、知らなかったんだ。アルベルティ少尉の事……。」

「……いや、君は任務に従っただけなんですよ。って、昨日そう言っていたじゃないか。それに、そんな言い方しないでくれよ。ヴェィンスは死んじやないんだし。」

ロウは言っつてグラスに炭酸水を注いで飲み干した。

「それで、何の用？」

「……アルベルティ少尉に一言謝りたい。」

「行けば？」

「……。」

沈黙が暫く続いた。「わかった。」と、そう先に折れたのはロウの方だった。軽くシャワーを浴び、彼は自室を出た。丁度三階分階段を上り、ヴィンスの居る医療棟に向かった。サラは先に来ていたのだろう、扉の前で手持ち無沙汰そうに壁に背を凭れていたが、ロウが来た事に気付いき一瞬視線を上げたが、直に逸らして俯いた。ロウは彼女の前を素通りし、病室の扉をノックした。

「はいはい、どうぞ。」

軽い口調の返事が聞こえ、ロウは扉を開ける。ヴィンスは「よう。」と手を挙げて読みかけの雑誌を閉じた。そして彼はロウの後ろに遠慮がちに佇む彼女を目敏く見つけ、同じように軽い口調で声を掛けた。サラはヴィンスを見るなり思い切り頭を下げた。

「……………昨日の事は……………」

その言葉を聞いたヴィンスが一瞬意外そうな顔をするも、事情を呑み込んだらしく、皆まで言うな、と手で遮った。

「いいって。アクロバットは今に始まった事じゃないし。幸い大した事も無いから、久々の長期休暇とするさ。」

「でも……………」

そう言って喰い下がるサラの顔の前で人差し指を左右に振って髪をかき上げる。

「ふうむ、ではサラ君、名オペレーターであるこのヴィンセント様が、優しくナビゲートしてあげるから俺の操縦桿を握……………いや、し……………」

ニヤケ面で俯いているサラに詰め寄るヴィンスの頭をロウが無言で殴った。その時だった。

「……わかった。」

サラが小さな声で呟く。

「ええ?!」

驚いたのは男二人の方だった。ヴィンスなど自分で言っておきながら酷い呆け顔をしていた。サラは徐に胸元に手をやりネクタイを解く。そうして啞然とする男二人に告げる。

「アルベルティ少尉がそこまで仰るならば、サラ・タケウチ、本日よりイエン・ルウオ少尉に付き従いアルベルティ少尉が現場復帰されるまでは、この私が、責任を持ってオペレーターを務めさせてもらおう!!」

「うえええええ!!!!」

自身満々に胸を張って言うサラに、再度男二人は絶叫した。

「何、この子、処女おはこっばい……。」

と、ヴィンスがさりげなく呟いたとか呟いていなかったとか。

「で、ああは言っているけど。」

「……どうするっ?」

「ヴィンスが軽々しい事言うから……。」

「いえ、ほんの挨拶のつもりでした。まさかああ受け取るとはね。」

廊下に出て現状の報告を上司にしているサラを見ながらロウとヴィンスは溜息を吐いた。確かに彼女はオペレーターの資格を持っているとはいえ、そのような無茶苦茶な論理が罷り通る訳が無いだろう……。ロウもヴィンスも内心そう思っていた。サラが端末を仕舞いながら戻ってくる。

「で、どうだった。」

「どうせ駄目でしょう。」

「はあ、アスラ様曰く、“人生一度くらい死地に赴くってのも経験として積んでおくのは悪くないよね。グッドラック”……だそうだ。」

ロウは彼女の言葉を聞くと大袈裟に頭を抱えた。正直彼にとってこれほどの精神的苦痛は無い。唯でさえ初めて組むオペレーターとのコミュニケーションでさえ苦痛である彼にサラと組むなど、考えられなかったのだ。对象的にヴィンスは腹を抱えて笑いを堪えていた。

「お前の上司って、自分の影響力の強さ、解ってるのか……。」

ロウが溢すと、彼の背中をヴィンスが叩きながらサラに対して言った。

「ロウのオペレーターは大変だぞ。」

「責任は取る。」

サラは小さく敬礼をし、背筋を伸ばす。その様子を見てヴィンス

は咳払いを一つする。

「ロウは空軍のエースじゃあないが、アクロバット飛行の腕だけなら遙かに奴等を凌ぐ……が、飛ぶ事に熱中し過ぎてなあ。」

「おい、ヴィンス……。」

ヴィンスの語り始めた無いようにロウは慌てて遮ろうとしたが、ヴィンスはそれを意にも解せず続けた。

「実際は戦闘機乗りになんか向いてないんだよこいつは。こっちの事も考えねえくせに、やれ何の操作はまだなのか、アレをしるコレをしる気を効かせるとまあ、煩い。」

「……。」

「だが、腕は確かだから、そこは信用していいぜ。」

「はい。」

サラが生真面目に返事をする、ヴィンスはゆるりと笑って、気まずそうに口をパクつかせているロウを後目に更に続ける。

「朝は弱いから毎日起こしてやらなきゃならんし、気付くと機体の整備ばかりやってっから飯だの事務作業だのこっちから言っちゃらなきゃならんし。」

拳を作って熱弁するヴィンスを見てサラが笑った。

「まるで奥方のようだ。」

「そうだ。」

サラのとんでもない発言に、しかしヴィンスは大真面目に頷いた。

「それが果たして君に務まるか。まあ、ガンバレ。」

## 7 (前書き)

サラの言葉遣いがブレブレ。後ほど修正致します。っていうか方針的にもブレブレなんですけどね。そこはご容赦ください、番外編と  
言う事で(えー！！？！)

「私、知っていた。テスト飛行でも何でもなくて、アレは模擬戦だ  
って事、ヴァストークの戦術コンピュータと、空軍側のリモートコ  
ントロールで動く模擬敵機との。」

サラはクリームソーダのバニラアイスをストックで突つく。バニ  
ラアイスが緑色の炭酸水に沈み白いクリームが溶けて滲んだ。食堂  
の一角、ロウとサラは向かい合わせで味気ないテーブルに腰を掛け  
ていた。ロウは麦の入ったトマト味のスープに乾いたパンを浸して  
頬張る。食堂は淡いブルーの入ったグレー、空軍の制服で埋め尽く  
されている。その中で、サラのチャコールグレーの制服は酷く浮い  
ていた。チラリチラリと刺さる同僚達の視線に気付かぬふりをして  
ロウは黙って聞いていた。

「私はヴァストークの取った戦術的行動は間違っていないかったと、  
それは今でも思っている。けれどそれで誰かが傷つくとは思ってい  
なかった、ただ、それだけ。ヴァストークは、あの子はまだ良く解  
っていないだけなんだ。私たちを、生き物と言う物を。けれどあ  
の子は悪い子じゃない、そう感じた。」  
「あの子ねえ……。」

サラが殆ど独り言のように呟いた。ロウは彼女の言う事に少し興  
味を覚えて相槌を打った。

「そうだ……。ロウ少尉は、そう、感じた事は無いか？ 同種の「  
魔素」に宿る意志のような物を。」

「さあ。そもそも俺には「魔素」という物が判らない。」

「……そうか、それもそうだな。んー、ロウ少尉は自機に対して

人格の様なものを見出したりはしないか、それと同じような物だろう。多分。」

言ってサラは少し微笑った。

「少尉ってのはやめてくれ。ロウで構わないよ。」

ロウはトレイを持って立ち上がる。

「あ、ちよつと何処へ行く。」

「収納庫。」 Alisa 「に会いに行く。」

「待って、ちよつとロウ！」

ロウの背中をサラがソーダをストローで吸いながら小走りで追う。その姿を見た数人が嘲笑と冷やかしの混じった笑いを浮かべていた。

「おはよう、ダリス良い天気だね。」

「本当ね。生憎、下界は吹雪よ。それと、もう昼だ！」

収納庫でダリスと定型の挨拶を交わす。ロウは「 Alisa  
」に歩み寄り傷一つなく輝く鈍く青い機体を見上げた。

「ヴェインスの事、聞いたよ。」

彼の背後からダリスが声を掛けた。首に掛けたタオルで滴る汗を拭い彼女はロウの傍らに立った。

「うん。」

「だあから言ってただろう、無茶な飛び方するなって言っただろ。」

「うん。」

「肋だつて？ 肺までやってんのか。」

「本人は何も言ってくれないけれど、たぶん。」

「少し時間がかかるな。」

「……。」

「あのお……。」

ロウが黙った、その間を縫ってサラの声が収納庫に響く。ダリスが肩をビクつかせて振り向いた。

「何だ何だロウ、誰だ、空軍じゃないね?!」

ダリスがニヤニヤと笑ってサラに歩み寄る。そうして品定めするように足元から何度も視線を往復させる。

「やるじゃん、ロウ。あたしはてつきりアンタは……。」

「違います！ 私は、本日付……かどうかは解りませんが、アルベルティ少尉の復帰されるまでロウ少尉のオペレーターを務めます、サラ・タケウチです。」

初対面のダリスに対して口調を改めてサラは言った。

「へえ、じゃあそんなチャラチャラした服なんか着てないで空軍の制服を着な。」

ダリスは言葉の内に少し冷たい響きを含ませてサラに言い、「何だよ、ヴィンスの女？ あいつも手が早いよなあ。」と、興味を無くしたように去って行った。

「それも違います!!」

その背中に向かってサラは顔を赤くして叫ぶが、ダリスは豪快に笑いながら振り向かず手を振った。

ロウはキャノピを開き、「Alisa」の操縦席に滑り込む。昨日の事なんて、まるで些細な事、否、そんな出来事は無かったかのようにそこはいつも通りの景色で……彼はメインコンピュータを起動させた。薄青く光るディスプレイに浮かぶ無機質な文字、ロウは自身の端末を繋ぐと表示言語を切り替えた。瞬間、同じ意味の文字の羅列の筈なのに、彼にとってそれは「Alisa」の声となつて聞こえた気がした。

ロウはシートに沈み込むように凭れて、機体の動作チェック項目の書かれた提出用シートを抱えて眼を瞑った。深く息を吐く。十分に睡眠はとった筈なのだが、彼は酷く疲れを感じていた。色々な事が起こりすぎた、たった一日だというのに……。

「案外狭いな。」

モゾモゾと衣擦れの音がしていた、ロウが気だるく振り向くとすぐ後ろのオペレーター席にはサラが座る所だった。白い内太ももがチラリと覗きロウは慌てて視線を外した。

「……勝手だな。」

「勝手か？　しかし把握しておく事は必要だろう。」

サラは言い、後部座席のディスプレイを立ち上げると小気味良い音を立ててキーボードを叩いた。そうして「ああ、これが……そうか、ふうん……。」と、一人でぶつぶつと呟いている。ロウは複

雑な気持ちだった、不可侵であつて欲しい部分に土足で踏み入られたような気分……オペレーターが変わる度にいつも感じていた事だった。

「なあ、ロウ……。」

「何だよ。」

「この……XYZというフォルダは一体……？ 何かの作戦マニュアル……か？」

「開いて見れば？」

「ふむ………うっ……。」

サラが絶句する。彼女の眼の前には彼女が今まで見た事の無い妖艶な画像が広がっていた。

「ロウ少尉！ 何て物を、いやアルベルティ少尉か？！ 不潔な、

いや、ロウ少尉知っていた？！」

「はっはははは。」

サラの慌てぶりにロウは思わず声をあげて笑っていた。サラは立ち上がり抗議しようとしたが、しこたま頭をぶつけて頭を抱えて座席にストンと沈み込んだ。それを見て、ロウは更に笑い、そうして言った。

「バンブーは、パイロットスーツは持っているのか？」

「ええ、ここに配属になった時に一式……ん？ バンブーって……。」

「

「なら、着替えて来るか？」

「は？」

「飛んでみるかって言っているんだよ……良いでしょう？ 中佐。」

「え？」

「気付いていたか。」

サラは再び立ち上がるうとしてまたしても頭をキャノピにぶつけた。それを確認して笑うとロウはキャノピを開けた。サラがぶつけた頭を擦りながら「Alisa」から身を乗り出し覗きこむ、中佐が心配そうに二人を見上げていた。

「新人には慣らし教育が必要だと思います。」

「ああ、そうだな。まあ、それを伝えに来たのだから。」

サラはそろりとコクピットから出て、車輪を伝い収容庫の床に飛び降りた。中佐に対して敬礼を一つすると一つ頭を下げ小走りに去った。その後姿を眼で追いながらロウは中佐に対して言った。

「根回しが早いですね。彼女で承認は……。」

「承認が下るも何も、侯爵殿たつての願い出、しかも詫状添えとあつては断るにも断れん、否断る理由も無いのが事情だ。ラストチカ自体、本来は「魔素」をある程度理解している者がサポートした方が良い物なのだから。」

「ヴァストークの方は？」

「現状、問題は無い。実戦ではアダム幕僚長もお見えになる、その配下の方々もサポートに入ってくださるそうだしな。」

「俺達も配下の方々つてやつだと思っただけだね。」

ロウは軽く嫌味を含めて中佐に言う。「お前もヴィンスに似て来たな。まったく。」中佐はやれやれと頭を振りながら収納庫をゆっくりとした足取りで去って行った。入れ違いにパイロットスーツを身に纏ったサラが「Alisa」に歩み寄る。

「乗れ、バンブー。音を上げさせてやる。」

「言われるまでも無い。それから、私をバンブーと呼ぶな！」

サラが搭乗しHMDを装着したのを確認し、ロウは再びキャノピを閉めた。管制より通信、ハッチが開く。薄明かりの空、光が斜めに差し込んだ。

「ロック解除。」

「え？」

「解除キー入力、オペレーターだろう。」

「あ、はい。」

サラの素早いキー・タイプ、ラストーチカ機首を下げる。背後でブラズマが煌めき、とたん彼等の全身に凄まじい重力がかかる。サラが呻いた、弾丸のように飛び出した「Alisa」は空中でその細い翼を大きく広げ悠々と、玄鳥、空を舞う。

「……………」

全身に押し掛かるGに呻き息を漏らすサラに対してその姿を眼の端で確認しながらもロウは冷徹に彼女に次々と指示を出す。

「車輪、収納。離陸後は各所点検。」

「解つて……………」

サラは歯を食いしばり震える指えディスプレイを操作、車輪（レールを滑走する為の物）を収納し、各箇所点検を始め点呼。流石にヴィンスの様にスムーズにはいかないか。まあ、いつてしまったらこちらのプライドにも関わるな。ロウは思いながら操縦桿を操作、上昇する為に傾けていた機体を水平に保つ。

「オール・クリア、問題個所、ありません。」

「オーケー、サラ、自動運行には切り替えずそのままマニュアルでナビゲートしている。」

「ラ……ラジャー。」

機体はゆるゆると旋回し、ヴァローナ領土……塔の縁上空をなぞる様に飛ぶ。サラは小さく息を飲んだ。見渡せる範囲は全てが濃紺の空、そうして自分達が居住しているあんなに広大だと思っていた塔は遙か眼下、雲を突き抜け聳え、その中に居た時には想像も出来ないような光景が広がっている。

分厚く斑に蠢く雲の、そのキメ細かな産毛の様な毛羽立ち。きつと暗くなる頃にはどんなにか星が近く見える事だろう……サラは息苦しさで感動に息を漏らす。ロウはそういう彼女を見て少し微笑ましく思った、昔初めて空を飛んだ頃の自分を思い出す。しかしこれから一時とはいえ共に空を駆ける事になるかもしれない相手だ。今この時にその資質があるのかどうか見極めなければなるまい。

「レーダー確認を怠るな、レーダー上に障害となるものは？」

「オール・クリア、ありません。」

「管制に繋いで、帰還時刻を発進、今より1800秒後ランディンググループローチ予定通り。それからこの時刻に他の機体が滑走路を使用していないかどうか確認。」

「はい。」

マニュアル操作の為、サラはキータイプで入力、管制に繋ぎロウの言葉を復唱する。

「管制より応答、帰還時刻了承。現在時刻から帰還時刻までの滑走

路の使用状況だが、他の機体の発着陸の予定は現在入っていないそうだ。」

「よし、ならばこれから君の資質を見極める。いいか、絶対に吐くなよ。」 A l i s a 「の中に吐く位ならマスクを取って酸欠にでもなっている。」

「む……辛辣だなあ、私はそんなにヤワでは……っうああ！」

言ったそばからサラは叫んだ。それもその筈で、ロウが減速させ急降下、機体をロールさせながらダイブしたからだ。思わず目を瞑る彼女にロウは「計器、ディスプレイから眼を離すな！」と怒鳴り付ける。機体は小刻みに震えながらどんどん高度を落としていく。今にもばらばらになってしまいそうな恐怖にサラは何とか耐え声を張り上げた。

「少尉！ 高度を保ってください、デッドラインまであと僅かです！ このままでは……。」

「僅か……とは？」

「カウント、トゥルリス最上部ヴァストークまで、高度800、750、700……危険です、このままでは……。」

サラの声がやや悲鳴交じりになる。それでもロウはエンジンを切ったまま、自由落下に機体を任せたままにしていた。

「甘いな。」

「え？」

「距離、400、350、300……っう……。」

サラが呻く。レッドアウトしているかもしれない、ロウは思った。彼は彼女の声が途切れる頃やっと操縦桿を再び握る、一気にアフター・バナーを全開に、ヴァストークの滑走路擦れ擦れを掠める様に

して再び機体をロールさせながら急上昇。高度を十分に上げたのち背面飛行を暫く続けたのち機体を水平に戻す。サラが一息吐くのを見計らってロール、再び彼女は小さく叫んだ。

「気分はどう?」

「……最悪……。」

「機体とリーダー点検して。」

「リーダー上に敵機および、UNKNOWN無し、機体異常無し。」

「オーケー、オートに切り替えても良い。」

その言葉を聞きサラはすぐさまHMDを外して頂垂れた、その息は荒い。ロウも操縦をオートマチックに切り替えた。

「初飛行にしてはまあ、頑張ったんじゃないの?」

「ロウ少尉は最低です。」

「あははははは。言うなよ、バンブー。」

「笑いごとか? 笑いごとなのか? 殺す気なのか。」

「それはお前達の方だろうか?」

サラはそれを聞くとむくれた。

「暫く休んでおけよ、10分もしたらランディング・アプローチに入る。その時にはマニュアルだ。」

「了解。」

ヴァストークの背面滑走路に垂直着陸、機体の割には華奢で鳥の様な間接を持つ足の車輪で着艦する。ロウは指差し点検をした後キヤノピを開けマスクを取った。清々しいが少し冷たすぎる風を肺に思い切り溜め込んだ。

「散々だ、まったく。」

サラがマスクを取り立ち上がって、頭を振った。彼女は溜息を一つ吐くと、疲れたのだろう。眼鏡を取って、眼頭を軽く押さえる。濃いブラウンの髪が風に靡く。顔に掛かった髪を指で耳に掻き上げて振り向く。その様子にロウは不覚にも目を奪われた。グレーのピントの合わない瞳がロウを捉える。

「……？ 何か？」

「いや、何でもない。」

ロウは「Alisa」から殆ど飛ぶ様にして降りると、HMDを片手に下げて一人歩いて行った。サラが何かを口走りながらその後を追おうとしたが、降りるのに手こずった、その間にロウは室内に入ってしまった。「Alisa」の周囲には、作業員達が集まってきた。彼等は機体にロープをかけると、先導機でエレベーターまで引いて行った。

「資質は見極められたのか？」

ふら付く足で何とか駆け寄って、サラは扉を開け放ち遠くに小さく見えるロウの背中に向かって叫んだ。その言葉に彼は黙って背を向けたまま手を振るばかりだった。

「で、どうなの、最近彼女は。」

「いまいち、飛行機乗りとしての才能はあんまり。ただオペレーターとしての素質はあるよ。機器の扱いに関しては才能あるんじゃない？」

「へえへえ、ロウが他人を褒めるなんて珍し。」

「そんなこと無いだろう。俺はヴィンスを評価してるよ。」

「お、嬉しいね。でもなんで上から目線なのかしら。」

あれから、サラが正式にヴィンスの代わりとしてロウのオペレーターを務めるようになってから5日、ロウは欠かさずヴィンスの部屋に来ていた。その日の機体の状態や出来事を彼に話す事が日課のようになっていて、どうやらサラも彼の元に通っていたようだったが、それはロウとは違いラストーチカの事や、オペレーターとしての仕事内容などを聞きに来ていたらしかったが。

病室で看護婦を小脇に抱き抱え機嫌良さそうに笑うヴィンス、ベッドの傍らでパイプ椅子に腰掛けたロウは小さく息を吐く。

「やだわ、お二人はどういう関係なの？」

「どういう……？ ってそりゃあどうという意味だい、俺はノンケだよ。ダーリン。」

ヴィンスは看護婦の長い金髪を指で辿りその顎を軽く持ちあげて引き寄せた。

「ヴィンス、また問題視されても知らないからな。」

「御心配無く。どのみち今は休暇中だからね。」

「これだから南西出身者は。」

「そりゃあ差別だな。だいたいこの国から見たら殆どが南国だよ。」

彼はそう愉しげに言いながら、看護婦の胸を鷲掴みにする。ロウは流石に鼻白んで椅子から立ち上がった。

「やってらんないね。」

「そんなだからいつまでたっても童貞なんだよ。」

「童貞じゃねえ。馬鹿。」

「はいはい、それじゃあ、まあサラちゃんと頑張ってね。」

「……それは無い。」

ロウはうんざりだと言わんばかりに溜息をわざとわかる様に吐いてその場を去った。

味気無い廊下を歩く。空軍施設内はここ数日慌ただしく、ざわめいている。ヴァストークの実験の日以来、だ。結果に関わらず実用化可能と銘打たれたシステム、それを根幹としての計画が推進中の事らしい。

パイロットの自分にはまだ何も知らされていない、ただ近々大きな作戦が実行に移されるらしい、と風の噂に聞いた位だった。自分はまだ空を飛んでいただけなのに……とそうロウは心中ぼやいた。

戦場は嫌いでは無いが好きでも無い。ましてや不慣れなオペレーターを背負って飛ぶなど不安で仕方が無かった。確かにサラは慣れてきているとはいえ、そこは男と女の差、体力的な差が大きい。飛行に支障が無ければいいが……。

そこまで考えてロウは頭を振った。らしくない、と彼は思った。

翌日、空軍第3部隊合同ミーティング、ラストーチカ、及びヴァストークに艦載されている全ての戦闘機・偵察機の操縦士の全てを講堂に集めたミーティングだった。ロウが噂に聞いていた通り、ヴァストークを主力とした作戦概要のミーティングだった。

ヴァストークを主力とした空軍第3部隊、及び第5空挺部隊の一団は明日アルディアナ北方辺境領土、軍事防衛前線基地の置かれるセヴァスを攻撃、ヴァストークより発進する爆撃機、及び空挺部隊輸送機の護衛をラストーチカが務める。

スクリーンに次々と映し出される様々なデータが青白く光っている。ロウは傍らで神妙な面持ちでミーティングを聞いているサラを盗み見た。彼女にとっては初めての实战、それもこれほど大規模な物とは。

ロウですら少し胸が騒がしい、防衛線が領空境界での小競り合いしか経験が無いのだ。彼女が必要以上に緊張していてもおかしくは無い。さらにこの作戦ではヴァストークに幕僚長アダム氏とヴァローナ皇国の皇王様が搭乗されるとの事だ、皇王様が動くとなれば配下の親衛隊も護衛任務の為に搭乗するだろう。サラにとっては間近に居ながらも本来の自分の任務を果たせないという歯痒い思いもあるのかもしれない。

ミーティングを終え、隊員達はそれぞれ自分の持ち場に戻って行った。サラとロウも第3部隊の諸務室に戻る為廊下を歩いた。ロウは歩きながらサラに話しかけた。サラは空軍指定の少し青み掛かった薄いグレーのジャケットを羽織り、襟元についたファーに顎を埋

める様になっている。

「緊張してる？」

「まあ……。少尉だって少しは緊張しているのでしょう。」

サラはくぐもった声で答える。彼女は資料類を両腕でしっかりと抱きしめていた。

「皇王様にくつついてアスラも来るんじゃないの。」

「ああ、恐らくな。」

「良かったんじゃない、久しぶりに会えて。」

「何故そう言う事を言う？」

「ヴェンスが言ってたぜ、バンブーはアスラにフォーリンラヴ……。」

「ふおーり……。な、何を?!」

サラは呻いて顔を耳まで真っ赤に染めるとファーに更に顔を埋め、口ごもる。ロウはそれが面白くて笑った。彼女は暫く無言で俯いていたが不意にぽつりと言葉を漏らす。

「私は……。そうだな、好きではないと言えば嘘になるだろう。アスラ様は良い人だ。親衛隊に入隊を許された女子の中には彼を狙う者も多い。皆、実家から良縁をと迫られて入ってくるのだからな。」

「え……。なんかそれは大企業に取り敢えず入社する良家のお嬢様みたいだな。」

「本当の話さ。私もそうだ。」

ロウは呆れかえって髪をかき上げた。ふう、と溜息を一つ溢してサラは一度立ち止まる。そうして少し憂いを含んだ乾いた声で小さく呟いた。

「私が、もしあの人と上手く結ばれた事があつたとしても、きっと私は以後の人生を寂しい気持ちで送るのだからな。あの方は誰に対しても優しいんだ、あの方の事を嫌う人は居ない。けれどあの方が心底心酔しているのは皇王様だけなのだからな。」

「男同士だろう、それは。部下が上官に心から仕えるってのは美談だと思っけど。」

「……まあな。」

サラは小さく笑い肩を竦めた。ロウは気恥ずかしくなりこの話題から離れようと別の話題を探した。

「そ……そういうえば、幕僚長殿の直属部隊ってのはあるのか？」

「いや、明確には存在していない。有るとすれば私たち親衛隊が兼務しているといった所だな。」

「そうなんだ。」

「親衛隊と一口に言っても、内情は複雑だ。副隊長のアスラ様は皇王様サイドの方だが、隊長のテーヴァイ様はアダム様にべつたりだ。親衛隊が結成される前から彼はアダム様の部下だったからな。私は産業省長のアレクサンドロ・ギイゴール卿の推薦で親衛隊に入隊したから、アスラ様サイドに居るが、軍部に縁者を持つ者達の多くはテーヴァイ様寄りの立場を取っている。」

「面倒だな。」

「そうだな。正直、ここでの生活は不慣れなばかりで疲れる事も多いが、気分的には少し息抜きが出来ているのだよ。私自身な。」

サラは笑いながら諸務室の扉を開けた。彼女はヴィンスのデスクに腰掛けると、資料類を置いてジャケットを脱いだ。ロウも自分のデスクに資料をばら撒き、キャスター付きの事務用椅子に腰を掛け仰け反った。産業省長の口利きで入隊ね、お嬢だっわけか…、

そんな奴を万が一でも怪我させる事があれば俺の身が危ないんじゃないか……？　そう心中で呟き、彼はある事実に気が付いて慌てて身を起こす。

「ああ、バンブーってもしかしてタケウチ製薬の？」

「……ああ、なんだそんな事、物凄く今更だな。」

サラが呆れたように眼鏡を掛け直した。ロウはますます気が重くなるばかりだった。

事務処理を済ませた後ロウは一人で収容庫へ向かった。この時間は整備班の人間も作業を終えており、収容庫はシンと静まりかえっていた。羽を折り畳んだラストーチカがそれぞれのレーンに沿って並んでいる。第八番機「Alisa」、ロウは小さく名前の刻まれた翼を撫でた。明日はこの機体で出撃する、そう、出撃するのだ。これまでとは全く違う。

「Alisa」を与えられる前もロウはヴィンスと共に戦闘機に乗ってはいたが、それでも実際に出撃命令を出された事は無かった。その頃ヴァローナはアルディアナ帝国の保護下にあったし、こんな北方の領土を態々落としに来る国も無かった。まあ、実情は保護下というよりは支配下の方が正しいのかもしれないが。

「なんで侵攻かな……。」

ロウは一人呟いた、声はただ分厚い鉄壁に跳ね返り響く。今の今までアルディアナ帝国の圧政を受け入れていた、彼の国に侵略され逃げ逃れて来た他国の難民も多い。この作戦は民意によるものなのだろうか。ヴィンスならば、難民の彼ならば喜んで出撃したのだから。

うか。アルディアナの支配から解放されたいという国は多いだろう、けれどそれは奪われるといった意味ではないだろうに。お偉い人々の考える事はわからない、綺麗事で塗り固められた野心なんて御免だ、言い訳はご都合主義。彼は心中で巡る思考を押し込めて「Alisa」に乗り込んだ。

狭いコクピット内がロウにとっては一番落ち着く場所だった。自分の生まれ育った家も暗く狭い場所だった、だからなのかもしれない、若しくは記憶の片隅に追いやられていた母親の温もりに似ているのかもな、と、そう彼は思った。

ロウはシートに深く凭れ眼を瞑ってみた。自分の鼓動の音が耳の奥で響く、サラの出自を今更ながらに気付き気後れしていた。タケウチ製薬はヴァローナ国内の市販薬の殆どを製造出荷している、アルディアナの支配下にあった頃には大陸各地に工場もあったはずだ。それほどまでに大きな企業の一族を後ろに背負って飛ぶなど、気が重すぎるのだ。

俺は、自由に空を駆けたいだけだ。なあ、アリサ…。

ロウは小さく口の中だけで呟いた。

翌日、作戦に参加する空軍部隊は全員が塔の最上部に赴き出て、ヴァストークの前に整列していた。ロウとサラもその中に混じっていた。更に、作戦に参加していない他の兵士や職員達までもが窓ガラス越しに様子を伺っていた。それもその筈で、皇王と幕僚長がヴァストークに乗り込むのだ。

ガラス張りの扉が開く。それを見て皆が敬礼をした。チャコールグレーの制服を纏った親衛隊の隊員達がまず敬礼をし、先導する。その後ろからやたらと背の高い、指揮官らしき狐眼の男、その傍らには彼と比べるとやたらと背の小さいアスラが続く。彼は神妙な面持ちで敬礼すると、ずらりと並んだ隊員達を見まわしていた。サラを探しているのかもしれない、とロウは思った。

前列の方から歓声が上がる。真っ赤な、燃える様な赤毛に白い士官服が映える。映画にでも出てきそうな気取った容姿と仕草、ロウは初めて間近で彼を見たがこれほどまでに若いとは思っていなかった。そうしてすぐにその後ろに続く人物に視線を奪われる。彼以外の隊員達も同じ様子で、ただ茫然とその人物を眼で追っていた。

銀色の輝く髪に白い軍副、裾の長いコートを風に靡かせて頼りなく俯き歩く。顔立ちは酷く整っており、女性のような容姿。

「誰？」

「馬鹿だな、皇王様に決まっている。」

「あれが……。イメージと大分違うな……。」

ロウとサラの短い会話。ロウは彼を眺めながらアスラが依然彼に語った皇王様の事を思い返していた。確かに美しいかもしれない、がそれ以上にどこか哀しい雰囲気を纏った人だと、ロウは直感的にそう思った。

彼等は搭乗し、ブリッジから敬礼を送った。前列の兵士達が捧げ銃、ブリッジから上階層へと続く階段を上り、ヴァストークの背にある滑走路のその一番先端に幕僚長のアダムと皇王のセラナ、親衛隊の数名が彼等を囲み現れた。アダムは群衆に向かって手を振ると

予め用意されていたマイクスタンドに向かって語る。セラナはその後ろでただ立っていた。その光景が空中に映し出される。皆がその方向に視線を送った。

「諸君、この作戦は我が国にとって、また他の圧政に喘ぐ国々にとつては大きな初めの一步となる事であろう、その作戦に参加する事を誇りと思つて欲しい。これは侵略戦争では無い我々は、世界の救世主となるのだ……。」

ロウは彼の演説を何処か遠くに感じながら聞いていた。その言葉は修飾された鉄の塊の様で、彼にとっては非常に耳障りな物でしかなかった。周りを見渡せば意気も揚々と高らかに、頬を紅潮させ引き締まった表情で敬礼を続ける同胞達。下らない、そう思った。拳を作りながら熱弁するアダムの後ろにただ立ち尽くしている白い人を見る。彼の傍らには少女とアスラであるう親衛隊の兵士が両脇を固める様に立っていた。彼は何を想い立っているのだろう。幕僚長殿とはまったく異なる雰囲気醸し出す彼を見てロウは思う。もしかしたら、あの人は違つのではないだろうか？

「空の民よ、風を切り裂く双翼は今、自由の為に行使されるのだ！ 立ち上がるべき時は今、世界に誇りと思つて文化を我らが手で取り戻そうではないか。真の解放を。大空の様な自由を。」

言つてアダムはチラリと後ろを伺つた、セラナに目配せをする。セラナは一度肩を落とし俯いたまま数歩前に歩み出た。アダムが自らマイクの高さを彼に合わせる。セラナは小さく、口を開き掛けたが一度考え込むように口を噤み、息を吸つて一言だけ放った。

「全員、生きても還れ。」

澄みきって乾いた、痺れるほどに冷たいその日の風の様な声だった。

それから程なくして、ロウ達空軍の兵は散開し、それぞれの持ち場に付いた。ロウとサラは収容庫に赴き「Alisa」に乗り込む。各所をチェックし機体に問題が無い事を確認した。それは通常時よりも入念に。他の機体にもそれぞれに操縦士とオペレーターが乗り込んでスタンバイ、こんな光景は3年空軍に居るロウでも初めて見る。

「Alisa」の傍らに一人の女性が歩み寄った。エレナだ。HMDを搭載したヘルメットを小脇に抱え、「Alisa」の横腹を軽くノックする。

「エレナ？」

「ロウ、ヴィンスの件は散々だったわね。」

「エレナ達は大丈夫だったのか？」

「まあな。ランディングオペレーションは見るに堪えない無様な物になってしまったが、無事よ。じゃないとここにいないでしょ？」

「そりゃあ確かにね。あれ、今日は？」

「ああ、私の「Natasha」はガレージ行きだからね。今日は爆撃機の副操縦士って所ね。護衛、よろしく頼むわ。」

「ああ…。」

ロウの煮え切らない返事にエレナは小首を傾げ見上げていたが、「じゃ。」と一声掛けて去って行った。サラがそろりと後部座席から顔を覗かせてその後姿を視線で追っていた。

「ロウ少尉、どうかしたのか？」

「いや。ただ、何だかねって感じた。」

「何がだ？」

「普段からあの二人はあんな感じなのか？」

「あの二人？」

「幕僚長殿と皇王陛下。」

「……まあな。ただ、セラナ様はいつもよりも更に沈んでいた様な気がするな。アスラ様が心配そうにしておられた。」

「ああ、そつちですか。」

「う…… 煩いな。少尉は嫌なのか？」

「いや。俺は戦闘だろうが何だろうがそれで空を駆ける事が出来れば構わない。ただそれには洒落た言葉や理由、大義名分なんていないんだ。」

「複雑だな。」

「大丈夫だよ、作戦は理解しているし逆らおうとも思っていない。」

いざって時は「魔素」のリンクシステムがあるだろ。そつちの方はバンブーに全部預けるから。」

「私はそれしか出来ないから…… だから、私の事をバンブーと……」

……！！！！

「期待してるよ。」

言って口ウはHMDをかぶる。サラは言おうとしていた言葉を途切れさせて口を開けっ放しにしたまま暫く中腰で立ちっぱなしになっていたが、頬を膨らませるとシートに深く埋もれた。

\*\*\*

「システム、オール・グリーン」

「サブ動力、正常に作動。トゥルリスとの動力移送リンクシステム、接続開始。」

「接続、第一層解除、正常接続完了、第二層ロック解除接続5・4・3・2・1、正常に作動、第三層……。」  
「メイン動力スタンバイ、オール・グリーン。」  
「核室準備、動力移送リンクシステムスタンバイ。いつでも行けます。」

管制ブリッジ、空中に何層にも重なったディスプレイの前にオペレーター達が忙しく働いていた。その中央には何層にも張り巡らされた小さな部屋にはセラナが一人坐している。俯き手を重ねて座る彼女をアダムは見下ろしていた、その口元には薄い笑み。

「第七層ロック解除、動力移送リンクシステム完全に接続、オール・グリーン。」

「さあ、セラナ君。」

アダムは一声静かに核室の彼女に告げた。彼女は、閉ざしていた瞳を開けてそうして核室の中心に浮かぶオーブにそっと手を触れた。

瞬間、閃光が迸った……。

\*\*\*

小刻みな振動と共に耳が詰まったような感覚に襲われ、サラは自分の鼻を摘み息を呑み込んだ。

「発進した。」

ロウがディスプレイから目を離さずに言った。

「よくもこんな巨体が浮く物だ…。」  
「これだけエンジン積んでいるからね… 燃料は「濃縮魔素」だから機体もできるだけ軽くなっているって事だろう？」

ロウはサラの言葉に返し目を瞑った。背中の奥からジワリと遅い来る浮遊感は戦闘機の離陸とは異なり、どこか歯痒いような居心地の悪さを彼は感じていた。出撃まではまだ暫く時間がある、少し寝ておこう… ロウは操縦席に座ったまま目を瞑る。「ああ、完全待機時間までは自由だから好きにしなよ。」それだけをサラに告げ、彼はゆるゆると薄い闇に落ちて行った。

サラは暫く後部座席に座っていたが、やがて何を語りかけてもロウは答えないだろう、と思いそつと彼を起こさない様にキャノピを開け収納庫の床に飛び降りた。収納庫の分厚い鉄扉を開け通路に出る。手すりに掴まりながら歩く、通路の先に人が集まっており、彼女の人垣の後ろから覗きこんだ。

強化ガラスのその先に真っ青な空の海、雲の白妙は遙か彼方まで分厚く無限に続く。サラは思わずほうつと溜息を吐いていた。同じ光景を何度も戦闘機のキャノピ越しに見ていた筈なのに、その時の様な鋭さはこの青には無く、何処までも悠久に染め行く優しさが漂っている様で、知らず知らず笑みがこぼれた。これから戦闘に行くとは思えないような自分自身の精神状態に彼女は一度恥じたが、だももしかしたらもう、帰ってこれない事があるかもしれないのだとしたら、今を少し位、楽しんで良いではないか。

開き直った気持ちで彼女は通路を歩く。行先はブリッジ、一般の

兵士ならば達いる事を許されないその場所も、彼女の親衛隊隊員という立場が可能にしてくれる。この船にはアスラも乗っている筈だ、ならば一言、出撃の前には挨拶をしておかねば、そう彼女は思ったのだ。

飛行機の中とは思えない長い廊下を歩く。途中数組のカップルに擦れ違った、パイロットと諸務員だろうか、手を握り合う彼等は甘い言葉を囁き見つめあう。サラは彼等を見る度に少し空虚な、不愉快な気持ちになった。わざわざ人の通りのある所でしなくても良いのに……と思ったのだ。

暫く行くと、EDチェッカーにより侵入が制限されているエリアに出た。サラは首から下げたカードを切ってロックを解除する。その先にはサラにチェッカーがあり、彼女はブリッジにたどり着くまでに5、6回カードを切った。

いざ、ブリッジの鉄扉の前で彼女は立ち止った。何だろう、何処か空間が騒がしい、「魔素」の落ち着きの無さを感じたのだ。そつと鉄扉に耳を付け中の様子を伺う。

「構わない。続ける、そのままにして放っておけ。」

「それ以上は、お止め下さい！ セラナ様の御身に何かあつたら貴方はどうするおつもりですか！！ また10年前の惨事を繰り返すおつもりですか?!」

「テーヴァイ、彼を黙らせる。君の部下だろうか？」

「……っお放し下さい、隊長!!」

アスラの怒声とそれに対するアダムの冷徹な言葉が聞こえた。今、

この扉の向こう側で何かが起きている……。サラは自分の鼓動が速くなるのを感じた。この鉄扉の向こう側に、踏み込んで行き状況を知りたい、けれど……。

サラは踵を返して走り去った。あの先に自分が行った所で何ができるだろうか……。彼の手助けをしたくても、寧ろ邪魔になる。今私は親衛隊ではなく一介の空軍兵士なのだ……。もと来た道を一気に走り抜け膝に手を突いた。

「無力だな、私は……。」

誰に対しても無く、彼女は一人呟いた。

夢と現の境目、酷く気だるく心地よい白昼夢。背中から肩のあたりまでを包み込むシートに体重を預け切り、外界を遮るキャノピは風や雑音の一切合切を通さない、静寂。

ロウは曖昧な意識の中で不意に、瞼の裏側の暗闇に舞い落ちる一片の光を見出した。何だ……。？　ロウはその光の降ってきた方向に意識を投げ掛けた。それは真っ白な羽、双翼から舞い落ちる光だ。彼は翼の主を一目見ようと手を翳して仰ぎ見るも、それは叶わなかった。ただ、声が聞こえたような気がした。

「それは僕の翼、どうだい、綺麗な物だろうか？」

幼い無邪気な少女の声、けたけたと笑っていた。

「アリサ……？」

ロウはその声の方向に向かって呼びかけるが返事は無い。ただその透明な高い声は遠くで笑い転げて言う。

「何だいそれは。僕は僕だ、勝手に名前を付けるなよ。それは僕の、一部の事だろう?」

少女は言っ、去って行くのをロウは感じた。「待て…。」手を伸ばすもそれは宙をただ掻いただけだった。

眼を開ける、モゾモゾと気配を感じたのだった。背を少し浮かせキャノピを開いた。サラが驚いたような表情で覗きこんでいた。

「起こしたか?」

「いや…。もうそんな時間か?」

「いや、まだ時間はあるが、居場所が無くて…。」

サラは後部座席に滑り込みキャノピを閉じる。

「ブリッジに行けばいいじゃないか。」

「……。いや、忙しくしているだろうと思ってね。」

サラの声が少し沈んでいるのをロウは見逃さなかったが、敢えてそれには触れずに、ただ黙っていた。

出撃のアラート、ブザー音がけたたましく鳴り響く收容庫のラストーチカ18機全機、それぞれの専用レーンにスタンバイ、收容庫のスタッフが慌ただしく退避行動を取る。収納庫の扉が徐々に開かれ吹き荒ぶ風が機体を激しく振動させた。傾れ込む白く霞む気流が鉄壁を打ち鳴らしていた。

まずは奇数番号機、「Alisa」の両隣りの機体が機体一つ分高い位置までレーンと共にリフトで持ちあげられる。翼を折り畳みさながら弾丸の様に小さく縮めた各機は、番号の幼い順から次々とプラズマを迸らせて大空に躍り出る、同じく偶数番号機続く。

さながら空母から放り出される様にして飛び出した燕たちは翼を広げるとブーストを煌めかせ、編隊を組み旋回しながら飛行する。翼の先端から細く棚引く白い雲が藍にラインを幾筋も引いて行った。

ヴァストークの背面の発着場からも、平たい三角形のシルエットをした爆撃機が次々と空に浮かび散開した。大海を思わせる白い雲の上に、重油が流れ出る様に黒がじわじわと面積を増していくかのように、編隊を組み横に広がった各機は轟々と音を立て、管制を兼ねるヴァストークを残し徐々に高度を下げて行く。

「Alisa」、一度少上昇し、そこから今後は機首を下げ、一気に雲の渦に飛び込んだ。ラストーチカは護衛する爆撃機に比べ、その構造は操作性を重視された非常に軽く薄い装甲で作られている。その為、気流の乱れに華奢な翼は？がれるのではないかと思つ程、揺さぶられる。ロウは振動の伝わる操縦桿を握り締め前に倒し、視界の殆ど効かない雲の中を突き進んだ。この分厚い雲を突き抜けた

としても、この下では雪が深々と降り注いでいるに違いない。ロウは気を引き締めると、向かい風を切り裂くように更に機体のアフターバーナーの出力を上げた。振動が更に大きくなる。だがそうしなれば強風に煽られ機体が翻ってしまう、この風の壁を突き抜けるには多少機体に無茶をさせてでも出力を上げるしかない、それですら進む距離は雲の上に比べ微々たるものだ。サラは悲鳴の一つも上げず、ただ淡々とロウに高度を告げていた。

雲を突き抜けるとそこにはただ灰褐色の世界があった。ハラハラと舞う雪がキャノピに当たっては後方に流れる。ロウの指示に従いサラは光学ステルスをONにする、機体に一瞬光の筋が流れた。「Alisa」の8時の方向に爆撃機が続く。彼等を始め、他の機体もステルスをONにしていく様子がサラの見つめる手元の電子ディスプレイ上で表示された。

時折吹き荒ぶ風に機体が大きく乱高下する。

「管制より各機、目標ポイントアルディアナ帝国北方領土境界、防衛前線基地までまもなく。爆撃機画期ブースト解除、編隊飛行のま、リシューツァ、ヴォールク、爆撃に備え各機スタンバイ。空挺部隊輸送各機は爆撃終了まで上空にて待機。」

「リシューツァ了解。」

「ヴォールク、各期了解。」

「管制より、フライトプランに変更は無し。リシューツァ、ヴォールクはそれぞれのポイントに移動開始。」

「……との事だがヴォールクの諸君、付いてきているか？」

「諸君、ミーティング以来だが私が今回ヴォールク隊を指揮するセオドア中佐だ。よろしく頼む。」

エレーナの声とその後に冴え無い中年の掠れた声が無線で飛ぶ。ヴォールク1番機は彼女の搭乗する爆撃機だった。彼女の操縦する漆黒の黒い機体の爆撃機 (コルシユン) パーソナルネーム「Oleaga」、ヴォールクを率いる事となっている。「Alisa」はコルシユン二番機、「Sonya」の護衛が主な任務となる。ラストーチカに比べると巨大な機体の腹には積めるだけの投下爆弾が搭載されているに違いない。ジェットエンジンの周囲の大気が熱で歪んでいた。

「V-1アルファ、ブラボー、一番機に続け。V-2アルファ、ベータは二番機に。シユミレーション時と変更は無い。目標ポイント、座標R-5・T-2。ただし、目標ポイント以前に対空防御施設があるぞ。一番機、二番機は対空ミサイルの台座を狙え。V-1、V-2アルファ先行して敵レーダーを叩け。」  
「V-1 了解、先行する。」  
「V-2、「Alisa」、V-1 に続く。」

ロウは短く言って、先行するV-1 に続く。二機は一度旋回すると、斜めに機体を傾け高度を落としていく。ちらつく雪が張り付いてお世辞にも視界が良好とはいえない。高度が下がるにつれて、前線基地の様子が徐々に裸眼でも確認できるようになる。

雪に埋もれる様にして大きなパラボナアンテナが見えて来た。それらは360度を探知する筈の物だが台座が凍りついているのか、それぞれの首は止まったままであった。空を照らすサーチライトは雪を横切り、その光に照らされた雪が白く煌めいてそうして空中に滲んで消えた。本当に消えている訳ではないのだが、眩しく光った後に光を失うと急激に周囲になじみ消えたように見えるのだ。

「ロウ、聞いているか？」

「クリアだ、ジエーニヤ。」

「俺達は最前列の感知機を叩いた後、対空用の自動機銃装置を狙う、その好きに後方施設億上部の感知機を狙えるか。」

「ラジャー。… サラ、施設の概要をHUDに回してくれ。感知機にマーカー… よし、それでいい。」

眼前に映し出される上空から見た際に自動スキャンしトレスした施設のデータをサラはV-1 機にも転送する。二機はそのデータを確認すると、一気に急降下、まずはV-1 が超低空飛行で機銃砲連射、感知機は20m弾を2発も喰らえば粉々に砕け散った。その背の上を飛び越えて「Alisa」高速で突き抜ける。背後から、そして前方から対空用の自動機銃装置が彼等を狙った。

前方の台座を機関砲で吹き飛ばす、翼を斜めに傾け機体を揺らし回避行動、と同時に後方で機銃砲台が大破する。ジエーニヤの操る？ 1 機「Tanya」からの援護射撃だ。「Alisa」は地面を舐める様にそのまま加速、「Alisa」の通った後の地面は降り積もった雪が捲れ上がり白い煙がもつもつと立ち上がる。施設からはアルディアナの兵士達がわらわらと出てきていた。それを気にも留めずに、彼等をも吹き飛ばしながら前方、施設の角を曲がりのろのろと姿を現した戦車に対して機銃掃射、砲身が「Alisa」を捉える頃には「Alisa」は機体を回転させながら急上昇していた。上空からほぼ逆さまに垂直に機体を翻しレーダーを狙う、ものの数発の弾丸でアンテナを吹き飛ばした。

「PAN PAN PAN こちらV1、敵機2機接近中。」

「Tanya」より通信、サラがレーダー上に映る敵機と「

Tanya」の位置を淡々と告げる。ロウは機体を反転させ、「Tanya」の救援に向かう。背後から敵機2機に追い立てられている「Tanya」は高速で雪の舞う空を旋回している。敵機2機のうち1機がふわりと後方に離脱、残った1機からミサイルが放たれる。

「ブレイク、ブレイク……！」

逃げまどいループする「Tanya」を自動追尾するミサイルがしつこく狙う。「Tanya」デコイミサイルを発射、熱源探知のミサイルはデコイに釣られて爆散、爆風に煽られ失速した「Tanya」のすぐ目の前で先程離脱した1機が機銃砲で狙いを定め待ち構えていた。

「糞、避けられないか……！」

ジーニヤは操縦桿を思い切り引く、だがバランスを崩した機体は言う事を効かない。彼には一瞬間が止まったかのように思えた。ふつわりと浮くような感覚、事実機体が気流に煽られているのだ。

眼前の戦闘機の翼の下側から覗く黒い砲身がチカ、チカと明滅した。瞬間、バチつと弾ける音、翼に、胴体に、弾丸が掠っていた。音を立ててバタつく機体、握り締める操縦桿もが振動する。もう、駄目だ… そう彼が思った時、眼の前の敵機が大きく跳ね上がった。敵機の真横から「Alisa」、機銃掃射しながら突っ込む。敵機の翼や胴体の鉄板が捲れ、貫かれた胴体から火の手を上げながらガクンと高度を落とし、回転しながら途中で爆散した。

「大丈夫か、ジーニヤ。」

「助かったよロウ。」

「飛べるか？」

「燃料漏れを起こしている、「濃縮魔素」は考え様によっては重油よりも危険だ、「魔素」を扱う潜在能力がある事に気付かずに滅多な事を考えればドカンだぞ。LINKシステムを使い！」

回線にサラが割り込む。ジェーニヤの後方に座るオペレーターがサムアップでサラに「了承」と告げ、プログラムを走らせる。サラはその間に管制に連絡、「Tanya」が「Alisa」を自動追尾する様にしてくれ、と指示した。ロウはサラの適応力に内心舌を巻いていた。それからサラはV1 のコードを受け取り、素早くキータイプ、HMDに映されるプログラムを解析し、コードを打ち込む。緑色の文字、WWと数字の羅列、ロウにはさっぱり解らなかったが、サラには解っているらしい。

青白い光が「Tanya」の機体に走ると、その光が機体の先端に集中し、「Alisa」まで伸びる。ジェーニヤが両手をヒラヒラと挙げて見せた。オートマチック操縦に切り替わったらしい。

ロウはその合図を受け取ると、機体を緩やかに旋回させながら高度を上げた。後方に付く「Tanya」を気遣いながら帰還する。ヴォールク隊の待機する空域まで下がると、サラはLINKシステムを解除、今度は「Tanya」をヴァストークとLINK、損傷を負った「Tanya」は一時収容庫に戻る事となる。

「ヴォールク、リシアツア諸君、こちら管制、作戦本部、北方領土対空防御施設より多数の機影確認、こちらに向かっている。各機応戦しろ。各爆撃機、施設から市街地に掛けて爆撃を開始、一気に制圧する。爆撃後、空挺部隊は残存兵力を制圧： 以上。作戦コード

「ラヴィーナ（雪崩）」現時刻を持ってスタートする。」

「ヴォールク、了解。」

「リシューツァ了解。」

「ロウ、レーダー上、2時の方向からミサイル、コルシユンに接近します。」

サラが告げる。ロウを始めラストーチカ3機は編隊を組みながら向かってきたミサイルを迎撃に向かう。コルシユン2機はデコイミサイルを射出、敵機より放たれたミサイルは殆どそれらとぶつかり爆発する。爆風に煽られながら、毀れて尚コルシユンに向かうミサイルに機銃掃射。全てのミサイルを迎撃。

「PAN PAN PAN、第2派、来ます。各機迎撃に備えてください。」

コルシユンV1機「Olega」より通信、ラストーチカ3機は再び旋回、上昇する。コルシユンのデコイミサイルとラストーチカの機銃掃射で再びミサイルを遣り過す。

「4時の方向から敵編隊、型はさっきの奴と同じ。」

「了解バンブー、HMDに敵機の位置情報をレッドのマーカーで情報を回してくれ、HUDにも同様だ。こちらの残弾も表示してくれ。最悪手元のディスプレイまで視界が回らないかもしれない。」

「解った、ロウ。」

サラはロウの指示通りに情報を表示する。

「行くぞ、バンブー。絶対に吐くなよ。」

「吐く時は外に出るだろ、解ってる!」



## 11 (前書き)

誤字脱字等修正は後日改めて行います。すみません、記録保存として。

「Alisa」機体を90度傾け、機銃を掃射しながら向か  
い来る敵機2機の間を切り裂いた。ロールしながら突き抜けて後方  
で敵機が沈んでいない事を確認すると、ロウは操縦桿を思い切り倒  
した。急速上昇、敵機も慌てて機体を反転させ追ってくる。

二機から発射されるミサイルの存在をサラが伝える。ロウは幾度  
かの旋回の後ギリギリまで引き付けてから機体をロールさせる。一  
瞬標的を見失い迷ったミサイルはそれでも再びロウの機体を見つけ、  
追ってくる。

「しぶといな、機体認識するタイプかな？でも手動操作できる夕  
イプじゃないな…。」

「距離が迫ってきている、このままだと後5秒で…。」  
「5秒あれば充分。」

「Alisa」旋回、敵機2機が迫る。二機は「Alis  
a」を挟み込むように迫り、機銃掃射、ロウは機体を左右に揺ら  
す。弾丸が翼を掠った。

「ロウ!!」

サラが悲鳴を上げる。

「解ってるって…今だ!」

瞬間、宙に機体がふわりと浮く、直後重力に引かれ尾翼から垂直  
落下、サラが悲鳴を上げる。

「Gotcha……。」

ロウは低く小さく呟いた。

『READY・GUN』

HMD上で赤く光る文字、ロック・オン……操縦桿の引き金を引く。敵機にとては腹面からの機銃掃射、ましてやそこには先程までロウを追っていたミサイル。それらの一切合切に弾丸は容赦なく浴びせられているのだ。

すぐに凄まじい音と共に閃光が、渦巻いた。

爆風に煽られる敵機の残骸が降り注ぐ中、アフターバーナーを再び煌めかせ機体を立て直す。

「大丈夫？」

「……。無茶、無茶無茶……ロウ、こんな無茶苦茶だ。LINKシステムに文句を言える立場じゃないぞ。」

「まあ……否定しないよ。」

「ヴェインスも気の毒な。」

「PAN PAN PAN、こちらV2」Sonya「至急応援を……。」

ロウとサラの会話を割り込むようにして通信。V2「Sonya」からだ。サラがオペレーター席で、ヴァストークのレーダー情報を引っ張り出す。爆撃を開始した「Sonya」の丁度3時の方向から敵機が迫っていた。

「損傷は？」

「軽微、大丈夫、まだイケる。」

「ラジャー。」

ロウは機体を反転させV2「Sonya」へと向かう。

「本部より各機、敵前線基地より鋼鐵兵4機、全機対空装備を着装している模様、低空戦の際には注意しろ。」

ヴァストークより指示、指示を受け空挺部隊を護衛していたラストーチカの内半数が編隊を組んで低空へ向かった。「Sonya」へと戻る「Alisa」と擦れ違う。

ロウは彼等の飛びゆく方向を眼の端で眺めた。地上は赤く燃えている。絨毯爆撃は基地も街も差別無く、容赦無く、全てを炎で染めて行く。大気は霞んでいた。先程のラストーチカの編隊が通ったからだろうか……。

「Sonya」の姿が肉眼でも確認出来る距離になった。巨大なコルシユンの周りには黒い機影、敵機とラストーチカだ。味方機が尾翼辺りから薄く煙の尾を引いている。ジグザグに旋回を繰り返しながら、敵機から逃げていた。

「あれは…先程までの奴とは型が違うな。やけに小さく見える。」  
サラが言った。

「兎に角、救援に向かう。」

ロウは速度を上げて、敵機の尻に縋り付き後ろから機銃掃射を試みる。

『READY GUN』

赤い文字が踊り、円形の照準サイトとロック・オンの文字が重なり引き金に指を掛けた、その時…。

「何?!」

突然敵機が視界からロストする。

「上方、いえもう背後!!」

サラが叫ぶ。だが、遅い!翼の下、機首のすぐ脇が明滅すると同時に翼のコーディングが吹き飛んだ。

「…! どうなってる?!」

「……ロウ!」

「解ってる!」

大きく上昇、敵機は「Alisa」の後ろをぴったりと付いてくる。

「糞…!」

ロウは機体をロールさせ敵機の後ろに回ろうとする、しかし敵機は今度、真横にほぼスライドするかのよう動き、背後を取らせない。人間技では無い、ロウはそう感じていた。人間が乗っていたな

ら、このようにな…。

「こいつ… 無人機か…っ！」

敵機の弾幕を擦れ擦れでかわし逃げる。旋回・蛇行を繰り返しながら距離を稼ぐ。敵機は執拗に「Alisa」を追う。

「気をつける、ロウ！ そいつはかなり…っ手ごわいぞ！」  
「解っている！！」

地面と雲が幾度もキャノピの外を通り過ぎる。荒い呼吸音と機体のあげる悲鳴にも似た金属疲労と風との摩擦音だけがコクピットに響く。

「ミサイルだ！」

「ギリギリまで引き付けて、フレア！」

「り…っ…了解！」

フレアだけでは全弾を回避する事はできない、そんな事はロウには解っていた。殆ど無茶苦茶に飛び回り何とかそれらを遣り過ごす。視界が、赤く滲んだ。息が途切れそうになる。

「… 無事か、バンブー、バンブー？」

応答は無い。ブラックアウトしたか…。

ロウはレーダーの詳細情報と全てのコントロールを自分の元に回す。通信を開く。

「PAN PAN PAN、ラストーチカ」 Alisa 「より

「Lillia」、応答してくれ。」

「「Lillia」だ……ロウ、無事か、さっきの奴お前の所……」

「なんとか無事だ、だがギリギリだ。アレン、お前の方は……」  
「駄目だな、これでは満足には飛べそうにない。フラップが逝か  
れる。」

「手を貸して欲しい、今から指定する座標までは来れそうか？ 俺  
が奴を引き付ける、お前は奴をロックして……」  
「ラジャー、その位ならば……」

味方機との通信、これで仕留められればいいが……。ロウは一抹  
の不安を呑み込んで、敵機を引き付ける。敢えて距離を稼ぐ事はせ  
ず、かといって機銃掃射をともに食らっては飛べなくなる、弾丸  
をかわし翼を揺らしながらコルシユンの周囲を旋回する、コルシユ  
ンの、巨大な翼を曲がる、その時……。

「吹き飛ばべ！」

「Lillia」からのミサイル、IFFを探知するミサイル  
は「Alisa」をギリギリの所ですり抜けて敵機に向かう。  
一気に上昇し、ジグザグに逃げまどう敵機、「やった！」アレンが  
ガッツポーズする様子が擦れ違いざまに肉眼で伺えた。だがロウは  
どこか不安が拭えない……。何故かは解らない、直感だった。

だが、その直感的中する事となる。

敵機を追っていたミサイルは急に角度を変え、こちらの方に向か  
ってくる。

「アレン……！」

ロウは思わず叫んだ。アレンも異変に気付いていたらしく、緊急離脱、急旋回する。

「ブレイク・ブレイク……！」

ロウは「Lillia」を追うミサイルに向かって機銃掃射、しかし、間に合わない！ミサイルが「Lillia」を捉え、軽い機体は炎を上げながら落下して行った。

「……このっ！」

ロウが自分たちよりも高高度を旋回する敵機をロック・オン、ミサイルを発射しようとした、その時だった。

「やめておけ……。」

後部座席から声、サラが目を覚ましたらしい。

「バンブー…… 止めておけとは一体……。」

「IFFを解読されている。ミサイルを放てばコードを読み取られてプログラムを書き換えられるぞ。まあ、アイツがその間に逃げられればの話だが……。」

「そんな馬鹿げた……。」

「無人機だからこそその性能だな。恐れ入るよ。ただ、逆もまたしかり。」

「あ？」

「あいつは無人機だろう？ だったらこちらから奴のプログラムを書き換える事も可能だとは思わないか？ まあ、それまで逃げられれば、だが。」

サラは言うとはぼ同時にキーボードの上で驚くほどの速さで指を動かした。

「私は今からプログラム解析作業に入る、ロウ… その間、少尉に全て任せるぞ。」

「… 元よりそんなに宛てにはしていない。」

「言ってくれたな……。よし、ロウ、では私をあてにしていない少尉殿、あの無人機に出来るだけ近づく事は可能か？」

「何？」

「近づかなければ解らないではないか。奴の暗号通信が。それともこの戦場であちらこちらに飛び交っている全ての通信から洗い出せてのか。そいつはめでたいな、作業が15分は伸びる。」

「わかったわかった、やればいんだろうやれば。」

「そうだ、その意気だ！ 私は期待しているぞ、少尉。」  
「都合の良い事を。」

ロウは悪態を吐きながらも機体を翻し挑発するように上昇する。先程までちらつく程度だった雪がパウダースノーとなり本降りになって来た。白っぽいカラーリングの敵機を視認する事が難しい位だ。

エンジンから噴き出す炎が雪を溶かし空間から雪を切り取って行く。とにかく接近するにしても真っ白な世界では分が悪い…。ロウは獲物を探し旋回する敵機の横を最高速度で上昇しすり抜ける。敵機は直に反応し、「Alisa」の後を追ってきた。

ロウは構わずに上昇を続けた、分厚い雲にぶつかる、一瞬退けられそうになるが押し進む。真っ白な雲がキャノピを流れ行く。乱暴な気流は華奢な装甲を激しく揺らした。後方が数度瞬く、敵機は乱気流にもめげずにロウ達を追ってきているらしい、敵機の撃った弾

丸は気流に退けられかわさずとも当たる事は無い。

「見つけた！」

背後でサラが叫んでいた。

「通信から枝が付けられる、とにかく解読作業に入るぞ。」

ロウはそんな彼女の言葉が耳に入っているのかいないのか一心に操縦桿を握り締めていた。雲を、突き抜ける。そこには暗いものの下界とは打って変わって真っ青で穏やかな天空が広がっていた。黄昏の残光が染め上げたグラデーシオンに、星星の運河が薄らと明滅している。

遠方には巨大な黒い影、ヴァストークだ。海に漂う氷山のように、空母はどっしりと構えている、まるで遙か以前からそこにそうしてあったかのように。

敵機、やや遅れて雲から飛び出した。雲を双翼に纏い飛び出してきたそれは、この状況下では良く目立つ。

ロウはできるだけヴァストークから距離を取る様に「Alisa」をコントロールする。敵機のミサイルは残り2発、「Alisa」も同様、しかし「Alisa」のミサイルを敵機が奪えるのだとしたら、それは無いも同然だった、20mmだって残弾数は知れている。下手に攻撃をすべき時ではない。

「バンブー！」

「煩い！ そう簡単に出来るか！ 自身が無いのなら操縦をオートにしてLINKシステムに頼ればいい。」

「誰が…！」

サラはイライラとキーボードを叩いている。ロウは舌打ちを打ちながら、機体を旋回させ逃げ惑った。こういう飛び方を彼は好きではない、否好きな操縦士などいる筈が無い。そうして暫くジグザグに飛び続けているとサラが急に妙な事を言いだした。

「解析完了だ、ロウ、奴に接近してくれ。」

「ああ？」

「接近するんだ。でないと、奴をどうにもできん。」

「馬鹿言つな、接近すればこっちがやられるぞ。」

「少尉はこのまま逃げ惑って無様に死ぬのと、特攻覚悟で華々しく散るのとどちらが良いのだ？」

「…どっちも同じだろ？」

「いや、特攻覚悟ならば撃墜されない可能性もある。」

「……撃墜されたら化けて出てやる。」

「構わない、その時は私も化けているだろうからな。」

ロウは小さく機体をロールさせ、敵機に機首を向けた。迫り来る敵機はこちらに向かって機銃掃射をし、その姿が徐々に大きくなる。ロウは機体を上下に揺らし、損傷を最大限に抑えようと足掻く、だが大口径の弾丸は掠っただけで薄い装甲を剥いで行く。

「この…もう知るか…！」

ロウは自棄になって叫びながら、自分を機銃掃射をしながら敵機に向かい真っ直ぐに突っ込んで行った。どうにでもなってしまう、本当にそう思った。HMD上の自機が赤い色にどんどん染まって行く。染まった分だけ損傷の激しさを物語っているのだ、距離がどんどん縮まる。あれだけ小さく見えていた敵機が案外に大きい物だな

と、ぶつかるかぶつからないかの擦れ擦れまで近づいて、もう、駄目だ終わりだ、そう思ったその時だった。

衝突するかしないかの所で敵機が急に上昇した。そうして敵機の腹の下ぎりぎりの所を「Alisa」が潜り抜ける。避けられたのか… 否…。

ロウは目視で背後を確認した。背後からは敵機が後を追ってくる、だが一向に攻撃する気配は無い。

「やったな、ロウ、アレはもう私のコントロール下にある。」

サラがサムアップをしながら言った。ロウはほっと棟を撫で下ろした。しかし状況は甘くは無い。HMD上の自機は真っ赤に染まり、「CAUTION」の文字が悲鳴のように点滅を繰り返していた。操縦桿もろくにきかない、今はほとんど気流に乗る様にして飛んでいるだけだ。

「バンブー、もう「Alisa」は限界だ。」

「そうだな、燃料漏れは起こしていないようだ。だがこれ以上は戦闘不能だろう。了解、オートに切り替えてくれ。LINKシステムに接続しよう。空母もすぐ近くに居る事だしな。」

サラは言って再びキーボードを叩きだした。ロウは操縦をオートに切り替えてシートに背中を埋めた。どっと、それまでの疲れが一気に押し寄せてくるようだった。

## 12 (前書き)

誤字脱字等、後日訂正いたします。微妙に載せていた頃から、本編の方とつじつまを合わせる為に変更してますが。。。

分厚い雲の上はどこまでも果てる事無い静寂に満たされている。ディスプレイ上の赤い点滅を気だるい眼差しで見つめながらロウは大きく息を吐いた。そうして自分の眼の前に置かれている、様々な計器類を表示する為のディスプレイをそつと撫でた。

「すまないな。」

「え？」

「いや、「Alisa」に言ったんだ。」

彼は呟き少し笑った。愛機を傷つけるような戦い方しか選べなかった自分はまだまだ未熟だ、と思ったのだ。それに、正直今回もしサラが居なかったらと考えるとそつとする。サラのオペレーターと言うよりはプログラマーに近い所の知識を持ってして初めてあの無人機は撃破できたのだ、もしもヴィンスだったら… そう考えかけて、ロウは頭を振って思考を無理矢理押し流した。ヴィンスだったなら、確かにサラほどプログラムには長けていないが、だからと言って彼が諦めていたとは思えない。

「なあ、ロウ…。」

静寂の中でサラの呟きが響く。ヴァストークとのLINKシステムで運航する間は殆どエンジンを作動させる必要が無い。それはヴァストークの制御による「魔術」によって機体がコントロールされている為だ。(… とサラは言っていたがロウには良く解らなかつたが。)

「ん？」

「私は、役に立てただろうか？」

「あ…？」

「いや、なんでもない。気にしないでくれ。」

「… 労いはアスラにしてもらえばいいじゃないか。」

「……そうだな。」

サラはロウの言葉を聞き、出撃前のブリッジでの出来事について思い出した。彼女自身がその様子を見ていた訳ではないが、あのアスラが酷く取り乱していた、その声が耳の奥にこびり付いていた。セラナ様は大丈夫なのだろうか、親衛隊としての自分はその責務を果たさずに、こんな所で充足した気持ちに浸っていて良いのだろうか、だが…。

眼の前には、先程まで遠くに小さく浮かんでいた空母が迫ってきた。再びここに帰る、それは当り前の事だと思っていた、ただいざその時が来てしまった時、そうまさに今、彼女は何をしているのか解らなかった、「合わせる顔」をどう作ればいい？ 無いとはそういう事か…？ 複雑な思いが胸を掠めていた。

ラストーチ力専用の着艦場が見えて来た。IFFを感知したレーンからは機械のアームが機体を捕まえようと伸びて来る、当にその時だった。

「Alisa」のHUDが一瞬スパークする。

「何?!」

サラは眼の前のディスプレイを凝視した。そうしてキャノピからヴァーストークを見る、「Alisa」を襲った光は巨大な空母全てを包み込んでいた。何が起こって… 再びディスプレイに視線

を戻した彼女は唾然とする。

「サラ、何が起こっている?!」

前方でロウがうるたえていた。オートマチックを解除しようとする度も試しているようだが上手くないらしい。それが意味を為さなくとも、操縦桿を彼は握り締めていた。

「位相が……反転して行く。… ヴァストークの、一体何が、ありえない!」

「位相?」

「〔魔素〕の持つ個性の様な物だ。情報の類似性によって分類される… ヴァストークの中核を為している〔濃縮魔素〕はそう言ったある特徴によって分類され精査された同種の純粋な〔魔素〕の集合によって精製されている…。」

「能書きは良い、この状況を!」

ロウがややヒステリックに早口で捲し立てた。彼にとっては「Alisa」が自分の知らない何かになってしまったかのように感じられていたのだ。何故だかは解らない、ただ直感だった。

「それが… 変化している…いや、違う、全てが塗り替えられていつている?」

「バンブー!」

「聞いてくれ、少尉。このラストーチカも〔魔素〕燃料によって動いている、その〔魔素〕はヴァストークと同種の物だ、ヴァストークはラストーチカを自分と同種の〔魔素〕を持つ物という観点で識別している。つまり… 識別もされなければLINKシステムも…。」

機体をキャッチしようとして迫っていたアームがぎこちなく動き始める、それらは大きく振り被ると「Alisa」に向かって勢いを付け迫る。

「何！」

「きゃあー！」

サラは思わず叫んでいた。酷く、何かが碎ける様な音がして、空中でアームに薙ぎ飛ばされた、LINKシステムも切断された「Alisa」はバランスも保てずに、風に舞う枯葉の様にきりもみされながら空中を落ちて行く。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

真っ白な上下も左右もないただ広い空間で、少女が泣きじゃくっていた。ただ只管謝罪の言葉を繰り返し、背まで垂らした淡い色の髪を空間に散らしている、その背中からは滴る血雫、周囲に舞い散っているのは灰色の羽の残骸。。

「もう、しないから、もう… やめてよ。もう貴女の物をとったりはしないから、だから返して…。」

見ている胸が締め付けられるような悲痛な光景だった。ロウは近寄って少女に声を掛けようとしたが、彼を遮る物があった。彼女と彼を遮る様に宙に現れたのはラストーチカ。「Alisa」

ここから先へは行かせないと言わんばかりに威嚇する愛機にロウはたじろいだ。「何故だ… アリサ…。」問いかけても答えが返

つてくるはずもなく、ただ彼は「Alisa」と向き合っていた。

少女は唯泣いている。その声も次第に弱々しく、息遣いだけが聞こえるくらいになった時、彼女の背後から一人の女性が姿を現した。

金糸で文様の刺繍の施された白い厚手の布で出来た法衣のような物を肩から掛け、その下には同じく模様の施されたオーガンジーの布を幾重にも重ねたような衣装、それらの布地を腹部に巻いた太い帯で止めている。透き通るような白い肌、煌めく銀色の髪は地面に届くかのような長さ、細く長い首筋が頼りなく今にも消えてしまいそうな儂い印象とは裏腹に、酷く存在感を放つのは冷たく鋭い金色の双眼、その視線がロウを捉えた。

彼は金縛りにあつたかのように身動きを取れないでいた。しかし彼は思う、ああ、この人を俺は何処かで……。彼女が小さく指を動かすと、「Alisa」が身を翻し彼女の背後に控える。彼女の掌には18対の翼が、彼女の足元には先程泣きじゃくっていた少女がうつ伏せに転がっていた。もう動く事が無いであろうそれは徐々に灰燼となりしまいには空間に溶ける様にして消えた。

彼女の冷たい金色の瞳は揺れる事も無くただじつとその様子を眺めていた。彼女の背には翼、12枚のプリズムの翼……。

\*\*\*

「ロウ少尉、少尉… ロウ！！」

背後から自分の名を呼ぶ叫び声にロウははっとする。視界が真っ赤にばやけていた、何が起こっているのか解らずに一瞬呆然とする、ひび割れたキャノピの外の世界が目まぐるしく回転しながら変わって行く。彼ははっとして操縦桿を握り締めた。酷い頭痛。割れたキャノピはディスプレイの機能を失っていて、操縦席には轟々と風が吹き込んでいた。

「何が… 起こった？」

「ああ、少尉気付いたか…！ 私にも解らない、ただコントロールが全くきかないのだ、「魔素」の特質が一気に全く別の物に変わってしまったような…。」

「機器のトラブルか？」

「かもしれない、ヴァストークの方だな。少尉、私たちはこのまま死ぬのか？」

「… かもしれないな！！」

ロウは歯を食い縛り震える操縦桿を両手で思い切り倒したが、操縦は殆どきかず機体の回転は止まらない。損傷が激しいのだ、こうなると戦闘機など唯の鉄屑でしかない。

しかし彼は諦めなかった、何度も何度もバナーの始動を試みながら操縦桿を動かし機体のバランスを取ろうともがく。サラは悲鳴を噛み殺していた、それでも嗚咽にも似たような声が漏れる。

「地面の様子は解るか？」

ロウの問いかけにサラは瞑っていた眼を開けキャノピから目視で確認をした。

「下は、真っ白だ、雪が降り積もっている。」

「そうじゃなくて…。」  
「解らない、ただ平坦に見える。」  
「…そうか、サラ、君は脱出を…。」  
「試したさ！ 何度も、少尉が寝ている間にな。いかれてるらしい… 作動しないんだ。」  
「手動でもか。」  
「手動でもだ。」

ロウは押し黙った。そこまで機体の損傷が激しいのか、しかし地面はもう迫ってきている。

「やむ追えない… ランディング・アプローチに入る。」  
「ランディング・アプローチだと？ 無茶だ！」  
「無茶も何もあるか！ 地面と熱烈抱擁だけは俺はごめんだ！」

彼は言って、操縦桿を握る手に力を込めた。この状態でまともなランディング・アプローチがとれるはずもない。ただでさえラスト1チカという機体はその性質上通常の着陸方法を取るには適していない機体である。高出力のエンジンからのバナー点火による空中でのホバリングにより着陸を可能とする構造で、車輪は極端に華奢なのだ。それでなくとも通常空母への収容は、専用のアームが行うのだから。

ロウは手動で車輪を出す。何とかバランスを取る要領は得てきて、機体はふら付きながらも水平を保つようになってきていた。旋回し距離を稼ぎながら減速させて行く。その間にもエンジンの再始動を試み続ける。

「無駄だ、点火させた所で地面はもうすぐそこだ。」

サラが言う、悲嘆にくれているのか諦めているのか冷静なのか、よく解らない色々な物が入り混じったような声だった。

「地面は雪だろ、腹から行けばなんとかなる可能性は0じゃない。」

ロウは操縦桿を握り締めた、旋回するために傾けていた翼を地面と平行に保つ、そうしてゆっくりと機首を下げる、地面が、白銀のそれが見る間に迫って来た、まだ速度が落とさず切れていない、一度機首を擡げ高度を調整し再びランディング・アプローチを試みる。

それを数度繰り返すと車輪が粉雪を巻き上げた。ガリガリという何かが削れるような嫌な音が響き渡り機体が大きくバウンドした、そうして再び地面に付く、その瞬間に車輪を支えている足が？げた。

ガクンという衝撃と共に直接機体が雪面に激突する。大きく上下に揺れた機体はバランスを失い、左翼を地面に擦りながらなんとか着陸した。

「ここが北方で良かった、雪が無ければ間違いなく爆発していた。」

雪面に突き立ち歪んでしまった翼を眺めながらロウは後方のサラに声を掛けた。しかし返事は無い。ロウはHMDを取り外しキャノピを手でこじ開けた。額から血が滴っていた、どろりどろりで視界が赤く滲んでいる筈だ。サラはと言えば気を失っているようだった。無理もない。

彼は白銀の世界を眺めた、ただ一面の平坦な草原… なのだろうか……。見渡す限り、町や住居の様な物は見当たらない、森林さえここには無いようだった。

\*\*\*

「アルディアナ北方領土境界防衛ライン関連施設、及びレンディール政府関連施設制圧しました。残存勢力と空挺部隊が現在交戦中……」

「ヴァストーク機器関係の異常値全て正常に戻っています。」

「LINKシステムコード、全種認識、オール・クリア。」

「ラストーチカ第17番機帰還、損傷軽微、ドッグに移送します。」

オペレーター達の声が飛び交うヴァストークのブリッジ、先程までの緊迫感は最早そこには無く、ただ淡々とした事象の再確認だけが交わされていた。アダムはメインディスプレイの前で腕を組み立っていた。燃える様な赤い色の髪を手でかき上げ、傍に座っているオペレーターの内の一に声を掛ける。

「損害は？」

「ジャーヴァルナク3機、サローカ5機、サヴァー1機、ラストーチカ4機が消息不明、応答無し……他損傷機多数です。」

「結構派手にしてやられたね。もっと軽微な損害で済むと思っていたんだが……」

「シミュレーション上は……。ただし、ここまで損害が拡大した直接的な原因は……」

「ヴァストーク……解っているさ。まさかエノクがここまで使えない奴だとは思っていなくてね。あいつの翼はイミテーションか、ケバケバしいだけだったってやつかな。まあ、想定可能範囲の中の結果ではあったのだけれどね、そう言う意味では“彼女”としてはいいまいち味気無さ過ぎるなあ、まあ、僕としてはその方が有難いけれ

どね。」

「え？」

「いや、何でも無い。コチラの話さ。」

そう言って彼は切れ長の眼の端で「魔素」シールドに守られた防護室をチラと見た。この空母における全ての異常事態の原因…。

「セラナ君、大丈夫かな…。」

「貴方が言いますが、貴方が。」

彼の傍でミコトは淡々と呟いた。アダムが振り向き彼女を見ようとする、彼は必然的に見下すような体勢になる、それもそのはずで背の高い彼と華奢なミコトとでは身長差が20センチほどあるのだ。

「何か、言いたげだね。」

「いえ、無いとお思いでしょうか。」

「じゃあ僕をどうにかするのかい？」

「……… できるならば… 気持ちはありますわ、とだけお伝えします。」

「つれないねえ。」

「……。」

アダムは言って笑いミコトの肩に手を置いた。その手を思い切り振り払って彼女はキツと鋭くアダムを睨む。彼は肩を竦めて苦笑すると腕を組み、倒れ伏すセラナの背を悠然と眺めた。

（エノクは消えた、彼女の36枚の翼を分け与えられたラストーチカ18機、その本体のエノク…… ヴァストークは己の翼を分け与えた為に失った翼を“彼女”から？ぎ取った、そうして浮上、そこ

までは良かった、ただエノクは油断しすぎていた、“彼女”は封印され半覚醒だとはいえ、それでも“彼女”は“彼女”だというのに……、暗闇に光を投げ掛ける者、創造主に寵愛された者。だからこそ……心底憎いのさ。）

アダムは一人考えに耽りながらブリッジを後にした。

\*\*\*

睫毛が重たい… サラは頬に触れる幽かな冷たい感触に薄らと目を覚ます。高い高い天空からはハラハラと粉雪が舞い落ちてくる、それらを見上げながら、幼い頃はコレが羽虫のようで気味が悪かったんだよな… などと思いだし、ふと笑みが毀れる。

彼女は上体を起こしてみる、頭の芯が酷く痛み、額に手を当てる為に動かした腕の関節が軋んだ。身体のうちらこちらが悲鳴を上げている。一体全体私はどうしたというのだろうか… 彼女は思いそうして周囲を見回して啞然とした。

そこは一面の銀世界だった。果てしなく続く、薄らと雪の降り積もった草原、見渡す限り遮る物は木の一本すらも無い、そうして彼女は自分の目の前に据え置かれているディスプレイに目をやった。真っ赤なランプが点滅を繰り返している… アラート。

（そうか… あの時ヴァストークに拒絶されて……。不時着したのか？……ここは？）

前方の座席を見つめる、そこに彼女の知る人の姿は無い。運の良

い事に眼鏡のレンズは無事なようだった。彼女は眉間を抑え思考に耽る。

何故、あの時ヴァストークはラストーチカを拒絶したのだろうか、ヴァストークにとってラストーチカは同じ個性を持つ「濃縮魔素」を利用し作られた云わば分身のような物の筈だ。それを元にして設計されたIFFは敵による妨害を受ける事もない筈だ。（逆に侵入に利用される事はあつたとしても。）それがエラーを起こしたのだ。サラにとってこれほどまでに信じられない事は無い。ラストーチカの機体で使用されている「魔素」から情報を読み取ろうと、機体を手をかざしてみるが、全て情報にはロックが掛かっており、彼女にはそれを解読する事ができなかった。

サラは痛む身体を無理に動かして「Alisa」から飛び降りた。傍目に見ると「Alisa」の損傷の酷さが良く解る。機体の胴体には弾丸が擦ったような跡が所々にあり、操縦席のキャノピは割れている。雪面に擦り付けたであろう翼は無残に折れ曲がっていた。

白く薄化粧を纏ったような草原には踏み荒らされた跡と、点々と連なる赤い痕……。ロウだ……。！ 彼女はその跡を追った。しばらく足跡と血痕を辿って行くと、前方に黒い人影が見える、彼女はその人物に駆け寄った。

「ロウ少尉！」

人影は声を掛けるとくるりと振り向き、そうして何事も無かったかのように軽く手を挙げて彼女に答えた。

「あ……起きたのか、バンブー。」

「……ここは？」  
「さあ？」

ロウは肩を竦めて見せた。サラは彼を注意深く観察する。額から眉、頬を辿って顎のあたりに黒い物がこびり付いていた。既に乾いているようだったがそれは紛れも無く血液だったものだろう。

「怪我をしているじゃないか。」  
「いや、まあ大した事は無い。」

怪訝な表情で詰め寄る彼女にロウは2、3歩後退りしながら言うと、空に向かって指笛を鳴らした。するとその口笛に答えるかのように、分厚い雲の覆う空から一羽の鳥が、ロウの腕に舞い降りる。真っ白な、白銀の世界に溶け込むような美しい翼を持った隼だった。

「少尉……それは？」  
「ああ、バンブーが寝ているうちに仲良くなった。」  
「仲良くなって……。」  
「さあ？ 妙に人懐っこくてね。きつとこの付近の住人に飼われているんだろう。さっきなんかレーシオンを持って来てくれるし、ありがたいもんだ。」

ロウは隼の翼を撫でてやりながら嬉しそうにサラに言った。サラは心底奇妙な物を見る様な目でロウを見つめていたが、少し頬を赤らめそうして彼女自身も隼に手を差し伸べた。すると隼は警戒したように短い鳴き声をあげ飛び上がり今度はロウの頭の上にとまった。

「目の前から手を差し出したら、普通だったら食いちぎられるよ？」  
「煩いな、というか鳥に詳しいのだな、少尉。いつそ空軍など辞めて鷹匠にでもなればいい。」

「いや、空を自由に駆ける鳥が好きただけだけれども。」

ロウは言って先程サラが辿って来た己の足跡を顧みた。遠くの方に黒く崩れ落ちた「Alisa」の無残な姿があった。そういえば、第三部隊のマークは隼だったな……。そう思うと彼は胸の内を強く締め付けられる思いだった。それを感じ取ったのか頭上で隼が小さく鳴いて嘴で彼の頭頂部を弱く突く。ロウが指を差し出すと隼は慰めるかのように甘噛みし今度は彼の肩にとまった。サラがその様子を見て不貞腐れたように口を尖らせた、隼がロウにだけ懐き彼女には懐かない所がそうさせたのだろう。

### 13 (前書き)

本文中の英語はヤフー先生が訳してくれました。

ので、間違っつていてもわたしのせいでは……ない！

(言い切ったー！)

いえ、英語なんて出来んです。

深々と降る雪は肅々と、弔うかの様に玄鳥を覆い、とぼとぼと歩く彼等の想いとその足跡まで消し去ってしまうかのようだ。彼等の手には数日分の食料と心許無い微力な武器、粉雪は果てしない荒野を隠し、吐く息までもが白く白く舞い上がる。どこまでもどこまでもそれは終わりの無い様に思えて呟くその言葉さえもが凍て付き力を失っていく、その中でただ一羽の隼の翼の軌跡だけが彼等の道標と支えとなつた。草原は極夜、夜の帳は未だ明けず。月明かりを跳ね返す氷の輝きと、たった一本のマグライトだけが自分がそこにいる証。

「Alisa」から離れないほうが良いのではないか？ もしかしたら信号が……。」  
「無理だよ。ここはアルディアナ領だ、レーダーで拾ってくれるとでも？」

「しかしヴァストークの探知範囲なら……。」  
「その空母に見捨てられたんだよ。」  
「……。」  
「……。」

吐き捨てる様な言葉に会話が途切れた。少し感傷的になり過ぎたかも知れない、ロウは思い空を見上げた。頭上には舞う白い息と雪隼の翼だけが見える。絶望的だった、何も考えたくなかった、意に反して理性的なサラに苛立ちを覚え、けれど強がっていなければならぬ立场上……渦巻いた想いが彼の足取りを速めさせた。今はまだ、気をしっかり保っていなければ……。

サラは口を嚙みただ俯いて歩いていた。彼女にはそれしか許され

ないのだ、オペレーターとしてもっと自分がしつかりとしていれば、座標を見ておけば、もっと良い救難措置を取っていれば、そうして能力者……トランスレーターとして、全ての情報にアクセスできる位に能力値が高ければもっと状況判断が出来たかも知れない……想いは尽きず彼女はただ頂垂れた。ただ、今は弱みを見せてはいけない、これ以上彼に迷惑をかけてはいけないのだ。

彼等はただ無言で歩いた。幸いにも風は無く、ただ雪が触れた部分だけが彼等の体温を徐々に奪って行くだけだ。塔を出れば人も住めない雪に覆われたヴァローナ皇国の軍隊装備は、こうした状況下に最大の威力を発揮するように作られている。内側のファーが温かな空気を溜め込み外側の風を通さない素材がその熱を逃がさない。

只管の無音、耳の奥が還って痛い様な気がして、サラは両手で耳を押さえた。ロウは相変わらず上を向いて歩いている。彼女は、そういう彼を見て彼は強い人間なのだろうと、そう思った。思うと自分が頼りなく小さな存在に感じられ悔しくて俯くしかなかった。

そうして俯いて歩いていた彼女は、急に頭を何かにぶつけ立ち止まる。ロウだ、先程からだ前に前に歩みを進めていた彼が立ち止まったのだ。そこでようやく視線を上げた彼女は、両手を挙げる彼の姿を目にしたのだった。

\*\*\*

「ちょっと、待ってくれ！」  
「Alisa」が… サラちゃん  
とロウが戻っていないって、どういう事だ?!」

病棟の犇めくフロアの、扉が連なるその細い通路で一人の男が大声を上げた。ヴィンスだ、まだ傷に響くのか、彼は軽く脇腹を押え、そうして今度は少し声を落として眼の前に佇むエレーナに再び詰め寄った。エレーナは少し視線をそらし、眉間に皺を寄せる。

「私も… それしか知らないのよ、ヴィンス。信じたくない、それは… 同じ気持ちよ。ロウは空軍の中では…。」

「あいつはあんたみたいなクールなエースじゃあなかったさ、そりゃあ、けれどそう易々と落とされる様な…。」

「奴じゃ無かった。」

「軍は… 救護部隊は？ 搜索班は… ？！」

エレーナはヴィンスの悲鳴にも似た声にただ首を振り「ラストーチ力にはLINKシステムがあるもの、損壊が多少あっても、それに拾われるわ… 拾われていないってことは…。」そう小さく咳いて、踵を返しその場を立ち去った。

「「Alisa」と心中か、それで本望なのか、そうなのか？」

ロウ… ふざけんな。」

彼は痛む脇腹を顧みもせず、廊下の壁面を殴り付けた。目の粗いコンクリートの粗末な壁に皮膚が擦れて血が滲む。こんな気持ちになるのなら、自分が無理を押し出しても出撃していれば良かった、せめて生死の判断くらいは出来ただろう、そう例え自分が死んだとしても…。彼は遣る瀬無い感情と嗚咽を喉の奥で辛うじて呑み込んだ。

\*\*\*

「Yes, a good child. Cross your hands on a head quietly.」

ハスキーな女の声、アルディアナの言葉、WWだった。ロウはおぼろげに意味を解釈し、彼女の望むがままに後頭部で手を組み立ち尽くした。握り締めていたマグライトが地面に落ちて無造作に大地を照らした。サラも同じように手を挙げる、背中に筒状の鉄が押し当てられていた。隼が威嚇するような鳴き声をあげている。

女がマグライトを拾い上げ、ロウとサラに光を当てた。彼等は眩しくて眼を細める。彼等からは女の顔は伺えなかったが、女の方からは全てが見て取れただろう。女は自分の持っている自動小銃を灯りにわざとチラつかせ、彼等の抵抗の意思を無言で喪失させる。

「Did you come from Valrhona?」

女は灯りをロウの胸ポケットに当てる、ヴァローナの紋章と空軍のマークの刺繍が施されていた。女は手慣れた手つきでロウとサラの腰から銃火器を取り上げる。

「Be accompanied in silence. Even if escape, shoot it; even if make noise, is the same.」  
「何て言ってる?」

ロウは小声で背後のサラに問いかけた。女の言葉はロウにとっては早口であり、少し訛っていた。

「黙って付いて来い、逃げても騒いでも殺す。」

サラは抑揚のない小声でロウに告げた。

\*\*\*

「ヴァーニヤ、あいつらどうするつもりだ？」

「どうするもこうするもねえよ、やっちまおう。」

「駄目ですよ軍曹、僕達には対ヴァローナへの辞令は下ってません。命令違反ですよ。無差別の殺傷は。」

「構いやしねえ、わかりやしねえよ……。」

「大体にしてヴァーニヤ、お前奴らを殺ってどうするつもりだ？」

「そりゃあ、身ぐるみ剥いで、喰おう……。」

「……お前、そんなに男に飢えているならそのシンジョウでも襲つてろよ。」

「(無理) 無理です、無理無理、え？ 本気ですか？」

「(いや、あたしが願ひ下げだなあって、違えよ、この薄らボケ伍長めが。あらしはためえと違つて落ちてるもん拾つて持ちかえつて手籠にしたりはしねえんだよ！)」

「(古い話を……)」

「(喰うんだよ、喰う、背に腹は変えられねえ、だが仲間は殺したくねえよ。)」

「(え) ! 無理 無理 無理 無理 無理、どうしてそう言う事を平気で言うんですか。」

「(……お前、そんなに腹が減つたのか?)」

「(ああ、減つたな。無理なダイエットは美容にゃあよくねえってな?)」

「(筋肉しか付いてねえくせしやがってよく言うぜ。)」

十分ほど、背中に銃口を突き付けられて歩かされた二人は、先程まで歩いていた場所から一段下がったような場所に、ひっそりと建てられているテントまで連れて来られていた。テントには女の仲間と思われるアルディアナの兵士が数名おり、そこで女と彼等は何かを議論しはじめていた。

捕虜として捕まったのか、だとしたらまだ良いか、取り敢えず寒さをしのげるこの場所は今の自分達の状況から鑑みるに救われた方だ、とロウがサラに告げると、サラは真つ青な顔で首を大きく左右に振り、「最悪の事態だ。」と呻いた。ロウには彼等の訛りの強いWWは断片的にしか理解が出来なかったが、サラには解っていた。どうしてこうもアルディアナの兵士達は野蛮なのだろう、と彼女は思い頂垂れた。

ロウはテントの外に居るであろう先程の隼の事を考えていた。彼は今、どうしているだろう、飼い主の元に帰れたのだろうか？彼の自由な双翼はロウにとってはささやかな希望の様に思えたのだ。それこそ、「Alisa」の形見であるかのような……。

「（とりあえず… 伍長、トラックを走らせても良いですか？ 僕は彼らが乗って来た戦闘機が気になります。落ちた場所、大体教えて下さい。」

「（ああ、それならば俺が運転しよう、墜落する所を見ていたのは俺だしな。」

議論をしていた3人の内、男2名がテントから外に出て行った。必然的に、テントの中にはロウとサラ、そうして先程彼等を連れて来た女兵士が残る事となる。

女は歳の頃なら20代後半だろうか、鮮やかな金色の髪は肩のあたりで外向きにはねており、女性らしい柔らかさとは無縁の鍛え上げられた体付きだった。白色の肌に水色の瞳が良く映える。彼女は粗末な防寒用コートの内ポケットからステンレス製のボトルを取り出すと一口煽った。そうして眉を顰める。それからロウとサラに向き直ると気まずそうに頬を掻きたどどしい口調で語りかけた。

「……Well… So, en… あなた達の名前と、position and rank を述べる、述べてください。私はヴァネッサ、ヴァネッサ・リップヴァーン軍曹だ。一応、ここでは一番偉い。」

「Are you speak kirill?」  
「Little, I am from a northern country of Ardiana. So I can speak Kirill a little.」

彼女のたどどしいヴァローナの言葉に対し、サラがWWで問いかける。それに対してゆつくりと一語一語をかみ砕くように丁寧に女……ヴァネッサはWWで答えた。「アルディアナ北方領土出身だから、少しくらいはキリル言語がわかる。」そう彼女は言った、それくらいはロウにでも解った。

「軍曹、君達は俺達をどうするつもりなんだ?」

「どう… さあな。ただ私達も非常に厳しい… 難しい状態だ。I got separated… 迷子でね?」

「貴方達の他には?」

「小隊規模以下だ。なので権限は私が保有している。腹が減って死にそうだ。」

ヴァネッサの言葉にサラが両肩を震わせた。ヴァネッサはそうい

うサラがよほど面白かったのかケタケタと笑う。

「お前達は、ヴァローナの出身だろう？」

「俺はロウ… 少尉。こっちはサラ・タケウチ、オペレーターだ。」

「はん、少尉ね。で？ ここはどこだ？」

「は？」

「Well… So… Please 位置、位置だ位置、伝わっているのか？ ああ… Do you understand where we are now？」

「Sorry, We don't know。」

「Shit! Worthless。」

サラの返答にヴァネッサは舌打ちをして立ち上がる。サラがその仕草の一つ一つに怯えたように縮こまる。

隙間風がテントの中を駆け抜けて行った。いい加減、動かす事無くさらけ出した手足は冷たく悴んで痺れてくる、ロウは女に言った。

「いい加減、この拘束を解いてくれ、武器は君が取り上げただろう、この雪では逃げられやしない。」

「いや、駄目だ。信じられるか… Hey, Pretty good! 勘を取り戻してきた。」

ヴァネッサは嬉しそうにはしゃいでそう言うときまた一口、ボトルを煽った。琥珀色の液体が彼女の顎を伝う。寒いのだろう一度身震いをしてポケットに両手を突っ込んだ。

「そいつはありがたいよ。サラはともかく俺はWWはからきしだ。あんたがこっちに合わせてくれるのは楽だしな。」

「はん、ヴァローナは連盟国だったのにWWの教育もしていない

のか。まあ、知ったこつちやねえ。」

ヴァネッサは最初の頃と比べて随分と流暢なキリルで話す。酔いが回って来たのか口調も乱雑で、訛りも酷かったがかえってそれが、言葉の固さや不自然さを無くしていた。彼女は気分が良いのか口ウとサラの目の前に立膝を立てて座ると笑いながら言う。

「さつき最後のレーションを開けようとしたらそれが無いんだよ。きつと誰かが食べたに違いない。」

「レーション……？」

「何だレーションも知らねえとは、固形の食料だよ。ブレッドのよ  
うな。」

「……。」

その言葉に口ウは押し黙る。酷く、心当たりがあるような気がしたからだ。彼は、懐のポケットに押し込んだ、レーションの空き袋が彼女に見つかりませんようにと、この時ばかりは心から願った。

（そうか、あの隼はこのテントからレーションを……。なるほど？）

そう思うと非常に彼等に悪い事をしたような気がして口ウは視線を逸らした。ヴァネッサはそういう口ウの態度を目敏く見つけ、怪訝な表情を浮かべたが、また一口ボトルを煽るとゆるゆると表情が元に戻って行った。

「あいつら……。」

「ん？」

「さつきトラックで出て行った… 何処に向かった？」

「決まってるんだろ？ あんた方の飛行機の落ちた所さ。」

「何の為に？」

「さあ…？ あたしにやあ皆目見当付かんがね。シンジヨウの奴はメカニツクだからなあ、興味があるんじゃないかねえの？」

心底興味が無さそうに彼女は吐き捨てる。この頃になると彼女はキリルを自在に操っていた。そうして、黙ったままにいるロウとサラに対して自分の事を勝手に語り始めた。ヴァローナの隣国の、北方領土と呼ばれる地域の外れの小さな貧しい村に生まれた事、兄弟が多く生計を立てるために、同郷の幼馴染である伍長と共に兵役に付いた事などだ。

今でこそ先進的なヴァローナを含め北方領土には、被征服者達の強制移民により作られた街が多い。ロウの両親もそんな移民だった、もしかしたら彼女もそういう出自なのかもしれない、そう思うとロウは他人事とは思えずそのつらつらとしたどうでも良い与太話に共感していた。

サラが隙間風に身体を縮めていると彼女は焼いた石を鍋に入れ持って来て置いた。その上に手を翳し、あの頃は、良かった…、そう小さく呟いた。酷く、女性的な寂しげな笑みが彼女自身の印象とはチグハグでロウもサラもたじろいだ。

「では、伍長さんとはずっと一緒なんですね。」  
「まあな、たまたま同じ部隊に配属されて、たまたま一緒に生き残った、そうしてたまたまサーペントに選抜された、それだけさ。何て事はねえよ。それだけだしな。」

ヴァネッサは言つて一瞬遠い眼をしたが、今度は直に先程までの凛々しく鋭い表情に戻り、立ち上がるとテントの幕を捲り上げた。粉雪混じりの冷たい風が傾れ込む。

その時クラッシュした氷を巻き上げるタイヤの擦れる音が近づいてきた。ヴァネッサがテントから外に出て行く、呼応するかのよう  
に停止するエンジン音。テントの幕越しに声が聞こえた。早口のW  
は口ウには解らない。彼は注ぎ込む風が捲り上げるその隙間から  
外の様子を伺った。

「（どうだった？）」

「（ええ、ちょっと手こずりましたがけど何とか。まだシステムは生  
きていたんでちょいちょいと。それからこの根雪、お陰様でこんな  
重い代物でも何とかになりましたからね。）」

「（牽引してきたのか？）」

「（それはもう、こんなに興味を覚える代物は滅多に無いんですか  
ら。）」

眼鏡を掛けた地味な男が助手席から降りてヴァネッサと会話をし  
ていた。口ウはよく眼を凝らす、断片的にトラックの荷台の更に後  
ろに牽引された黒い巨大な物体が見える。その形には見覚えがあり  
過ぎて…。

「（シンジヨウ、いい加減ワイヤーのロックを解除しろ、ジープが

…。）」

「（すみません、今すぐに。）」

もう一人の男の声、先程の眼鏡の男のような甲高い声では無く、  
もつとガサ付いた野太い声だった。その声が何やら喚くと、シンジ  
ヨウと呼ばれた眼鏡の男はいそいそとトラックの後ろに回った。ヴ  
ァネッサが運転していた男に話しかける。

「（燃料は大丈夫か？）」

「（ああ、まあな。大した距離では無かったし… シンジヨウ、良

いか?」

「(OKです。)」

トラックが数度タイヤを空回りさせ発進する、その荷台の影から姿を現した“それ”をハツキリと捉えたロウは、条件反射的に上半身のバネの力を使つて飛び上がる様に立ち上がり、突進するように駆け出した。ヴァネッサはロウに気付いて真横に跳んで避けたが逃げ遅れたシンジヨウはロウの肩で思い切り付き飛ばされて雪の上に倒れ込む。ロウは“それ”の前に立ち塞がり彼等を須らく睨みつけていた。

「Hey……少尉、一体全体どういふつもりだ? 縛られたままで立ち上がるつてのは相当器用な真似だと思つが?」

ヴァネッサがニヤリと笑いながら彼を見て、キリル言語で言った。シンジヨウは怯えたように尻もちをついたままで後退る。

「両腕の自由も聞かなくて何ができる? それとも少尉はムエタイでも?」

「俺の「Alisa」に何をやる気だ?!」

「「Alisa」……? 俺のアリサに何を? っは。笑わせませ。」

彼女はロウの言葉を鼻で笑つた、笑いながらチラリと視線を彼の横に投げ掛ける。彼の横腹に銃口が突き付けられていた。先程までトラックを運転していた男だ。短く立ち上がった髪に無精髭、鋭い目つきの大柄な男だった。

「で? どうするつていうんだ、少尉殿。」

「…お前等こそ、どうしようつていうんだ?」

「決まっている。情報だ、土産に位はなるだろう。」

ヴァネッサが言うと男は銃口を彼に更に強く押し付けた。自動小銃の銃身がロウのジャケットのポケットに引っかかる、そうして何かが足元に落ちた… ロウははつとする。

「What's……。」

男がロウのポケットから足元に落ちた丸められた袋を拾い上げ、皺を伸ばした、その瞬間だった。

「Shoot it dead!」

ヴァネッサが叫んだ。

「What? It's anything suddenly?

Sergeant Vanya」

「Pull a trigger Fire through his head!」

「Calm down……。」

今にもロウに跳びかかって行きそうな彼女を、先程までロウの脇腹を自走小銃で狙っていた男が羽交い絞めにして押さえつけていた。それでも収まらないのか、彼女は手足をバタつかせ抵抗を試みていた。

「糞、てめえだったんだな、今畜生、一体どうやって……!」

「What……hey, Vanya, What're you

……。」

「これは、違う……!」

ロウはうるたえてただ、違うという言葉だけを連呼していた。正直そうとしか言いようが無かったし、彼にとつてこの事態は不可抗力だった。まさか彼女の最後の食料を隼がたまたま持って来てくれた、だなんてそんな都合のいい事実を彼女達が信じるとも思えない。

「何が違うって？ 見損なつたぞ、そいつはあたしの…！」  
「落ち着けヴァーニヤ、落ち着け落ち着け。一体何だつて言うんだ、つていうかキリルか、懐かしいな、いや違う。お前何にそんなに激昂している？」

激しい口調で暴れるヴァネッサに男が彼女と同じような訛りの強いキリル言語で言った。

「伍長、後生だ、アイツは殺さなきゃ気がすまねえ。アイツ…。」  
「さつきもシンジヨウが言ったかもしれんが、指示も無いままで敵対国とはいえ殺しは…。」

「関係無いね！ いや、バレなきゃあ良いんだろっ？！ 骨の髄まで埋め尽くしてやるよー！！」

「だから一体…。」

「アイツ、あれ、あたしの最後のレーション…！」

「あ… お前が騒いでたやつか… つて何で奴が？」

「知るか！ いや関係ねえ、重要なのは事実だ、奴が空き袋を持っていたつていう事実なんだよー！！」

我武者羅に暴れるヴァネッサを可哀想な物を見る様な目で男は溜息を吐いた。ロウはただ口を動かすだけしかできなかった。それは殆ど言葉になつていない。何故なら完全に彼女の迫力に押されていたのだ。

その時、鳥の鳴く声が空に響き渡る。風を切り裂く裂く羽ばたきが、徐々に近づいてきた。彼等は天空を見上げる、一羽の白い隼が、彼等の頭上を旋回し、そうしてロウの前に舞い降りた。その鋭い脚の爪には身体にそぐわないほど大きな白い何かを掴んでいた。痙攣しもがいている、白いそれを隼はとどめと言わんばかりに嘴で突いた。真つ赤な血痕が、雪に鮮やかに散る。

「野兎？」

男が呟く。ぐうと猛獣が喉を鳴らすような音がしてヴァネッサが急に大人しくなった。

「Hurry up! Hungry and seem to die」.

「Oh, wait. Short-tempered guy」.

「Year, anything is good. If I wait you a long time, you must die?」

「Fall silent sergeant? Away is out of order. Please」.

雪が真つ赤に染まっていた。男が持っていたナイフで野兎を器用に捌いている、その横ではヴァネッサが喧しく騒いでいた。男が内臓や肉の切れ端、筋などを俵に投げてやると俵はそれを美味しそうに貪る、その光景を見てサラが口を押えていた。

「This rabbit have foot six」.

「Huh it is a rare thing. The one of them is mine」.

「Do as you like」.

「It is eaten a lot. Don't you think?」

この頃になるとロウとサラは拘束を解かれていた。ロウは「Alisa」に歩み寄りその機体を撫でる。すっかり熱を失った機体は冷たく凍り付き、傷だらけの翼が痛々しかった。ヴァネッサと男： 伍長は兎を捌くのに夢中だ、だが「Alisa」がこん

な様子では逃げだそうにも逃げだせない。寧ろ今はここに留まっていた方が良いだろう。彼女も怒りを鎮めた事だし…　ロウは思う。

彼の横には眼鏡を掛けた地味な男がにこにここと笑顔を浮かべて立っていた。そうして、ゆっくりと噛み砕いたようなWWで彼に話しかける。

「（貴方は、この戦闘機のパイロットなんでしょう？）」

「（ああ、そうだ。）」

ロウはぎこちないWWで返しつつチラリとサラを見た。視線に氣付いたサラが歩み寄る。彼女がロウの傍に来たのを見て彼は少し早口のWWに切り替えて捲し立てる。

「（僕はシンジョウ。見た目通りのメカニックで…　この戦闘機は凄いな。まさに技術の粋って感じだよ。といっても武装に関して言えば少し時代遅れの感は否めないけれどね、ってそれは僕がアルデアアナ兵だからかもしれないね。ザクセンなんてもっと酷くて…　まあ、それは良いんだけど。）」

「（何か…　聞きたい事が？）」

「（ええっと、何から話せばいいかな…　お姉さん、名前は？）」

「（私はサラ・タケウチ。彼はロウ少尉、この戦闘機の操縦士。）」

「（タケウチ…　へえ驚いた。君のルーツは東邦？）」

「（曾祖父は東邦出身みたいだな。）」

「（じゃあルーツを辿って行けばきっと僕と君は同郷だね。いや珍しいよ、でも見た目は完全に北方領土系なのにね。白い肌にグレーの瞳、金髪だったら理想的だったんだろうけれど、あ、で何だっけ？）」

「（それは私の台詞だ。ロウに何か聞きたそうにしてるから来たのだが？）」

「(君だつてあの兎の解体ショーを見るよりは良いだろう?)」  
「(そりゃあそうだが…。)」

ロウは二人の会話のやり取りを横でただ眺めていた。その内容は断片的にしか解らなかつたが、親しげな様子に少し腹立たしさを覚えてサラを突いた。

「何て言つてる?」

「ううん、今の所特に何も…。」

「(サラはオペレーター?)」

シンジョウの問いかけに再びサラはそちらを向いた。

「(そうだが…。)」

「(この機体に興味があるんだ、僕はメカニクなんだけれど…  
そうだなあ、この機体のシステム理論がイマイチ解らなくて。も  
しかして、君解つたりする?)」

「(解つてたとして、敵兵の貴方に教えると思う?)」

「(敵兵か、敵兵ね。僕には全くそういうのって興味ないんだけど。  
まあ、一理あるとは思つよ。この機体は光学ステルス搭載でしょ、  
勿論だよな。今時ザクセンだつてそれくらいの技術はあるし…。  
それも「魔素」を利用した… ううん、正直「魔素」に関して言え  
ばアルディアナは後進国だからなあ、精々光学ステルスと防御シス  
テム位しか利用できてないんだよね。君達も「魔素」が使えるの?)」

「(私は… 少し。といつても貴方が想像する様な炎を出したり氷  
を使つたりといった派手な物ではないがな。少尉は全く駄目だ。)」

「(へえ、この機体の通信関係のシステムつていうのは全部「魔  
素」理論つて奴を応用している?)」

「(ああ、そうだな。ある意味、機械と「魔素」との掛け合わせに

関して言えば、ヴァローナは先進国だからな。」

「なるほどねえ…じゃあ僕が幾ら弄っても解らない訳だ。解らないついでにこれは僕の趣味みたいなものなんだけど、この機体、修理しても良いかな？」

「なぜだ？ 逃げ出されるかもしれないぞ？」

「だから、あまり僕にはそういうの興味無いつて、ああ、そんな事いつていたつてのは軍曹には内緒にしておいてね。彼女怒らせると怖いんだ。」

「(だつたら尚の事、修理なんかしたらその彼女に怒られるのではないか?)」

「(まあ…そうかもしれないんだけどまあ。それは後で僕が彼女を言いくるめるとしてさ。)」

「ロウ少尉。」

サラが急にロウの方に振り向いた、彼はややむくねながらサラを見る。

「彼がな、」 Alisa 「を修理したいと言っているんだが。」

「ふうん。」

「やつてもらうか？ 私たちでは手に負えないだろう？」

「そんな事させられるか。奴に触らせる位なら自爆させる。」

ロウは言つてそっぽを向いた。「(自爆させるつてさ。)」サラがシンジョウに言うと彼はがっかりと肩を落としていた。ロウはそんな彼を後目に見ながらテントの中に戻った。サラも彼の後に続く。

「なあ、少尉。良いではないか少しくらい。外装的な理論でいえば何もアルディアナに隠すほどの技術は使われていないのだし、彼は「魔素」に関しては素人だ。機密事項が漏れるとは…。」

「……サラ、君は随分と奴と親しくなつたようだな？」

「…はあ？」

「警戒しろ、奴は敵だぞ。」

「まあ、だが本人曰くただ機械にしか興味が無いと…。」

「敵と慣れ合うな！」

ロウはピシヤリと更に言い放つ。サラは彼の言葉を聞いて心底面白くなさそうな表情を浮かべた。

「More slowly and more carefully.  
Don't burn it.  
Noisy and burnt by yourself.  
f.  
Be troublesome」

肉の焼ける香ばしい匂いが漂ってきた。ロウはテントの骨に止まつて羽を休めていた隼を呼ぶと腕の中に抱えた。

「少尉、姐ちゃん、出来たぜ！ お前等も喰いな。」

ヴァネツサがやたらと上機嫌に皿を差し出してきた。一食分には心許無いが温かい食事でありつける事自体がこの環境下では稀有だと言つても良いだろう。ロウは足（と思われ）の肉を取り齧った。サラは「私はいらぬ。」と言つてそっぽを向いてしまった。ロウは骨に付いた肉片を隼に齧らせる、そうしてこいつに名前を付けてやるうと思つた。

「なあ、お前、何て呼べばいい？」

隼は、ただ喉を鳴らし足で自らの首元を掻いた。

「じゃあ、ハティでいいか？」

その言葉に反応したのかそうではないのか、ただ一声鳴くとハティは羽を震わせて飛び上がりロウの頭の上に止まった。

「随分と仲良しなんだな？」

ヴァネッサがその光景を見て言う。

「あんと伍長には負ける。」

「っは… 言ってくれる。」

彼女はニヤリと笑いサラが残した肉をつまみあげると頬張った。

「Hey sergeant, I want to talk.

「Year, come on. What business is it?」

紙皿を片手に持ったシンジヨウがヴァネッサに話しかけた。彼女は振り向き早口で言うと、名残惜しそうに指に付いた油を舐めながら彼の方に向き直った。

「(で、何だ？ 話つて。)」

「(彼等の戦闘機なんですけど、もしかしたら修理すれば現在地がわかるかもしれませんよ?)」

「(そりゃ本当か?)」

「(ええ、どうやら最新鋭機のようにすし、それなりのレーダー機能やらGPSやら積んでいるでしょうから。)」

「（ふうむ…でもっそれってボランティアじゃねえか。奴等に手を貸す義理があるか？メリットは？）」

「（そりゃあ、このままここで雪が小降りになるのを待つ…って言ったって、たぶんそんなの無駄なんだって、軍曹だってわかっていんでしょう？今は一刻も早く、雪が降り積もって深くなる前に、トラックが走れるうちにここを出ないと。燃料だって、ギリギリなんですから。」

「（その為にはより正確な現在地点の把握と、この辺の地形図が必要だ。）」

「（そう言う事です。）」  
「んん ……。」

ヴァネッサは何やら考える様な素振りです。暫く腕を組んで唸っていた、と思うと急にロウの方に振り向く。

「なあ、少尉、あの戦闘機…。」

「触らせられない。」

「…ああ、予測範囲内の返答だな。つまんねえ。」

「何が目的だ、情報か？それとも…。」

「目的は…。」

急に真面目な顔になるとヴァネッサはロウを真正面から見据えた。その視線に彼は逃げ場を無くして押し黙る。有無を言わせぬ迫力とはこういう物かと思ってみたりもした。ハティが警戒した様な鳴き声を上げロウの頭上から飛び去った。ハティの羽が、二人の視線を潜り舞う。

「あんたの戦闘機に恐らく記憶されているであろう、現在地が知りたい。このままでは我々もあんたらも双方共倒れた。雪はますます深くなる一方だし、食糧云々の前に凍死するのがオチだろう。少尉、

あんたも嫌だろう？　こんな辺境で腹を空かせながら手足の先が腐  
つて行つて死ぬのなんて。」

「……。」  
「悪い条件じゃない筈だぜ？　こっちはあんたの戦闘機を直す、あ  
んた方はそれに乗って帰れば良い。あたしらもあんたらの持つてい  
る情報で仲間との合流ポイントに行ける。どうだ？」

「……。」  
「操縦士つてのは厄介だ。自分の機体には他人に指を触れるなど言  
う。大概そうだ。だが……。」

彼女はロウが目で追えない程の俊敏で手慣れた動きで銃を取りだ  
すと彼の腹に付きつけてにっこりと笑う。

「それが無理ならあんた達には死んでもらうよ……　つていうのはど  
うだ？」

ロウは横目でサラのいる方を見た。サラには伍長が、ヴァネッサ  
と同様に銃口を彼女に向けている。サラはただ両手を上げて首を振  
るばかりだった。ヴァネッサの背後にはシンジヨウが。彼の眼鏡の  
レンズの向こう側にある黒い瞳がしたたかに、賢しく笑っているの  
をロウは見逃さなかった。

「無言つてのは肯定の意の現れだ。（おいシンジヨウ、そのの姐さ  
ん連れてきなよ。こっちはあたしが面倒見るからさ。）」

「（恩にきまず、軍曹。）」

彼は言つと、スチール製の大きな道具箱を抱えフラフラとテント  
の外に出て行つた。伍長がサラを連れてその後を追う。

「Don't violate it.」

「It wants to say to you!」

ヴァネッサが伍長に言い、彼がややうんざりした様子で答えた。薄らと解るその意味に自分自身が不甲斐なく思えて、ただ、食い縛った奥歯の合間からは不愉快な音が毀れた。

自分が陸軍兵だったなら、この事態を収拾できただろうか。自分が魔素使いだっただなら、何かしら打開策はあったのだろうか？ こういう時に限って自分は何も出来ない、そう、もしこの時自分に、自分が「Alisa」と共にあったのならば…。

ロウは奥歯を食い縛り目を閉ざした。彼は幽かな音を聞き分ける様に耳に全神経を集中させる。だが聞こえてくるのは相当早口で専門用語の溢れるWW、無力だ… そう感じた。

ヴァネッサが一 Oral コールを煽る。相当酔いが廻っているはずなのに、彼女の眼力は衰えることなく彼の胸の内を抉っていた。見透かされている… そう彼に思わせるのに十分な、水色の視線は揺るがない。

「なあ…。」  
「…。」

彼女が口を開く。飾り気のない唇は肌の色にやや朱を足した様な薄く色気の無いもので、その片側がきゅっつと吊り上がりそうして更に告げる。

「情けないのか？」

その言葉に心臓が跳ね上がる様な興奮を覚えて彼は思わず前のめ

りになった。倒れそうになるその額を彼女の銃口が支える。

「ははは。まだ玉は付いてらあなあ。」

彼女は言つて更に唇を吊りあげると、銃口をロウの額にのめり込ませる様にして彼の頭をテントの支柱に押し戻す。

「安心しな。彼女にやあなんも、手出しさせやしないよ。」

「……。」

「あたしの眼の黒い内は奴等何にも出来やしねえんだ。あんたが何も出来ねえようにな。」

「……。」

硝子玉のような澄んだ水色、乱雑な言葉とは裏腹に不思議と説得力のある響きにロウは肩の力が抜けて行くのを感じた。何故自分がそのような気持ちになったのかは彼にも理解が出来なかった。諦めかけていたのは事実だが諦めた訳でもない、敵を信用した訳でもない。だとしたら…… そういう人間性なのか、と彼は思った。

## 15 (前書き)

この作品は2010年に書かれたものであり、現在はデータを転載しているだけです。したがって、掲載する際に、不謹慎なんじゃないか!! と悩みましたが……うーん、多少改稿して掲載する事にしました。

\*\*\*

「(……つまり、この戦闘機は「魔素」による通信によつて主なる制御をおこなっているという認識であつている?)」

「(まあ、ほぼほぼな。だから本来は魔素使いである「魔術師」が扱つてこそ、その能力を発揮するのだよ。)」

「(うう〜ん、良く解らないなあ、そんなもの作つても意味が無いだろうに。兵器なんて誰にでも簡単に扱えて十二分の戦闘力になる物を作つてこそでしょう。)」

「(ふん、これだからアルディアナは。粗暴で野蛮なのだ。選ばれた者こそが弱気を守る。それで何が悪いのだ。)」

「(これだからヴァローナは、選民主義……はザクセンか。でも似たり寄つたりだね。驕り見下し頭でっかち。)」

「(貴様に頭でっかちと言われる所以は無いぞ。)」

「(ああああ、そうだね。でもタケウチだつてそうだろう。)」

「(シンジヨウの方がガチガチだ。)」

「(誰も固いとは言っていないだろ。)」

「(いいからお前等早くしてくれ! 寒いんだよ!!)」

「(…で続きだけど…。)」

「(…ああ…。)」

ロウの苦悩を余所に案外にもテントの外では和気藹々と作業が続いていたのだつた。

\*\*\*

煩い位に頭上から降り注いでいたパウダースノーはその日の深夜に降り止んだ。しかし、時折草原を舐める様にして駆け抜ける突風が降り積もったばかりの粉雪を巻き上げ、まるで吹雪の様な様相となる。月光の輝く透明な夜風が肌を切り裂く夜： 不時着してから3日経っていた。

水は鍋に入れて溶かせば良い、幸いな事に火がありテントもある。だが食料はそうもいかない。ロウを始めアルディアナ兵達は時折、気まぐれのように隼ハティの捕まえて来る野兎や鼠などで飢えを凌いでいた。

この頃になると不思議な物で、敵味方入り乱れる小さなテントの中にも交流と秩序が生まれていた。争っていても仕方が無い、今は何とかして生き延びよう、そう本能が囁き無意識に彼等にそう行動させているのかも知れなかった。そのくらいに、全く今の状況を知り得ない第三者がこの状況を見たら「和気藹々」と表現するだろう。だがしかしその均衡は細く伸びた氷柱よりもまた危うい物で有る事も事実であった。

ヴァネツサが、彼女の天性の持っているモノなのかもしれないが、良くまとめている、伍長は彼女に従い良く働いていた。シンジヨウとサラはラストーチカの修復作業に余念が無い。氷のつぶてが叩きつける様な環境の中で彼女達は機体に齧り付き、飽きもせず作業に没頭していた。ロウはただハティという。この頃にはもともと人懐っこい性格だったハティはテントの住人達に次第に慣れて、ヴァネツサや伍長の肩や頭に止まる様にまでなっていた。ただ一人、サラを除いては。ハティはサラにだけは指一本触れさせなかった。威嚇するか逃げる様に飛び立つかで、サラはそれが一人除け者にされている様で面白くないのだろう、更にシンジヨウが機体に触れる事を

嫌うロウとはしばしば対立を繰り返していた為、サラとロウは自然と、殆ど会話を交わす事が無かった。

月光が青白く光る雪の凹凸を照らした。細く長く伸びた影は張り付いた様に、時折風の吹き荒れる大地の中で動かないでいる。影の主、ロウはじつと愛機「Alisa」を眺めていた。不時着当初よりも大分元の姿を取り戻しつつある、鈍く青く輝く機体の腹をそつと撫でる。

痺れる様に冷たく凍てついた鉄板、傷だらけの翼。シンジヨウはテントの中で毛布にくるまって眠っているだろう。あの男は信用できないが、腕は良いみたいだ…。ロウは思った。大元の設計を知らない癖に、サラの不確かな情報だけで良くここまで復元したと思う。サラも懐く筈だ、自分の様な甲斐性の無い不器用な男よりもああ言う奴の方がいいだろう…。とそこまで考えて彼は思考を止めた。

「ロウ… 少尉。」

背後から声が掛かる。細い月明かりの中に彼女は立っていた。足を吹き抜ける風が、雪を巻き上げ煙る。ロウは彼女の姿をチラリと見て再び愛機に視線を戻した。サラが息を呑むのが気配で伝わってきた。

彼は彼女を背中を意識したままで、愛機の前輪をよじ登りキャノピを挟み開けた。そうして「Alisa」の中に滑り込む。メインコンピューターを立ち上げた。所々液晶の滲んだディスプレイにその文字は並ぶ。

(ヴァローナ皇国空軍)

6 -

(戦略航空隊 第6戦闘航空部隊)

「(第八番機 ラストーチカ 「個体識別称：アリサ」)

(搭乗者名：「ロウ」)

彼は、ふと頬が温かくなるのを感じた、自らの頬に指を這わせる、濡れていた。涙… ヴァローナ、その言葉に胸が熱くなる、この雪が、この雪に否もつと深い雪と氷に閉ざされた塔…。

「少尉？」

声にその方向を向いた。機体をよじ登って、サラが彼を見つめていた。月明かりに彼女の髪が光揺れている。

「…。」  
「少尉、ロウ少尉…。」

彼女の眩きは凍てついて、その場に張り付き凍ったように、寒さに震える小さな音色。

「私も… 帰りたいです。」

青白いディスプレイの活字を覆い隠す様にサラがその身体を無理矢理滑り込ませてきた。小柄だとはいえ大人二人が入れるほど操縦席は広くは無い。必然的に殆ど密着する様な体勢になる。ただそれが、平常時であつたならば不快でしかないその状態が不快ではない、外気温が低すぎるからだろうか、それとも何かが麻痺を起しているのかもしれない。気が付くと唇を重ねていた、体温の温もりと湿気にサラの眼鏡が曇る、互いの、ほんの少しの獣臭。

唇を放し見つめ合う前に視線を逸らす。この時になつてロウは急に気恥ずかしさを感じ赤面した。何をやっているんだ俺は、何を……。腹の中でその問いだけがぐるぐると回っている。互いに何も言わなかった、少なくとも彼は何も言えなかった。触れている部分から自分の早鐘のような鼓動を悟られているのではないかと気が気で無く、努めて冷静に保とうと無理矢理ディスプレイを見つめた。

「Alisa」は何も言わない。

ロウは自分が浮気をしているような罪悪感に襲われた。「Alisa」を裏切っているような気がして……。ただそれはヴィンスに言わせれば幻想で、まやかして、身の無い話だ。という奴なのだろうか……。

キータイプの音、視線を巡らせればサラが、真剣な面持ちで右手だけで操縦席のディスプレイに何かのコードを打ち込んでいた。女の方が強かだ……。こういう時にロウはつくづくそう思う。

「ロウ少尉……。」

暫くして彼女は上唇を持ちあげた。仄かに響く幽かな声は、それでも十分に至近距離に居るロウには届く。

「…… ああ。」

「私は出撃前にこの機のシステムに関しては細部まで目を通したつもりだったんだが。」

「…… そう。」

「…… その、ここ数日、少尉の許可を得ずに私とシンジヨウさんとで「Alisa」を復元しようと試みていて…… 機体の、外装の方はほぼ、普通に飛ぶには差し支えない位になったと思う…… それは、まあシンジヨウさんの腕のお陰だが。」

「それで?」

彼女の口からシンジヨウの名が出ると彼は自分の心中が細波立つ事に気が付いた。嫉妬かもしれない…… ただそれを嫉妬と認めてしまったら自分が負けた気がして惨めになるので彼は自分で自分に“気付かない振り”を貫き通す。

「システムの根幹…… メインの部分がスッポリ抜け落ちているんだ。」

「…… それは消えてしまったとかではなく?」

「いや、通常システムは一度描き込んだ物は外部からデータを削除されたとしても、“書き込んだという記録”が残り復元が可能なんだ。それすら見当たらない。」

「基盤自体が衝撃でやられているかも。」

「確かめたが、基盤は無事だった。」

「ふむ……。」

「ラストーチカはそれぞれの機体が完全独立したシステムになっていて、個々の操縦者の癖や戦闘履歴何かを蓄積学習し常に更新されて行く、それをLINKシステムでヴァーストックと連結、ヴァースト

「クはそれら各子機のデータを並列化させてデータ化して蓄積しているのだが… まあ、そんな事はさして問題では無い、問題なのはこの機の… 解り易く言うと」 Alisa 「たる部分がごっそり無いと言う事なんだ、当然フライト履歴なんかも見当たらない。」  
「 Alisa 」が、居ない？  
「 そうだ、だから現在地も何も、そう飛ぶ事さえ忘れてしまっているよつな…。」

そこで言葉を切り彼女は前方を見つめた。ロウも彼女の視線を追ってみる。フロントガラスの向こう側に、ハティが居た。機首の上に止まり、キャノピを嘴で叩いている。

「何だ？」

ロウは丁度ハティが通れるくらいキャノピを開けてやった。吹き荒ぶ寒風にサラが目を細める。ハティは一度中空に舞い踊ると、突き刺すように操縦席に滑り込んだ。ロウがキャノピを閉じる頃にはメインディスプレイの上にちょこんと止まり二人の様子をじっと見つめていた。

そうして彼女<sup>ハティ</sup>は大きく双翼を羽ばたかせた、狭い操縦席に風が起こり、二人は思わず目を瞑る、だが隙間から突き刺さる閃光に薄っすらとロウは瞼を持ち上げた。

先程までハティのいた筈の場所に光が満ち満ちている。翼を広げた隼を象った光が粒子となって砕け光が「 Alisa 」に吸い込まれていく。彼は息をする事も忘れ、啞然としてその様子を見つめていた。サラも同じであったらしく眼鏡の奥の瞳が大きく見開かれていた。

二人が顔を見合わせたその時、メインディスプレイが勝手に立ち上がる。つらつらと流れるプログラム、意思を持ったかのように走るコードは目で追うこともままならない。はじき出され続ける演算、それらが一通り終わり一度ディスプレイがブツリとブラックアウトした。次の瞬間……。

「……え？」

CAUTION  
CAUTION  
CAUTION

危険を示すアラートが機体のありとあらゆるディスプレイに映し出される。赤く点滅するそれらの文字の中、操縦席のメインディスプレイだけがただひたすらに写真を映し出していた。

上空からの写真、薄っすらと雪に覆われた、”何も無い草原”……。

「あ、そうか、そうなんだ、だからか！」

サラが何かを思いついたように口走った。ロウがいぶかしげな視線を彼女に向けると、彼女は何度も頷きながら「だから、あの鳥、私に触らせようとしなかったのよ、わかったわロウ。」と、少し興奮気味に言った。

「待て、説明してくれ。俺にはさっぱり何が何だか。」

「どうして解らないのよ。」 Alisa 「は少尉のバディだろ？ ハティは」 Alisa 「だったんだよ。」

「……はい？」

「だから！　そういうこと。アレは「Alisa」の防衛独立プログラム、この機体が危ないって踏んで一度「魔素」に戻っていったんだ。」

「…　すまない。俺はプログラムには疎いんだ。」

「だから、「魔素」には情報…　ううん、「魔素」自体が情報の塊だ。その情報を連結させて一定の規則性を持たせ縛ったものがこの機体のプログラム。しかしそれは危機に直面したときには独立型の形を取る方法でこの機体の得てきた情報、蓄積された戦略などを本体…　つまりヴァストークまで運ぶ事が期待されていた。まあ、今回は何故かそのプログラムがココにとどまっていた、みたいだけれども。だから、私に触られる事を嫌がったんだらう。私に触られたならココに強制的に戻されてしまうからな。」

サラは早口で捲くし立てると、キーを叩く。リズムカルな音と共に、ディスプレイ上の画像は次々と切り替わっていく。

「見てくれ少尉…。」

彼女は一枚の写真で手を止めた。彼はその画面を覗き込む。ただただ只管に何も無い荒野、雪を纏った大地のその中心が深く抉れている。CAUTIONの文字が、赤く点滅し、画面の中の白雪を朱に染めていた。

「…　少尉…　もしかしてココは…。」

「……。」

ロウはサラが紡ぎ掛けて飲み込んだ言葉と、恐らく全く同じ言葉を思い浮かべて絶句した。恐らくこの場所は、立ち入ってはならない禁忌の大地、かつて隕石が文明を滅ぼす以前に汚染され封鎖された地図にも存在を記されない点…　グラウンド・リバー…。

「少尉！」

サラが悲痛な声を上げる。ロウはそれと同時にそれよりも早く操縦桿を倒していた。

ここに居てはマズイ……。

感覚が告げている。

鼓動が早くなる。

キャノピを一度開ける。びょうびょうと吹く風が冷たい雪を運び、湿気に曇っていた機内の温度を一気に下げた。サラは一度頷くと身を翻して後部座席に着く。

「サラ、ハティの集めてきたデータから塔への帰還航路は割り出せるか？」

「さあそこまではどうか。ただ現在の地図に記載されているであろうポイントまでなら割り出せると思う。」

「機体が十分に温まるまでにまだしばらくかかる、その間になんとかなるか。」

「善処する。」

凍りついた翼、微かに歪んでしまっているフラップ、傷だらけの胴体……けれどお前はまだ飛べる、なあそうだろうか？

「Alisa」……ロウはそつとディスプレイを撫でた。

「Alisa」のヘッドライト、ビームが雪面を舐める。照り返しに眼が眩み、サラは視線を逸らした。吹き荒ぶ風で凍えた頬

に、自らの髪が鞭を打つ。悴んだ指で耳に掻き上げて、サラは目を細めた。

ビームが照らし出す「Alisa」の進行方向に一人の影を見出したからだ。カーキ色の防寒コートをはためかせ、しかし暴風にたじろぎもせず彼女は銃口を真つ直ぐに向けていた。ヴァネッサだ。アルティメットシルバーの、磨き切られた銃口と、彼女の碧い瞳と黄金色の髪が瞬いている。

「……Freez。」

凍てつけ… 彼女のその言葉は風に浚われて幽かに響く、しかししっかりと殺意を残している。ロウは彼女の突き刺す視線を真つ直ぐに見据え、そうして言った。

「あんた達も直にココを離れた方が良い。」

「… やっぱりそいつは動いたんだな、私達を欺いていた理由は何なんだ…？」

ロウの幽かな声は風にかき消されたのか、彼女は言った。怒っているのだろっ腹の底からの声だった。

「違う、騙そうとした訳じゃない。」

「じゃあ何か。ウチのシンジョウを利用するだけして自分達だけ逃げようってのか？」

「それも違う。」

「じゃあ何だ、答える！！」

撃鉄を上げたヴァネッサにロウは声を一段落とし、ゆっくりと噛み砕いて伝える。ココに居てはいけないと言う事を、この激情した

彼女にどう伝えようと、そうして自分達がいかにココから早く離れられるのか、と、内心は千路に乱れながらも、冷静を装う。

「ここは、リバース・サイド。グラウンド・リバース、死の大地だ。」

「…何？」

「そう、今思えば思い当たる節はいくつも合った。如何に極寒の地と言えど、ココはヴァローナより緯南、短い背丈の草も生えない大地がこれほどまで広大な範囲に広がっているだろうか。それだけじゃない、ハティが捕まえて来た兎の足が多かったり、鼠を捌けば内臓器官が普通とは違っていたりしただろうか？」

ヴァネッサはそこまでロウの言葉を聞くと、暫く黙っていた。そうして恐る恐る唇を持ちあげる。

「マジか？」

「本当だ！」

ロウの背後からサラが言った。彼女は立ち上がり、ヴァネッサを見下しながら何度も頷く。

「だから、早く離れた方が良い。」

サラは言葉を噛みしめて俯いた。その表情の意味はロウには良く解らなかったが、ヴァネッサには通じたらしい。彼女は気まずそうに髪を掻き上げ銃口を下げた、しかし再び喰い下がる。

「そうか… だとしたら何故私達にそれを教える？ 敵じゃねえか。」

「敵、でも、同じ、人間だ。」

サラが言う。

「そうか…。」

ヴァネッサは一度指に掛け回転させながら太腿のホルダーに銃を仕舞った。そうして彼等に背を向け言う。

「行けよ。」

「お前達はどうするつもりだ？」

「適当にするさ、どのみち汚染された。まあ、かといってココでぐずぐずしている訳にもいかねえ。直に出発だ、道を探すさ。」

ヴァネッサは肩を竦めてポケットに手を突っ込むと、テントに向かって歩いて行く。その背に向かってサラが叫ぶ。

「北北東へ！　それが国境への最短ルートだ。雪深く、吹雪の勢いも増すが、南へ進んでも望みは薄い！」

風に掻き消されぬよう、雪に覆い尽くされぬよう、彼女は言葉を投げた。受け取った…　と言う様にヴァネッサは一度振り返ると手を高く上げ大きく振り下ろした。飛べ！　整備士たちの合図のように。

真意は定かではない。ただロウにはそう受け取れた、程良く機体も温まっている。ロウはサラがシートに座ったのを見届けてキャノピを閉めると、操縦桿を思い切り引いたのだった。

16 (前書き)

ぼやかしきれて、ないかもしれない。

青白い蛍光灯が明滅している、薄汚れた天井、汗ばんだ額を手の甲で拭い口ウは深く息を吐いた。手足の先から背中までが吸いつくようにマットレスに沈んでいる。微温湯に浸かっているような心地よさにまどろむ、つい一週間ほど前には考えられなかった満たされた温もりに彼はベッドから抜け出せずにいた。

ぼんやりと天井を見つめながら口ウは額においていた手を天に向けて伸ばしてみた。その掌を天井の壁紙の継ぎ目にそって平行に動かした。そうして少し傾け翻す。

「おいおい、丸一日眠っていたと思ったら、起きた途端にフライトシュミレーションとは、お前どこまで馬鹿なんだ？ え、口ウ？」

声のした方を振り向けば、ヴィンスが向かいのベッドで雑誌を広げ、足を組んで座っていた。

「丸一日…か。」

「そうだよ、丸一日だ。」

口ウは上半身を起してみた。背骨がぎこちなく軋む。顎を擦ってみると、みつともなく所々伸びた細い髭が指に絡んだ。髪は油ぎってペタリと地肌に張り付いている。

「シャワーを浴びたい。」

「ああ、そうした方が良い。お前、果てしなく臭いぞ。」

ヴィンスの声を背に口ウは寮室の簡易シャワールームへと頼りな

く歩いた。

古びた蛇口を捻ればザアザアと熱い湯が乾燥でひび割れた肌を潤していく、真つ白な煙が小さなタイル地の空間を覆って行く。湯煙の中でぼんやりとロウは昨日の事を回想していた。

\*\*\*

鼠色の雲を突き抜ければそこはどこまでも果てしない薄い青の空間で… ロウとサラはただ只管に沈黙を共有していた。何も、喋る気にもなれなかった。

グラウンド・リバー… その名を思うと下腹部が得も言われぬ感覚に襲われる。そこは大地は死の土地と伝えられている、地図上から抹消された場所で… 汚染された土と大気は半永久的に全ての命を蝕むと伝えられている。そこには、かつてロスト・テクノロジの粋を極めた軍事都市があり、ありとあらゆる大量破壊兵器の開発がおこなわれていたのだが、隕石によって連鎖爆発を起こし崩壊したのだそうだ。それ以来その土地には草木も根付かず、そこに住み着く物たちはみな薄命でそうして生まれてくる子供達には障害が絶えなかったという…。

何も、言葉を交わす事など出来なかった。重たい沈黙に反して機体は悠々と、大空を切り裂いて一路北へ… 彼等の故郷、塔を目指して白い尾を引いた。

初めはただ遠くに針の様に見えていた塔が徐々に近づくにつれて大きく雄大にその姿を現す、ただ行く手を遮る何処までも続く壁の

様なそれに沿って、「Alisa」は垂直に上昇した、その頂点を目指して…。

滑走路に滑り込めば、わらわらと整備員や医療班の人間達が集まって来た。キャノピを押し開けて、ロウは操縦席から半ば転げ落ちる様に抜け出した。膝が震え、コンクリートの地面に倒れ込む。

「ロウ、お前、生きて…。」

彼の耳に最後に傾れ込んだのは聞き慣れたハスキーな声…、相方のヴィンスの声だった、それ以外はよく、思い出せなかった。気付けば丸一日寝ていた、と言われたのだった。

「Alisa」はどうなったのだろうか、そしてサラは…？

170

「もう、いいのか？」

シャワールームを出るとタオルで念入りに髪の毛の水分を拭いながら、ロウはヴィンスに声を掛けた。

「いや、まだ一応療養中。半復帰ってことで事務作業やら雑務を押しつけられてるけど。」

ヴィンスはゴロゴロとかれのベッドの上で寝転びながら言った。そうして片手をヒラヒラと振って見せた。ロウは彼に近づくとその掌を軽く叩いた。

「おう、お帰り。」

「ただいま。」

ヴィンスはニヤリと笑うと療養中の人間とは思えないようなバネで飛び起きて、そうして顎を擦りながら面白おかしそうに言う。

「で、どうだった？ サラちゃんとの蜜月は？」

「… 期待に反して悪いが何も無いな。」

「二人つきりだったんだろう？」

「そう言う訳でも無かったさ」

「ふうん？」

「あまり聞くなよ。今度オフの時にでも話して聞かせるさ。」

「聞かれると痛いつてわけか。」

「ヴィンスの脇腹と同じさ。」

「もう痛くないな。」

「嘘ばかりだ、ヴィンスこそ看護婦はどうした？」

「うんにゃ、欲求が激しすぎるからやめた。」

「ほれ、痛くない腹じゃないだろう？」

「余計な御世話だ。」

他愛のない会話を交わす。これが日常だったかよ… そう思うとあの時の感情や出来事なんて、という妙な感情がロウの心を満たしていた、しかし反して胸が痛んだ。

(何も無ければ良いが…、ああ、全部、何も無かったんだ。向こうは何とも思っていないさ。)

「まだもう少し寝ていた方が良いんじゃないか、それとも飯でも食うか？」

ヴィンスがロウを気遣って声を掛けた、この男にしては珍しい行

為にロウは数度瞬きをして神妙そうな彼の顔を見返した。

「気持ち悪っ。」

「お前なあ、そりゃあ心配もするぜ？　ロウ。」

眉間に皺を寄せる表情が可笑しくて、互いに額に手を当てて笑っていたその時だった。相部屋の扉をノックする音が聞こえ、二人はそちらを振り向いた。彼らが是とも否とも答える前に、扉は勝手に開かれ廊下には白衣を纏った女医がカルテを片手に立っていた。

「ハアイ、ヴィンセント、御機嫌よう、具合はどう？」

「ミス・マリザ、お陰さまで。」

軽く手を振りながら言う女医にヴィンスが同じく手を振り返す。マリザと呼ばれた女医は金のウェーブのかかったショートヘアを掻き上げてにっこりとほほ笑んだ。

「マリザ、紹介するよ。ロウ少尉だ。」

「知っているわ。だって彼今この空軍基地でもっともニーズのある話題なものね。」

ロウは彼女の、目元の泣き黒子が気になってじっと見ていた。「やあ。」と軽く挨拶を交わしたが、それ以上はどごとという事も無い、そう彼は思っていた。

「定期の検診？　もうそんなに日にち経ったっけ？」

ヴィンスが言うと、マリザは再びにっこりと笑う。

「いいえ、今日はあなたの診察に来たのではないのよ、ヴィンス。」

残念だけど。今日はイエン・ルウオ少尉にお話しがあつて来たの。」

彼女はロウの名前をフルネームで恭しく告げた。ロウとヴィンスは視線だけで何故と問う。彼女は彼等の視線には答えずに、ロウに對してだけ言った。

「私に付いてきてくれるかしら。とても大事なお話しがあるの。」

\*\*\*

その部屋の白い壁は塗り返したての様に青みがかつていて、アルコールの様な薬品の匂いが充満していた。マリザは黙って付いてくるロウを、脱脂綿や応急措置用のキットなどが雑然と置かれた棚の更に脇にあるグレーの作業用デスクに軽く腰を掛けた、ロウはその対面に置かれたパイプ椅子に、促され座った。

「話とは……。」

ロウの急かす言葉に彼女はただ微笑むと、「とりあえず、カモミールでも飲みましょう。ミルクを入れても良いかしら？」などと言いながら手慣れた手つきでティーバッグをカップに入れポットの湯を注いだ。直にミントの良い香りが部屋を満たす。彼女は双方のカップに茶褐色の角砂糖を一つずつ入れ、銀のスプーンでかき混ぜた。片方をロウに差しだしながら、もう片方のカップにすでに口を付けていた。

「落ち着くわね。カモミールには鎮静作用があるのよ。」

「はあ……。」

「まあ、飲んでちょうだい。今から私のする話、あなたにとっては多少シヨッキングな事だと思うから。」

やんわりと、微笑みを絶やさず言う彼女の言葉はどこか事務的で冷たい、とロウは思った。言われた通りにカップの中身を半分ほど飲み干して、サイドのテーブルに置いた。マリザはそんなロウの仕事を見届けると、濃い赤のルージュを引いた唇を動かす。

「一週間… 弱、かしら？ 貴方達が遭難していたのは。」

「そうだな。そのくらいだろう。」

「その間に、どこにいたの？」

彼女の質問にロウは胸が跳ね上がった。態度や表情には出さなかった、ただ彼は自分の鼓動が速くなるのを必死に抑えている。

「… さあ。質問の意図が判りかねるのだが。」

「そう。ではまず状況から…。貴方達の乗って来た機体、ラスト

―チカ第八番機アリサから多量の危険物質が検知されたのよ。」

「危険物質？」

「人間をはじめとした生きとし生ける者にとってあまり芳しくない物質よ。それを多量に摂取すると色々と不具合が出てくるわ。病気になるったり機能不全になったり、ね。」

「… そうか。」

やはりその手の話だろう、と視線を逸らしたロウに対してマリザは畳み掛ける様に言葉を綴る。

「それは今の時代だと、恐らくこの技術を不確かながら受け継いでいるのは、アルディアナ帝国…。だけれど、そのアルディアナの科  
学者たちだって恐れをなしてあまり積極的にはなれないよう

な、そういうった類の物よ簡単に言ってしまうね。第八番機からはその害の出始めるボーダーラインを越えた量が検出されたのよ。だから私達医師は貴方達の事を心配しているってわけね。いえ、別にそれが他の人に遷ったりなんて事は無いから安心して欲しいのだけれど。」

「確かな事は判らない。ただ、恐らくグラウンド・リバーだ。」

マリザの口からアルディアナという言葉が漏れた時、ロウは、彼女が既にある程度見当を付けた上で彼に、ただ確認の為に聞いているのだと言う事に気付いた。

「やっぱりね… そうか。」

暫くの間、沈黙が部屋を満たした。マリザは手にしていた万年筆を指でくるくると器用に回しながら、暫く考え込んでいた。

「それは、サラ・タケウチも同じくよね。」

「そう言う事になる。」

「… そう。」

「死ぬのか？」

「え？」

「死ぬのは構わないが。俺は特に… そんなものはとうに覚悟の上だよ。でないと飛行機乗りなんてやっていられないからな。」

「見かけによらず殊勝なのね。」

マリザは表情を崩さずに言うと、万年筆をデスクの筆立てに戻した。

「そんな簡単な事では無くて、まあ、あなたは男だからそれほど深刻ではないのかもしれないけれどね。」

「どついう意味だ？」

「採血をさせて頂戴。結果はなるべく早く伝えるわ。」

マリザはロウの質問には答えず、デスクの引き出しから未使用の注射器を取りだすと、ビニールの包装を手早く破り捨てた。

腕の注射針の痕を脱脂綿で抑えながら、ロウは廊下に一人出た。それ以外に彼が何を聞こうとも、もうマリザはうんともすんとも語る事は無かった。だが、彼女の言葉がロウの胸中で渦巻き響く。グラウンド・リバーズ… 伝承によればそこは死の住まう場所。

(俺が、巻き込んだ。)

廊下の、冷たいコンクリートの双壁が、迫り来るような圧迫感を醸し出していた。所々、水が滲んだ様な色斑、あの場所の空を思い出す。溜息が毀れていた、壁の冷たさが痛く、ロウは目を伏せた。

「ロウ少尉…。」

幽かに、微かに声がした、気がしてロウは伏せた臉を再び持ちあげた。目の前にはサラが、壁に凭れる様にして立っていた。その目が少し赤い。泣いていたのかもしれない、と彼は思い、視線を逸らした。

暫しの沈黙が訪れる。プツリプツリと蛍光灯の瞬く音までもが聞こえてきそうなほど、そこは無音の空間だった。

「無事… だったのだな。」

先に声を発したのはサラだった。彼女は努めて気丈に振舞っているようだった。

「……ああ。」

「私も、な。検査の為に来たんだ。少尉も、そうだろう。」

「俺は……終わったよ。」

「そうだろうな。私の方が先に終わったんだ。」

「じゃあ、話は聞いている訳か。」

「まあ、な。」

「……。」

そこまで言っただけでサラの肩がやや下がる。俯いて、少し微笑んだ。

ロウは居た堪れなくなっただけで視線を完全に逸らした。

「そうだな……こんな状態ではな……私は、タケウチ家にとっては要らぬ存在となってしまうたようだよ、跡取を作れないようではな。」

「……まだ結果が出た訳じゃないだろう。」

「ふむ、ロウ少尉にしては珍しい事を言うな。検査の結果など待つまでも無いよ、危険性が高いと言うだけでも、それはすなわち……」

タケウチ家にとっては、要らぬという事になるのだよ。」

殊の他、淡々と他人事のように彼女は語った。濃いブラウンの髪と、赤い縁の分厚いレンズのはまった眼鏡が彼女の真意を覆い隠して、その奥にある瞳の揺らめきを捉えられずに……ロウにはそれがもどかしくて遣る瀬無くて、けれども再び堰を切った感情が、濁流の様に押し寄せて染め上げて行く……、そう、それはあの時以来で……どうしようもない……。

「サラ…。」

言葉が、頭で考えるよりも早く、胸から喉をせり上がり、毀れる。

「俺… は、そりゃあ、親衛隊の御方々と比べれば取るに足らないかもしれないが… それなりにパイロットはエリート扱いだ…。」

「？ … ああ、そうだな。何、どうした？」

「… 上手く言えないんだが、その… 責任を取れる様に、したいと思っっている。」

「… それは、どういう？」

そこまで聞いて、はっとサラは顔を上げた。二人の視線が今日初めてぶつかり合う。サラの大きな瞳が揺れていた。その頬を、今まで耐えていた涙がポロポロと毀れ落ち頬を伝う。その雫に口ウはそつと手を差し伸べた。

\*\*\*

その日以来、塔の最上部に位置する発着場で、ガラスの向こうの住人と、一介の空軍士官が落ち会う微笑ましくも奇妙な様子が見られたと言う事だ。

\*\*\*

それから数週間後のとある一場面……。

「舵を切れロウ、ぶつかるぞ！」  
「やっっている！ ……けど！」

眼前に迫る切り立った崖の様な塔の外壁、上も下も右も左も無く切り揉みされているこの状況下では、それはもはや壁ではなく、それこそが地面であるかのように思えた。

彼らが駆るはラストーチカ第八番機 「Alisa」、それに用いられるは最新の計器であり、技術であり、すべての装甲から基盤までを新調した 「Alisa」 であつた。

ロウとヴィンス、彼らは未だ塔の最上部に鎮座し眠る空中空母ヴアストワークから飛び立っていた。彼らの敵と……塔を包围し攻撃を仕掛けようとするあらゆる戦力と闘う為に……。

無数の黒き敵機に対してロウのアクロバットが冴えた。ヴィンスの指摘は的確で、無駄弾を許さない。敵味方が入り乱れる、軍司令部は彼等の上官であるアダムと連絡を取ることができずただ右往左往とするばかりだった。

「………」

辛うじて塔との激突を避けた 「Alisa」 は機体を口  
ールさせながら外壁に沿って飛び続ける。

「………言うことを……聞け！ 「Alisa」 「

ロウの切実な願いも虚しく 「Alisa」 の翼は今にも  
風圧でばらばらになりそうだった。

「Alisa」のメインコンピューターは静かに押し黙っている。以前墜落しかけた時のようなけたたましさはなかった。

ロウはガタガタと震える操縦桿を両手で押さえながらふとフロントガラスの外を見た。

入り乱れた敵味方の、そのどれもが不穏な飛び方をしていて、そうして塔からある一定の距離より向こうには何も、無かった、あれほどこの空は犇めきあっていたと言つのに……？！

「ヴェィンス、何かが変だ！」

「何か？ 何もかも間違いか？！」

ロウとヴェィンスが叫んだその時だった。ボディに衝撃を受け機体が大きく沈んだ。

「畜生、攻撃か？！」

「まさか、被弾したなら……。」

したなら粉微塵だろう？ そう言い掛けたロウは目の端で奇妙なものをつえ言葉を失った。

それは、脇目も振らずに翔けて行く……裾をながく引き柵引く髪が弧を描く……雲を絡ませるその姿はさながら、彼の民俗に古くから伝わる伝説上の生物……竜をロウに連想させた。

その翔け行く先にはまばゆいばかりの光……プリズムに輝く12の翼とその中心には銀の、煌めく長い髪を持ち優雅に揺らめく白い人？

竜が何か言った……。

光に飛び掛かる。

光が揺らいだ。

そっと手を伸ばす。

煌めいた、ああ、この感覚は……

……

「ロウ……ロウ！」

ロウは自分の名を呼ぶ声にはっとした、視界が赤い、落ちたのか……。

眼前のディスプレイに赤い文字が踊っていた。警告を告げるその瞬きにロウの思考は一気に現実へと引き戻された。

操縦桿を握る。地面が迫っている。ギリギリだ。

「I have」.

ロウは思い切り操縦桿を引いた。ヴィンスがカウントする、絶体絶命の状況なのに、不思議とロウにはその状況が恐ろしくはなかった。ただ大丈夫だ、守られている、といった類いの奇妙な安心感が彼にはあったのだ。

何故だかは判らない。ただ「Alisa」にも翼があるのだ。

ふうわりと、機体が浮かんだように感じた。塔の直下から壁伝いに吹き上がる上昇気流に乗ったのだろう。ヴィンスの胸を撫で下ろすため息が聞こえた。

上昇気流に乗って、そのまま塔の周囲を旋回する。地面は敵の兵器や兵隊で黒く埋め尽くされていたが、それらには攻撃しようという動きは無かった。恐らく、今この瞬間この世の全てが静寂なのだろう。ロウは勝手に思っていた。

戦争が終わったのだ……と。

「帰ろう、ヴィンス、サラが待ってる。」

## エピソード

\*\*\*

「……ってな感じで、一応私にもモテ期はあったわけだよ。」

黒髪の艶やかな、小柄な男が溜め息混じりに言った。歳の頃なら、凹凸の少ない顔立ちなので判別が難しいが、単純に見た目で言えば二十代半ばと言った出で立ちで、薄いグレーの長袖Tシャツをゆったりと着こなしている。

「あら、今のお話の中でおじ様のモテ期のお話なんてありませんかしら?」

テーブルを挟み、男の向かいには一人の少女が座っていた。彼女は白く細い指の先でティーポットを持ち上げ二つ分のカップに注いだ。

「いや、サラだって昔は私目当てだったんだから。」

「女々しいですわ、おじ様。おじ様は母様がお好きだったのでしょ?」

彼は、白い陶器製の上品なカップの中身を啜ると再び溜め息を溢した。少女はそんな様子の男を見て俄かに微笑んだ。透き通った白い頬に朱が差す。

彼女の髪は歳にはふさわしくない銀髪、髪質は硬いのか長く伸ばした前髪の根元が立ち上がっており、額の真ん中で分けていた。切

れ長の涼やかな瞳の色はコバルト……アルビノだった。

「……否定はしないし今もそれは変わらないよ。」

「左様でございますか。では惜しむらくは私の容姿が父親似という所ですわね。」

「……。ああ、君の兄上はあんなにも麗しい容姿でどこで何をしているのやら。」

「兄は母様にそっくりで性格は父様にそっくりですものね。」

「ああ……。」

男はこの日三度目の深い溜め息を吐いた。少女はにこにここと微笑み、男を眺めていた。

「アスラ様、落ち込むことはありませんわ。だって私がおりますもの。」

「……そういう訳にもいかないよね？」

「あらアスラ様、貴方の憧れる母様だって、父様とのめぐりめぐり痴態の末に私も兄妹は……。」

「それ以上言わないでください。」

アスラと呼ばれた男はテーブルに額がつきそうなほど大袈裟にうなだれる。少女は自らのカップに二杯目の紅茶を注ぎながら静かに言った。

「アスラ様は乙女ですね。そんなアスラ様が愛しいですわ。」

「頼むよ。冗談は……。」

「冗談ではございません。」

「はいはい。」

アスラが取り合わないでいると少女はむうと頬を膨らませて不満

そつに息を吐いた。

遠く、十年以上先の、昔語りである。

ラストーチカは今はもう役目を終え、不入の塔で深い眠りに  
ついでいる。

遠い未来の遙かな過去の語り草。

## エピソード（後書き）

終わったあああああ！

お付き合いいただきありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5536/>

---

舞う玄鳥は天高く

2011年5月9日07時52分発行